
幽霊洋館ホームレス

徳明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊洋館ホームレス

【Nコード】

N2300W

【作者名】

徳明

【あらすじ】

【洋館の歌姫】という都市伝説で騒がれる一軒の洋館。『オペラを歌う金髪美女の幽霊が出る！』と、近隣住人の間で広まったものだった。だが実際住んでるのは——人間くさい男子高校生2人。彼らはイレギュラーなお屋敷に住みながらも、平和な日常を送っていた。……そんな彼らがユカイな仲間たちと織り成す日常と、ときどきやってくる非日常を描いたおはなし。

プロローグ：噂の幽霊洋館？

《洋館の歌姫》という都市伝説がある。

舞台は東京の郊外、閑静な住宅街が立ち並ぶ中。そこにある一軒の洋館だ。

一般的な一軒家の中で異様さを放つその建物は、鬱蒼と高い木に囲まれている。

朝も夜も明かりが点くことは無く、物音一つしない。

長い間人の住んでいる様子の無い、無人の屋敷である。

しかし帰宅途中、男性は見てしまったのだ。

「真夜中の洋館から歌が響いてきた。オペラのソプラノのような、美しい声だった」

彼はそう神秘的な顔つきで語りだした。

「あまりに綺麗だったから、声のする方を見てしまったんだ。目に入ったバルコニー、そこには当然誰も居ないはずだった。でも、」

そこで彼は頭を抱えると、震えながらに言った。

「居たんだ、確かに。こっちを睨んでくる長い髪の女が……」

瞬く間にこの噂は広がり、多くの人に語り継がれる怪談的都市伝説となった。

— — —
先の見えない、どこまでも続いているような錯覚を起こす廊下。所どころ窓からもれる月明かりが不気味に石床を照らし出す。

ガタ……

そんな中響く音。ここは無人の屋敷のはずである。
リズムはばらばらで、時折大きくガタンと廊下に反響する。廊下には何も変わつた様子は無い。

天井に一定の間隔で吊るされたシャンデリアには蜘蛛の巣が張つていて、どれ一つとして点灯しているものは無かった。

しかし玄関から一番近い部屋のドアが僅かに開いており、光がもれている。光は薄明るく周囲の廊下を照らしていた。
音はそこから聞こえていた。

ガタッ

隙間から覗けば、部屋はぼんやり微かな明かりで染まっていた。手入れのされていない蜘蛛の巣だらけのシャンデリアがチカチカと明滅している。

そこまで広くはないが部屋の真ん中には机が置かれ、簡単な接待室として使われていたようだ。

ガタ……

薄暗い空間の中突然ぬつと何かが現れる。

白い手であつた。

それは震えながら机の裏から上空へ伸びると恨めしそうに机を叩いた。

何かを求めるように机上を搔くがその手は虚しくさ迷うだけで。

ビシッ！

「ギエ！」

再び宙をかいた手が、大きな音を立てて叩き落とされた。恐ろしい声とともに、白い腕は机の裏へと勢いよく戻っていった。

「カタカタガタガタうるせえんだよ！」

コタツから現れた新たな影が机の裏に向かって殴りかかる。大声が部屋に響く。暗く静かだった廊下にも反響した。

「本気で叩くなよクソツたれ！机の上のみかん奥に置くなって言っ
たじゃん！届かないんだよ！」

「おまえには足ってもんがついてんだから寝っ転がって横着してん
じゃねえ、イモ虫野郎！」

部屋から罵声が漏れている。さらにはガタガタとさつきよりも大きな音も響いている。

そこでは壮絶な殴り合いが繰り広げられていた。
机上のみかんを取ろうとして立てた机を叩く音、および揺れが原因

らしい。些細なことである。

言わずもがな、無人のはずの屋敷には人間が住み着いていた。洋館は高い外壁と屋敷を隠すように生い茂った木々に包まれ、隙間から見える出で立ちは昼間でもぞつとする様な薄暗さであった。

しかし鬱蒼とした屋敷の住人は、場違いに騒がしいようで。

どうやら住みついているのは二人で、あまり仲が良いとは言えないようだ。

横着していた男は今や立ち上がり、喧嘩をふっかけてきた相手に掴みかかっていた。体を起こして机に手を伸ばす何倍もの労力を使っていることに怒りのほどが知れる。

先に堪忍袋の緒が切れていた男が、掴みかかっていた元横着者の腕を振り払い、顔面を狙うパンチを繰り出す。

男は軽い動きでそれをかわすと、かわした体勢から素早く殴りかかった。

激しく繰り出された拳を手のなかにあつた本をクッションして男が止めると、殴っていた男がピタと動きを止めた。

「その本、何？」

「やんちゃなマイハニーズ」

ニヤと口の端をあげて表紙を見せる。水着の女性が大きく写っているのが目を引く。

巷で話題のアイドルグループの美少女であった。

「な、どうして……買う金なんて残っていないはず」

「放課後の教室点検で没収した。学校には不必要だからな」

「くっ、さすが学級委員長。後で見せて」

夜の廊下に静けさが戻っていく。恐ろしいほどの防音構造を誇る奇妙な洋館は、今日も音沙汰無く住人が居るとは微塵も感じさせなかった。

外は11月の冷えた風が吹き、生い茂った木々を不気味に揺らしていた。

いつから建っているか分からない古びた洋館は、毎日変わることなく時間が止まったように存在していた。

だが町に生まれた小さな都市伝説によって、洋館の不思議な日常は変化を迎えることとなる。

1話：THE平和な学園生活

「おい昨日俺が机ん中置いてったヤンマーしらね？」

「そりゃ没収だろ、残念」

「何それ天気予報？」

平成高校2年A組。

朝7時50分、ほとんどの生徒が集まる朝の教室は絶えず賑やかだ。

「萩原、これ提出物」

「おまえのなんかいらん」

「いやいや、仕事しろし」

それでもなおやる気を見せようとしないこの男、萩原豊はこのクラスの学級委員である。

自然に整えられた黒髪と、完璧に規定を守って着られたブレザー。

学級委員というだけあって爽やかさと清潔さを感じさせる風体ではあった。

ギョロリとした意志の強そうな目がただの優等生で無いことを語っているようではあるが。

教室出入り口の傍の列、前から二番目に座ったそんな彼は、見た目とは裏腹に微塵も真摯さを感じさせなかった。

ただ椅子にふんぞり返って座っている様子は無駄に偉そうではあったが。

「はいはい、萩原がいらないそうなので私が貰います。ちょうどいい、谷」

呆れた眼差しの男の手から、ピツと音を立ててプリントが取られる。驚いて後ろを見れば微笑しておはよ、と呟く副学級委員、友野と目があつた。

「ああトモネエか。よう」

トモネエと言われた彼女はすぐそばの学級委員の集めた倍ほどのプリントを手元に持っていた。

それを見て、挨拶した男が横目で萩原を見れば、相変わらずふんぞり返ったままよう、と片手を挙げたところだった。

「おまえもはたらけっ」

ぱし、とプリントの束で萩原の頭を叩くと、友野は小さくため息をついて身を翻した。

長い黒髪をなびかせて離れていく彼女の手には、分厚くなった提出物の束が揺れていた。

姿勢の良いすつとした姿に、キリツとした目元の整った顔立ちの美人。

そして一部の伸びた前髪を編み込みして脇へ流した髪型が彼女のトレードマークである。

態度、外見ともにまさしく統率者としてふさわしいカリスマを感じさせた。

どうやらしっかり者の性格が学級委員のだらけを更に呼ぶ結果となつたようだが。

「おい、副学級委員が全部仕事やってんぞ」

「それがこのクラスの在り方じゃねえか。すばらしいな」

「ああそうですね。……お前ちよつとはやる気出せよ」

ちなみに先ほどからツツコミを繰り返す彼は谷という。

人のよさそうな雰囲気も相まって、見事な苦勞人体質である。焦げ茶の短髪で、典型的な男子学生を模したような外見である。

呆れ顔で萩原と話していた彼だったが、ふと目の前の廊下側窓に視線を移した。

閉めているにも関わらずバタバタと音を立てて近づく大きな足音が聞こえたからだ。

「遅刻だああ！」

ガララツと開け放たれたドアから弾丸のように何かが飛び込んできた。

「きゃ！」

それは飛び込んだ先にいた学生の背中に衝突し、手から大量のプリントがばらまかれた。

突然のタツクルに学生の体は勢いよく吹っ飛んで行く。

「あれ？まだ5分ある」

飛び込んで来たのは少女だった。

衝突現場で倒れこんだ彼女は顔を上げ時計を見ると、クリクリした大粒の目を更に大きくさせた。

「恵、言いたいのはそれだけ？」

少女の視界をさえぎるように、ゆっくりと影が立ちはだかった。吹き飛ばされた被害者〃友野光である。

彼女は頬をヒクリとさせ目の前の加害者を見下ろしていた。

「…おはよう、光！」

立ち上がると、恵と呼ばれた少女は少し日焼けした肌に映える満面の笑みで挨拶をする。白い八重歯がまぶしい。
が、もちろん返事はない。

睨み付ける友野に物怖じもせず、恵は彼女の目を見ると悪戯っぽく笑い、べっと舌を出して走りだした。

「謝りなさい！このバカ！」

友野も風を切って揺れる黒いポニーテールを追いかけて走りだす。

登校早々、喧嘩を始めた彼女たち。2人とも苗字は友野である。しかも生まれた日にちもまったく一緒だ。

まったく似ていないし、本人の口から双子だと公言されたわけでは無かったが、A組の凸凹双子姉妹と名は知れていた。

彼女らの喧嘩は、始まると誰も手を付けられないというのがクラス内での常識となっている。

そう、気が済むまで勝手にやらせておくのが一番の得策だというのだ。

「プリントまだの人居ないよなー？あ、トモウトか……提出してから喧嘩しろよ……なあ？」

散らばったプリントを集めると、やる気無い声で萩原が仕事を始めた。

こうなると学級委員も働かざるを得ないのである。ブツブツと近く
の席の生徒に愚痴を零しながら呼びかけをする。

主に男子からトモネエとトモウトと呼ばれる姉妹の喧嘩は、大抵が
周囲に迷惑をかける結果となる。

止めようと関われば怒りの捌け口にされるのは目に見えている。そのため皆苦笑いで目を背けているのだ。

しかし彼女らの喧嘩にも敵わないものはある。

キンコンカンコンコン・・・

「席に着いて……！」

「席に着け……！」

ガタガタガタッ！

チャイムとともに委員二人の叫びに近い声が響くと、訓練された兵士のように迅速に少女少女らは動いた。鋭い目で目的地（自分の席）を目指す様は圧巻だった。

まるでチャイムはミサイル投下を告げるサイレンのようだった。

前方入り口から最後に入ってきた恵が、必死の形相でガラガラとド

アを閉める。

席へと駆け込むと同時に、閉めたばかりのドアが再び開いた。

「おはようございます。では点呼をとりますね」

しんとした教室に微笑みながら教師が入ってくる。

ちなみにこのクラスにとつてのチャイムの存在をサイレンに変えたのも、ただでさえ良いクラス成績を格段に上げたのも彼女である。

耳の下までほどのボブヘアに柔和なつくりの顔はまだ若く美しい。縁なしの眼鏡をかけて微笑む表情は知的で優しい印象を与えた。

しかしそれは何か媒体をはさんで彼女が他人に与える印象に過ぎない。

実際に彼女を前にすると、オーラというか雰囲気というか何か言い知れないものがピリピリとした空気をつくっていた。

常に穏やかな表情にも関わらず、傍によると気を張ってしまう。

教師としての手腕は確かで生徒や同僚にまで恐れられ、特に生徒の間では鬼だのと化け物扱いをされていた。

「藤井」

「はい」

「谷」

「はい」

「月島」

「あゝ あい」

空いていた教室のドアから体を半分出して、そこから一番近い机の

脚にしがみ付いている生徒から苦しげなうめき声が聞こえた。

寝癖なのかあえてのセットなのか分からない茶髪頭は教師が近づいて来たにも関わらず、激しい呼吸音と共に床を向いていた。

「朝から全力疾走ですか？月島」

「……あゝい」

「名字が相川じゃなくてよかったですね、点呼で最初に呼ばれてたらもう貴方5回の遅刻ですよ」

「あゝい」

苦しげに肩で呼吸をしながらやつとのことガタガタと席に着く。

「というか、不公平なことに気付いたから明日から相川基準制にするから気を付けてください」

「あゝい……え？」

「相川以降に来たら遅刻っただけです。遅刻しなきゃ済むんだから大丈夫ですよ。でも……守れなかったら、わかりますね？」

そう言った彼女から有無を言わせないオーラと満面の笑みを向けられる。

反抗する気など彼には元より無かったが、突きつけられた現状に思わず間抜け面で言葉を無くした。

満足げにそれを見ると教師は教壇へと戻っていく。

月島はぼんやりとした目をさらに虚ろにさせると机の上を呆然と見つめた。

「……鬼畜女教師」

点呼が続く中、誰にも聞こえない声でぼそりと彼は呟いた。
今回の件は鬼畜でもなんでも無く当然のことに用に思えるが。

これが少し変わった2年A組——特進クラスの日常である。

2話：洋館の朝 side H

朝日が照らす住宅街から生活音が聞こえだす頃、木々に覆われた洋館は変わらず鬱蒼として物音一つ聞こえない。

しかしそれは徹底的な防音構造によって阻まれているだけである。

ジリリリリリッ！！

騒音をたてながら、屋敷の朝はコタツから始まる。

携帯アラームを消してコタツから這い出た萩原豊はゆっくり立ち上がった。

彼の布団を兼ねるこの洋間のコタツは7月から9月までの3ヶ月間以外出しっ放しとなっていた。

因みに11月の今となると、彼は屋敷にいる間のほとんどをコタツの中で過ごす。

今は巢から抜け出して活動中の貴重なシーンである。全体的にボサボサとした姿をしており重たげな足取りで歩く姿が見られる。

そのまま部屋の奥から繋がったキッチンへ行き、ヤカンに火をかけてからはテキパキと朝の支度を進めていく。

洗顔した顔から水を滴らせながら炊飯器を確認すると、思いのほか量が少ないことに気付き眉間に皺を寄せる。

しかし躊躇わず杓文字を手につくと大雑把に弁当箱と茶碗に盛り付けた。

ちなみに今日の弁当メニューは弁当箱一面の肉無し牛丼（つまり玉葱と汁のみ）だ。

肉無し牛丼はこの屋敷の定番メニューで、手軽でお安く作れるジュシーなおかずとして愛されている。

ヤカンで沸かしたお湯で紅茶を入れ、白米だけという質素な食事をとる。

米を買うのに必死な生活をしていた。玉葱も安売りの日に離れたスーパーへ足を向け主婦の猛攻から勝ち取ったものだった。

紅茶はずっと前人付き合いで行ったファミリーレストランのドリンクバーから山ほど拝借したものだ。

なんと屋敷に住んでいるにも関わらず住人は節約を強要される大貧乏だったのだ。

歯磨きをしながらコタツのあるリビングへと戻る。

カーテンが締めっきりの窓の下に目をやると、そこには布に包まれた細長い物体が転がっていた。まるで作られたばかりのミイラである。

歯を磨いたまま無表情でその物体へ近付くとドス、と蹴りとばした。ごろりと一回転したのを一瞥すると萩原はキッチンへと戻っていく。物体は一度もぞと大きく動くと、勢い良くバサリと表面に巻かれていた布団が剥がれた。

中から現れたのはなんと生きた人間であった。

そのまま目を閉じ死んだように固まっているそれを通りすぎ、萩原は部屋の外へ出てすぐの広い玄関ホールへ向かった。

「行つてきます」

義務だと言わんばかりの無愛想な言葉が広い玄関に反響する。

装飾の凝った大きな扉がギイイと軋みながら開くと暗い室内に眩しい光が差し込んだ。

玄関を出ると一応、庭と言える所に出る。枯れ草に覆われた、管理も何もされていない場所であったが。

手入れされていない茶色の草は伸び放題で、外壁に沿って立つ常緑

樹たちは鬱蒼と生い茂っていた。

庭といえば思い浮かぶ花々やテーブル、ベンチはひとつも無い。伸びきった草原の中、踏みならされた草が通路のようになっていて萩原がその上をざくざくと歩いていく。

しばらく枯れ草の中を歩いていると外壁沿いの木々が一ヶ所欠けている場所へと着いた。

そこにはぼつかりとトンネルが出来ていた。

壁が高くトンネルの上が何かは確認できないが、地理的に民家が建っているところの屋敷の住人は知っていた。

トンネルの中はジメジメとしており、さらに真っ暗であった。だが萩原は慣れたもので明かりも点けずに進んでいく。

しばらく歩くと真っ暗な中、階段が見えた。階段の先はトンネルの天井で、人一人分くらいの大きさの穴が正方形に開いていた。

なんと高く伸びた階段は、屋敷の2階と同じ高さに造られた場所と繋がっていた。

階段を上るとそこは15畳はあろうかという大部屋だった。そのど真ん中に穴が開いており階段と繋がっていた。

何もないガラリとした部屋で、白い壁に白い床という恐ろしくシンブルな空間だった。

掃除をしていないためか少し埃がたまっている。部屋には明かりが無い上に、窓はカーテンが閉まっている。

そのため朝だというのに薄暗い。

部屋にはドアが一つしか無い。

萩原は鍵の掛かったドアを開けて外に出た。

ガチャ

そこは一軒家が立ち並ぶ住宅街だった。ちなみに屋敷は2、3軒離

れた先に見える。

まさかこの男子高校生が屋敷に無断で隠れ住む住人だとは思えない。見事なカモフラージュである。

そもそも今出てきた15畳の部屋に住むことが出来れば苦労はないのだが、残念なことに電気がまったく通っていないのであった。

暗闇に慣れた目をしばつかせながら鍵を閉める。朝日が目に沁みた。まだ時間に余裕があるのかのろのろと住宅街を歩いていく。

「おはよう」

駅の大通りとぶつかる場所では、電車通学の生徒と遭遇することが多い。

まだ早い時間にも関わらず萩原は声をかけられた。

「なんだ委員長か、よう」

「委員長はあんたでしょうが」

ジツツとした目をして話しかけてくるのは友野光だ。

「そんなゆっくり歩いて委員会議遅刻しないでよ」

「小言ばっかだなあいつ」

早足で遠ざかっていく姿勢の良い背中。それを見送りながらため息まじりに萩原は言った。

ちなみにこの後萩原は委員会にギリギリ遅刻した。

3 話：洋館の朝 s i d e T

ブーツブーツ

「うわ」

突如耳元でバイブが鳴り月島は飛び起きる。

「何だメルマガか」

と小さく呟いたあと携帯画面の時計を見て息を飲む。

7：45

・学校まで徒歩約20分

・8時00分HR

血の気が引いていく音がした。

「相川基準制……くそっ！」

自分の点呼に間に合うかも危うい状況であるのに、携帯を閉じながらそう苦々しく吐き捨てる。

悔やんでいる場合ではない。彼は決意したように顔を上げ、窓下の寢床から勢いよく立ち上がった。

そしてポイポイと服を脱ぐと、枕元にあったシワの寄った制服を大雑把に羽織る。

ズボンに足を突っ込み右手で引っ張り上げ携帯電話を左手に持ち、飛び跳ねて穿きながら前へ進む。

「ごすっ

「……っつー!!」

タンスに足の小指をぶつけてしまった。足先から全身へ伝わる電流のような痛みにも声も出さず転げ回る。タイムロスである。

ふらつきながらキッチンまで行くと流し台から弁当箱を取り、炊飯器からありったけの米をつめる。箱半分程度にしかならなかった。

「くそ！」

流し台を拳で殴り付け八つ当たりをしてからペットボトル一杯に水道水を入れる。

少し遠くに転がっていた鞆に弁当箱と共に放り投げつつ、即座に走り近付き鞆を引きあげる。

床に転がる衣類を蹴散らしながら玄関へと向かう。

「つてきます！」

重いドアを開け朝日に目を瞬かせながらやけになったように言う。草むらを抜けトンネルを抜け、全速力で長い階段を昇り切る。彼もまたこの洋館の住人のようで行動には迷いがなかった。

「うっえ」

張り付いた喉に耐え切れずここで給水ポイント。開きっぱなしだった鞆からペットボトルを引っ張り出す。

一気に四分の一ほど飲み干し、むせ返りながら携帯を見る。

7：49

「やべ！」

慌てて部屋を出て鍵をかける。

足踏みをしながらかチャカチャと必死の形相で戸締りをする彼を、小学生が不思議そうに見ていた。

7：56 校門前

「頑張れよー」

守衛のおじさんの劳いの言葉を受けながら息をつく間も無く走り抜ける。

校舎内、ここからが最難関スポットだ。

2年A組は3階にある。

容赦の無い山のような階段を呼吸も荒く血走った目で上る。

目的地に向かうにつれ、足取りは段々と重くなる。

「げほっ」

ガラララッ

「あ、よう」

「あ、おはよ」

7：59

よろよろと教室へ入ってきた彼を迎えたのは谷とその嫁、藤井の挨拶であった。

この二人、誰が見ても両思いなのは丸わかりなのだが、奥手で鈍感な当人たちだけはお互いに気持ちを伝えられず、お互いの好意も汲み取れていない。

そんな状態の続く、周りからすれば「いいからもう早くくつつけよ」という関係なのである。

時折、交際相手の居ない者にとって毒でしかない、甘酸っぱい青春オーラを放出するので実に厄介なのである。

そしてその青春は現在進行形であつたらしく、なにやら慌てて身を離れた。

まあとにかく疲れ果てた自分を迎えたのはそんな彼らであることに、月島は登校早々大きな敗北感と絶望感に包まれ、思わず教室から出て行こうとする。

「くっそ……朝から見せ付けやがって……こんなクラス出てってや、うぐふッ……!」

ドゴッ……!!

突如響き渡った轟音に教室がしん、と静まり返り一斉に音の発生源に注目する。

「あ、葵!? え、ごめん!」

教室の入り口に立ち尽くすパジャマ姿の少女、友野恵が困り顔で言う。

目の前には地べたで丸くなった月島が、鳩尾を押さえて小刻みに震えている。

チャイムぎりぎり、駆け込んだ恵の左拳が彼の急所へとクリーンヒットしたらしい。同時に鞆も当たったようだ。

「何だついに衝突したか」

「二大駆け込み遅刻組め」

そんな言葉やため息が飛び交い、教室が再びざわつき出す。
想定内の事件だった。

「まじでごめんなさい、さすがに今のは痛いですよね」

そう呟きながら、動かない月島を助け起こそうとしたところでチャイムが鳴った。

ようやく起き上がり、俯けていた顔を上げた月島が、文句を言おうと口を開きかけて固まる。視線は恵ではなく、上方へと向いていた。

「え、何？」

視線の先、恵が振り替えると微笑を浮かべた教師が見下ろしていた。

「とものさん」

ひょつ、と飛び跳ねて立ち上がると顔を強ばらせながら恵は自分の席に逃げ込んだ。

まるで追い込まれた小動物の動きであった。

一つ前の席で双子の片割れの光がため息をついていた。

その右隣の席で月島は何事も無かったように座っていた。

4話：学校新聞

HRの終わった教室から急ぎ足で出ていく生徒がいた。パジャマ登校という暴挙を遂げた双子の片割れである。

「恵」

その腕を掴まれる。

「光、着替えに行かないと」

「今日は珍しく早めに起きてたのに何でそうだったの」

眉間にシワを寄せて探るように、光は恵のくりつとした黒い瞳を見た。

それを避けるように恵は俯くと視線を足元へと向けた。

「……リムーン」

「え？」

「プリムーンが気になって全部見ちゃったの」

光が呆れ顔になって掴んでいた手をはなすと、恵は口を尖らせて拗ねたように教室から出ていった。

「プリムーンって私らが小学校の時やってたアレだよね？再放送やつてるんだあ」

そう言いながら近づいてきたのは、谷の嫁であり二人の親友でもある、藤井さんである。

「そう朝早くにね。まったくあのバカ。あんなことばっかやってたら、このクラスから強制左遷されちゃうのに」

一応、優秀児しか居られないクラスだ。生活態度がペナルティを受ける程になったら即退出である。

ペナルティの定義が怪しく、パジャマ登校は見逃される変態学校ではあるが。

「まあ何だかんだで、遅刻はしてないから平気だと思うよ」

どうやら無断遅刻1回はアウトらしい。

「そうだね何だかんだで大丈夫だもんね、心配する時間がもつたいないよね」

とため息をつき苦笑いをして光は言った。

学年トップの座を争う成績を持つしっかり者の光、温和な努力家少女藤井、ギリギリ滑り込み特進クラスの活発少女恵。

そんな双子と藤井は特進クラスで出会って以来、長い付き合いの仲良しトリオである。

「でも前から聞きたかったんだけど……2人の家って神社なんだよね？朝早くに起こされたりしないの？」

「ないない。私たちにはそんな厳しくないから。あれでしょ、掃除とか修行とかあると思ってたでしょ」

「うん思ってた。へー、ないんだ」

「うん。私の朝の仕事は恵を起こすことだけ。あんま意味無いみたいけど」

この友野姉妹、神社の家の双子の娘というおいしいパーソナリティの持ち主だ。

その情報が広まった当初、どこぞのラッキースターな紫色の髪の姉妹を彷彿させると一部生徒の間で話題になったが、本人たちは知る由もない。

「でも理想的な姉と妹だよねえ、光と恵って」

「え？理想的って何が？私、恵のお姉ちゃんだなんて言っただけのことあったっけ」

「ええ？！なにを今さらっ！じゃあ恵がお姉ちゃんなの？！」

「さて、どうでしょう」

友野姉でトモネエ、友野妹でトモウト。

もしも姉妹関係が逆ならば、この浸透しているあだ名も逆になり紛らわしいこととなる。

そんなことを考えた藤井は、驚いた顔で光を見る。

見れば目の前、唇に人差し指を当て、にまりと悪戯っぽく笑う光の様子にため息をついた。

「はあ、もう。私が信じやすいのを弄って遊ばないでよ。今さら恵がお姉ちゃんだなんて言っても……」

「あれ？やだな、何勝手に納得してるの？どっちが姉かって、まだ私言ってないよ？」

「もういいの、もう決定なの！私があなを姉だと認めます」

自棄になったように声を張り上げて藤井がそう言った瞬間、ぴょこんと彼女の脇に何かが現れた。

「あなを姉だと認めますだって？知らなかったー、りっちゃんが光の妹だったなんて！ようこそ友野家へ！」

着替えを終えて教室へ戻ってきた恵であった。

話の輪に入るなりパジャマを抱えながら素っ頓狂なことを言う。

時間のかかる女子の制服を1分で着替えるという荒業をした彼女は、乱雑に脱いだ上着が引っかけたのか戦国の落ち武者のように髪が荒れていた。

「いやいや、光の妹は恵しかありませんよ。だから早くお姉さんにブラシを貸してもらいなさい、落ち武者系妹」

「お、落ち武者系妹?!」

昼休み。今日は藤井さんの手作り弁当が振る舞われる『ハッピーフ

ライダー』であった。

本来、谷の為だけに弁当を作ってきた彼女だったが（ここまで
していて恋人ではない）、萩原と月島の弁当内容を見て開催を決意
したようだ。

「そのお弁当、健康状態に影響するよ……」

弁当箱一面に、方やもし、方や白菜がただただ広がっているのを
目撃した藤井は、顔を青くしておかずの提供を提案した。

たとえ憐れみによる親切だろうと、貧乏二人は栄養源を取る貴重な
チャンスに、恥じる素振りも無く食い付いた。

むしろ彼女のいない彼らにとっては、谷・藤井カップルの邪魔する
事が出来るとご満悦であった。

「誰にも食わせたく無かったのにな」

「はは、ざまあ。そう簡単に幸せを掴ませてたまるか」

といった具合に。

月9や少女漫画で居る二人の恋路を邪魔するライバルキャラを、身
近な友人である彼らはまんまと果たしていた。

そんな折で週にこの日だけは、男女混合の6人で弁当を突いていた。
普段は男女バラバラで食べており、女子が友野姉妹と藤井、男子が
萩原と月島と谷といったメンバーである。

「おい月島。今日の弁当一段と酷いけど、どうした」

「白米オンリーはいいとして何だよその少なさ」

同情の瞳を向ける谷と、ニヤニヤと月島の弁当を覗き込む萩原。

食堂の喧騒の中、彼らは藤井の弁当の到着を準備をしながら待っていた。

「はっは、谷ー、そんな目で見たってあげないぞ。いや、なんか今日はやたら米の残量が少なくてさ」

「あわれすぎて貰えるわけがない。特に今日は……」

やけくそ気味の笑みを浮かべる月島に谷がそう呟くと、混みあう通路を抜けてこちらに人が向かってきた。

「ごめん、萩原と月島。朝寝坊してお弁当作って来れなかった」

集合場所に着くなり、申し訳なさそうに藤井は言った。

「そっか、だから朝来るの、割とギリギリだったんだ」

藤井の隣で、弁当を包みからだしている光が納得している。

「えー、りっちゃんが寝坊とか！今日何か悪いことあるんじゃないの！」

さらにその隣に腰掛けながら恵が目を丸くした。

悪いことならもうあっただと小さく呟き、月島がため息をついた。

「何か悪いことって、不吉なこと言わないでよ……あ！」

藤井はピタと表情を固めてから、ハッと息をのんだ。

「新聞制作会議！忘れてた！もう少ししたらミーティングルーム行

かなきや」

珍しく慌てた様子で口元を押さえる藤井を見て、谷が気持ちの悪いニヤリとした笑顔を浮かべる。

普段おつとりにこにこした想い人の焦った表情に辛抱堪らんという状態である。

彼は惣菜パンを袋から出し、ニヤニヤとしたまま口を開いた。

「おお頑張れ。今回の新聞ネタ、夏に向けたホラー特集らしいじゃん」

「……え？」

聞いてない、といった風に藤井は顔を青ざめさせた。

「え？藤井が知らないの？ちよ、月島全部は持ってくな、俺のメシ」

話を聞いちゃいない月島が、谷の手にある惣菜パンをがつつりむしりつつていた。

おそらく二人のイチヤついたオーラの腹いせも混じっているのだろう。

「ホラー……なの？」

「ああそつだ。こんな噂があるらしいんだが、知ってるか」

怯えた様子の藤井に気持ちの悪いニヤケ笑いが治まらない谷が、どこから仕入れたのか、新聞制作委員の藤井自身すら知らない新聞ネタのタネを話し出す。

「謎の洋館の噂。学校から少し行った所に無人のお屋敷があるんだ

と」

玉葱丼を咀嚼していた萩原と、谷から奪ったパンを手にした月島が、一瞬視線を交錯させる。

「そこで生幽霊をうちの学校の生徒が見ちゃったんだってさ。前から噂はあったみたいだけど、生で！」

「そんな噂あったのか？知らなかった」

萩原の発言に谷以外の全員が頷く。

「どんなん？」

「萩原も月島もこの辺住んでるのに知らないのかよ。何かその無人屋敷、夜中にオペラ歌ってる髪の長い女の霊が出るんだとさ」

「はーん、ありがちな」

「絶対やだ……みんなに話してそんな特集やめさせてくる！」

そついうと、食堂から脱兎のごとく藤井は走り去っていった。

「藤井はホラー全然駄目なんだねありゃ。友野姉妹は？」

月島が視線を向けると、双子はケロリとしていた。

「完璧作り話でしょ、ありえない」

「あんまりっちゃん怖がらしちゃダメだよ」

100パーセント信じていないようで、黙々と食事を続けている。

「ずいぶんバツサリだな。神社の娘なのに超常現象信じてないのか」

「いや誰だつて信じないだろ、そんな空気読んだような、都合のいいお化けの話」

「いやわかんないよ豊。この双子実際見ちゃったりすると発狂するタイプかもしれない」

そんな話をしながら、萩原と月島はホラーとは別の意味で内心困惑していた。

2人はもちろん、その話題の洋館に無断で居候していることを誰にも言つてなかった。

無断居住がバレたら多分、警察沙汰になるだろうと考えていた。

信頼できる仲間内には言つてもいいだろうに、と思うところだが、言つたところで自分達にとって損でしかないと考えていた。

気兼ねなく話せる相手に親が居ないのを心配され、同情的な目で見られることなんて考えるだけで寒気がした。

そんな情けない思いをしたくないという、プライドの壁が何よりも大きいようだ。

（面倒なことになったな。謎のお屋敷に噂は付き物だもんな）

（オペラ女つて……まあ、住んでるのが、まさかこんな高校生だとは思わないよな）

困惑のポイントがずれている奴が約一名。

昼休みギリギリになって教室に帰ってきた藤井は疲れきった顔で席についた。

それを見た隣の席の谷と、前の席の恵が哀れみの視線を送る。

「どうだったりっちゃん？やっぱりホラー特集だった？」

「うん……。そんなんやつても楽しくないからやめようって言ったのに、全く聞く耳持たない」

「他の新聞制作担当、そういうの好きそうな奴多いもんな」

はあ、と藤井がため息を吐いていると、外に設置されたロッカーへ荷物を取りに行っていた光が戻ってきた。

「あ、お帰り律子！お疲れー……。顔が疲労感で大変なことに」

「ただいま光……。それであの人ら、すごいこと言いだしたの」

いつの間にやら萩原と月島も藤井の席に集まり、興味深げな顔で話を聞く。

「今日の夜、屋敷にお邪魔するって」

「へえ。俺らバイト行くのにその屋敷のあたり通るから会うかもな。何時って言ってた？」

「夜のがいいからって7時とか言ってたから、多分会わないんじゃない？」

「無駄な努力するな！。万が一会ったら、お前ら早く帰って勉強しろって言っとくよ」

「お前には言われたくないと思う」

全員から鋭い視線を浴びせられた月島は、チャイムと共に逃げるように集団から離れた。

5 話：襲来！学校新聞スクープ隊

「あら、おかえりなさい」

「こんばんわっす」

「どもー」

玄関前、しとやかな笑顔で挨拶をしてきた隣人に、萩原と月島は目を丸くした。

声をかけた老夫人は腕に3つずつスーパーの袋をぶら下げている。それをもろともせず、テキパキと鍵を開けて家に入っていた。

「遠野さんまじすげーな。アレで73つて。見えねえ」

「旦那と仲良くやってるからじゃない」

「色んな意味で？」

「色んな意味で」

「73でそれはさすがにないだろ」

カチャリと玄関の鍵が開き、のろのろと家に入る。

ボタン

「お前、夜中に窓開けたままAVかなんか見ただろ！だからあんな噂！」

「米入れすぎなんだよ！適当に入れんなよ！お釜の残量の半分までにしろって言ったじゃん！」

ドアを閉めた途端、同時に二人が怒鳴りはじめた。
無機質な15畳の広い空間にわんわんと響き渡る。

「今はそんな話問題じゃねえんだよ！」

「オペラ声で喘ぐAVなんて誰が見んだ！そんなのもうお笑いDV
Dじゃんか！」

「じゃあなんだってんだ！」

「せめて実物女の子連れ込んだとか……なんかそういう発想は無い
んか！」

「1ミリも思いつかなかった」

素早く、きつぱりとしたその言葉は試合終了のゴングだった。

「……女らしい女に知り合い居ないしな」

「週5バイトやめたい。彼女付きの奴の側に居るのも……何か吸い
取られてんだ多分」

熱戦は、まさかの引き分けである。諸刃の剣だったようだ。
熱い言い争いから一転、葬式のようなムードにまで落ちる2人だった。

「まあ、今大事なのはそんな話題じゃ無いっしょ」

「ああ。今大事なのは7時対策だ。新聞取材に来る馬鹿たちをどうやり過ごすか、だ」

「今日はバイトも無いし見張ってられるからよかった」

そして疲れた目のまま、気合いの入ったような声をだすのだった。

「と言っても何もしないのが一番の対策だろうな！」

「取材も何もインターホンどころか入り口すら無いしね！」

先に述べた通り、このお屋敷の周辺のみ謎の地盤沈下を起こしているため、正門は周囲の家よりも断然低い所にある。

端から見ても、一面の外壁と生い茂った高い木に囲まれていて、中に入りようも無いのだ。

「はあ……でもめんどくさい噂がたつちまったな、オペラ座の洋館的な」

「いいネタになりそうな物騒屋敷だもんね」

気分の浮かない二人は、静かに暗い階段を降りていった。

19時近く、屋敷外

3人の人影が屋敷を見上げて佇んでいた。

「んー、思ってたよりはちっさい！もっとお城みたいなのかと思ってたのに！」

夜空の下鬱蒼とした屋敷には似つかわしくない明るい声が響いた。ふわふわとした髪の小柄な少女が、眼鏡の下の気の強そうな目を輝かせている。

「入り口どこだ？」

中肉中背、こちらも眼鏡のインドア系男子がそわそわと首から下げたカメラを弄っている。

「いろいろ見てみればいいでしょ！ほら歩く歩く！」

そう言う眼鏡の少女は二人の手を引いて歩きだす。

携帯電話を弄っていたもう一人の男子は突然引かれてつんのめっていた。

「入り口ねえってなって、さっさと帰ってくれるよね」

月島は布団の中、光がもれないように携帯を弄りながら呟いた。外壁と大木ガードがあるにしろ、万が一に備え部屋の電気を消していた。

さらに億が一ガードを突破し、屋敷へ近づいてきたときの足音を聞くため、窓を少しだけ開けていた。

「誰来んだっけ？ 藤井以外だよな？」

こちらは炬燵から頭だけを出して携帯を弄る萩原だ。どうやら藤井は恐怖心から取材への参加を辞退したらしい。

「もう一人の新聞製作係と、文化委員と、写真部じゃん？」

「写真部ってヤバくねえか。大宮だろ？ あの空気読まなさトップクラスの。それに、もう一人の製作係はあれだ、えーっと女子の……磯野だ」

「あー、あの好奇心の塊。で、文化委員は笹島か」

「笹島に良識があるとは思えない」

「ですよね」

「ダメだ、壁しかない。入り口が無いなんてどうなってんだ。どうする？」

ぐるりと外壁を一周した彼らは隣家との隙間、細い路地で立ち往生していた。

ここが一番近づける良いアングルだった大宮が、外壁越しの洋館をカメラでひたすら撮りながらそう聞いた。

「よし、へいを乗り越えるっ」

磯野はふわりと髪を揺らしながら大きく頷くと、真っすぐな瞳でそびえ立つ壁を見た。

「へえ、頑張れ」

携帯を弄る手を止めず他人事のように笹島が言った。洒落のつもりだとしたら酷すぎる切り返しである。

「あんたたちが登んのよ」

「え？」

信じられないことを聞いたかのように、笹島は目を丸くして間拔けな声をあげた。

実際彼にとって信じられないことなのだから仕方ない。

「それしか方法無いもんな……よし！俺から行くよ」

普通なら諦めて帰るところである。

だがしかし大宮はそう言いカメラをブレザーの内側にしまい込むと、意気揚々とした様子で上下に揺れ反動をつける。

そして運動音痴そつな見ためとは裏腹に、マサイ族も吃驚のバネで高く跳びあがった。

壁は大宮の背をゆうに超えているが、軽々と天辺に手をかけてよじ登る。

「おおー」

地上から磯野と笹島の感嘆の声があがる。

始めは冗談のつもりで塀を乗り越えることを提案した磯野であったが、大宮の勇姿に本気にするなというツツコミも忘れて感嘆の声を上げていた。

何を隠そう、大宮はただのインドア写真オタクではなく、隠れマツチヨ高校生であったのだ。毎日の筋トレが日課だ。

塀の上の限られた足場で前傾姿勢をとりながら、チャツと片手を拳げる。

地上の二人が片手を挙げかえすのを見てから、忍者のように軽い動きで壁の向こうへと消えた。

ドサツ！！ズザザザツ！ザザツ……

大きな衝撃音、それから草と何かが擦れる音。

屋敷の中、窓を暗くしていた木の影が大きくゆらりと揺れた。

「なんだ？」

萩原が携帯を弄る手を止めて顔を上げる。

そして様子を伺うために、僅かに開けた窓の隙間に向かってにじり

寄る。

月島は布団から出した首を窓に向けて硬直している。

「この前は猫だったよね。猫だきつと猫」

「どんな巨大猫だよ。あんなでつかい音立てて落ちてくるなんてどんな化け猫……」

その時、辺りが一瞬明るく光った。

今度は二人とも硬直して窓の外を見る。

耳をそばだてて小さな音をも聞き逃さんと、表情は強張っている。しかし耳に入るのは、風でカサカサと小さく揺れる木の葉の音だけだった。

「光る猫だ。新種に違いない」

「萩原氏、現実逃避は止めようか。絶対落ちたよ。とりあえず上に行ってみよう。ジャンケンで、負けた方が」

「くそ。面倒くさいことになったな。あとの一人はこっち待機だな。よいいくぞ」

「「最初はグッ！ジャンケン……」」

屋敷の外では、大宮が降りた先から思わぬ音が聞こえてきたことに

驚いていた。

無事に着地したとは思えない衝撃音であった。

「やだっ、大宮！大丈夫？！」

外壁越しに磯野が跳ねながら焦った声をあげる。

「わっ、何も見えない……大宮！大丈夫か！」

何とか高い塀によじ登って身を乗り出しながら、笹島も必死に声をあげた。

「大宮！」

二人の焦った声が塀の下の暗闇に消えていく。
生い茂った木の葉がざわざわと音を立てて、二人の不安を煽る。

「だいじょぶだー……」

微かに聞こえた声に笹島が気付きハツとした。
地上にいた磯野には聞こえていないらしくまだ騒ぎ続けている。

「磯野、静かに！大宮？ホントか？！動けるか！」

「何とか動く……折れては無いつば……」

「わかった！そこで待つてろ！何か、何とかするから！」

そう言って塀の上から戻ってきた笹島を磯野は心配そうな面持ちで見つめる。

「何とか動けるって」

「良かった……じゃあ梯子が何か持ってこないと!」

「結構長くないと足りなそうだけど、そんな梯子どこに」

「……警察になら、きっと」

磯野は真剣な顔で言い放った。

それは現状を警察に話し、大宮を救出してもらうべきだという提案であった。

賛同すれば大ことになること必至のその提案に笹島は一瞬目を丸くするが、決意したように口を引き結ぶと頷いた。

「笹島は壁登って大宮のこと見てあげてて? 私が梯子貰いに行ってくる」

「そうだな。何かあったら連絡するから磯野の携番教えて」

そうして強張った顔つきのまま、鞆から携帯電話を引っ張り出す。男女のメアド交換にしてはなかなかシユールな例である。

「何してんの? おまえら」

だからこれは当然の疑問だ。

路地から漏れた光を辿って見れば、照らされて浮かび上がっていたのは知り合い。

それが恐ろしく神妙な顔で携帯電話をくっつけ合っている。思いがけない光景を前にして、通りすがった萩原は心からの質問を

した。

「萩原?! え、なんで」

「え、うん萩原。この近所に俺のバイト先あんだけど、行ったら今日シフトチェンジした日だったんだよ。お二人は何? こんな夜に…
…やだわあ」

即席の嘘をかましつつ二人に近づく。緊迫した空気を感じながらもふざけた口調で対応する。

「違うちがう! このお屋敷に取材しに来ただけどねっ」

「あー、何か藤井に聞いたな。ん? 3人じゃなかったか?」

「そうなの! あと大宮も居たの! そう、でもっ、大宮がここよじ登って落ちちゃったの」

「……マジ?」

「マジ! だから早く梯子取りに行かなきゃ! 助けなきゃ! 萩原この辺で一番近い交番知らない?!」

「交番こっからだと結構遠いぞ。長めの梯子があればいいんだろ? 交番よか俺のバイト先のが近いから取りにいつてやるよ。待ってる」

そう言い残して走りだした萩原は、路地を出るとバイト先方面とは違う道を曲がる。

バイト先に救難梯子があるなどと嘘であった。ただ別の場所に確実に梯子があることを知っていた。

だが彼らに言えるはずもない。彼が目指したのは目の前の洋館、すなわち現場の本当の入り口なのであった。

「あれ？早かったな」

そう寝転がりながら言った月島を見向きもせず、大股でキッチンの方へと向かう。

月島が頭の上に疑問符を浮かべていると、ジャラジャラと音を立てて萩原が戻ってくる。

「取材に来たやつが落ちやがった」

眉間にシワを寄せて不機嫌そうに言い放つ。腕には『救難ばし』と書かれた銀色の箱を抱えている。

「やつぱり。けど高校の新聞で普通そこまでするか。結構高さあるけど大丈夫かな」

「死にはしないだろ」

苛々としたまま立ち去る萩原を見送り、月島は考えた。

（新聞記事が面倒くさいことになるのが腹立つんだろ。次は不幸の館とか言われんのかな。はあ……それより俺は、ここに住んでのんがバレて家追い出されんのが怖い）

月島はのそりと立ち上がり天を向き指を組むと、

（家なき子になりたくない、新聞記事でゴタゴタしてお屋敷無断居住がバレませんように！一生の願い！）

と波乱じみた願望を心から祈った。

なんとこれはれっきとした、彼にとって初めての一生の願いであった。

6 話：過剰なウワサ、広がる勘違い

祭日と日曜日の二連休明け、朝のHRまでの時間にクラス中が一つの話題で盛り上がっていた。

【恐怖の洋館、大宮落下事件！】
ホラーとサスペンスの合作のような会話があちらこちらで飛びかっている。

「大宮落ちたらしいよ」

「聞いた！10メートルからでしょ？」

「複雑骨折かもって」

「何かに足引つ張られたんだって」

「うそー！やだ怖い」

話に背ビレ尾ビレが付いて内容は大幅に変化していた。

大宮は高さ10メートルから、何者かに足を引つ張られて落とされ、複雑骨折をしたらしい。

「ねえ磯野は現場に居たんでしょ？大宮のことホントなの？」

クラスで一、二を争う慎重かつ良識人である光は、なんとも胡散臭い噂を前に首を傾げていた。

「んー、結構なおマケが付いてるかな。引つ張られて無かったし、骨折はしてないし」

窓際に寄りかかり、ぼうつとしていた磯野は光の声の方へゆったりと顔を向けると、困り顔で言った。

「最初に大宮のこと話したの私だけど、ここまで大事になるとは思わなかった」

そう言って苦笑いをした磯野を見て、光の隣で真意を聞きに来ていた藤井もつられて苦笑いをする。

「よかった……本当にホラーだったなら、私みんなをもっと必死に止めるべきだったって後悔してた」

「ホラーじゃなくても大宮怪我したけど、それはいいわけ？」

ニツと笑って磯野が言うつと、藤井が口を尖らせた。

「まあ、早く治っては欲しいけど、それは大宮が勝手に落ちたからだもん」

真面目な藤井は、不法侵入などという不正に対してはとてもシビアである。

「そいえば、大宮写真撮ったんでしょ？その感じだと心霊写真の心配は無さそうだね」

「今現像中だからわかんないけど、まあ無いでしょうね」

藤井と磯野の会話を聞いて、光はため息をつく。

「あいつの写真家魂は本物だわ。その状態で写真撮るかな、普通」

「ちゃんとフラッシュも忘れなかったって言ってた」

「本物ね。将来は戦場カメラマンだきつと」

「うわ、やだ似合うー！無駄にフットワーク良いし！」

「戦地でも無理して特攻して大怪我しそう」

「ふふ、流れ弾とかじゃなくて、高いところから落ちてね！」

「戦場関係ねえー！」

そう窓際で盛り上がる声とは对象的に、廊下側の席で椅子に座った萩原は黙々とクラス日誌を付けていた。

総勢立ち上がり大人数グループになって噂に色めき立つ中、彼は溜め込んだ日誌の処理に追われているのであった。

実際彼は、予想通りホラー的に変化を遂げていく墜落事件のことなど聞きたくなかったので、日誌は丁度良く気を紛らわす道具になったようだ。

そんな折、いつもとは違った空気の騒めきを醸し出すクラスに、教室前方のドアからのろのろと入って来た生徒が立ち止まる。

「なんかあったの」

茶髪の生徒は、ドアから一番近い席にカバンを掛けながら、その後の席で必死に日誌を書く萩原に聞いた。

「なんと、新聞取材に行った大宮が壁よじ登って、めっちゃくちゃ高い所から落ちたんだってさ」

「なるほど、だから騒ついてんのか」

そう秀才そうな顔をアホっぽく脱力させて、全てを知っている月島は何も知らないふりをした。

屋敷との無関係を装うには周りに誰も居なくてもこういった意識付けが大事になる、と彼らの間で話し合ったのだ。

「おはよー」

挨拶が聞こえると、今度はてけてけと教室に入ってきた生徒が立ち止まる。

「なにかあったの？」

ポニーテールの生徒は、必死に日誌を書く萩原の隣の席にカバンを掛けると、きょとんとした様子でそう聞いた。

「なんと新聞取材にいった大宮が壁よじ登って」

「めっちゃくちゃ高い所から落ちたんだってさ」

「なんと!」

そう大きな目も口も鼻の穴も全開にして驚く彼女はまさに衝撃を顔で表していた。

「え、え!それで大宮は?来てるの?学校!」

「なるほど。これが正常な反応か……」

恵が焦った顔をキョロキョロと四方に向けるのを見て、しみじみと月島が呟いた。

「いやこいつは何事もオーバーだから。おい、トモウト、大宮なら大丈夫だ。折れてない。足にヒビ入っただけだ」

「え、それ大丈夫じゃあないよね」

困ったように恵が言った時、朝のHRを告げるチャイムが鳴った。

「席につけ!!」

「席ついて!!」

ガタガタガタツ!

壮絶な着席風景が終わり、鬼軍曹もとい、鬼教師が静かに入る。教壇に立つといつも通り穏やかな顔で出席簿を開く。

しかしちらりと廊下側の遅刻コンビを見て、息も荒れずに大人しく座っているのを確認すると小さくあら、と呟いた。

その後遅刻コンビが何事もなく点呼に参加していることに気付いた生徒が、休み時間に第二のホラー現象だと指摘し恐怖を誘ったことは言うまでも無い。

「さて皆さん、金曜日に事故があったようですね」

点呼が終わると、教師は微笑を崩さずにそう切り出した。

「学校新聞取材へ行つた際、撮影のため高い所へと登り落下。大宮は足にヒビが入りました。今日は治療のため、欠席するそうです」

不法侵入したというと、おそらく100%このクラスから除名されるので、大宮はそう伝えたようだ。

「取材地となつたのはここから少し離れた所にある洋館です。話題となるでしょうが、今回のように様々な危険が考えられるので近づいてはいけません。……いいですね？」

これで少なくとも、このクラスの生徒が屋敷に近づくことは絶対に無くなった。

この女教師に逆らうと無事では居られないからだ。

かつて彼女の絶対的な圧力に不快の念を抱き、反抗的な態度をとつた生徒が居た。彼女の授業を抜け出して隠れてトイレで煙草を吸っていたのだ。

授業終わり近くになって教室へ戻ってきた生徒は体調が悪かったと言いい席に着いた。彼の体からは煙草の匂いも消えていたという。反抗的な態度を隠れてとることで満足していたのだらう。特進クラスの生徒らしい行動だ。

しかし授業が終わつた後、彼は穏やかな声で名前を呼ばれると教員室へと消えた。

それ以来、彼をこのクラスで見えることは無かつた。

停学ののち、彼はB組の生徒として過ごすことになった、とその翌日に担任は言つた。

いつも通りの穏やかな声と表情で、当然の事務連絡のように詳細を話す様子は恐怖であつた。

流石に授業を体調不良で休んだことだけでクラス左遷の刑を受けるはずはない。

しっかりと喫煙がバレたのだ。

なぜバレるはずの無い喫煙がバレたのか、それは誰にもわからない。ある意味彼女は、今話題のホラー洋館よりも注目されるべき存在であろう。

「「はい」」

生徒たちの従順な返事を受けて、彼女はいつもの事務連絡へと移った。

放課後。週に1回ある委員会が終わり、光は書類を届けるため教員室へ向かっていた。

学校が定めた完全下校時間である午後7時が近い廊下は人も疎らである。

（もうちょっと早く終わるはずだったんだけどなあ）

先週終わったばかりの学園祭以来、初めての全学年参加の学級委員会だったため長丁場となってしまったのだ。

学年間では高校2年生がリーダーということもあり、何度か集まっ

ていたのだが。

教室片付けは他の委員に任せ、どっしりと重い紙の束を抱えて担任の元へと向かっていた。

A組の担任は学級委員会のトップも担当していた。

（家着くの、9時コースじゃない……おなかへった）

光はそんなことを考えながら、不機嫌そうな顔をして早足で廊下を歩いていた。

重い書類の持ち運びにも慣れていよう、早足ながらバランスを崩すことはない。

教員室前に着くとぶすつとしていた表情が、リーダーとして見せる時の表情に自然と戻るのは流石である。

「失礼します」

ガラリと肘でドアを開けて中の様子を伺う。大勢の先生がパソコンと向き合っている中、探し人の姿は見当たらなかった。

「あれ」

キョロキョロと見渡し、小さく戸惑いの声を出す。

「友野、どうしたんですか？」

すると背後にコーヒークップを携えた担任が、気配を感じさせないまま話しかけてきた。

「あ、佐藤先生、よかった。委員会で回収した学年アンケートを届けにきました」

「ずいぶんあるわね。片手じゃ持ちきれないから、机まで運んでください」

A組主任の彼女の席は窓際で、入り口から離れた場所にあった。

コーヒーの香りを漂わせて歩く先生に付いて行きながら、光は違和感を感じていた。

机の上に書類を静かに下ろすと思わず疑問を口にした。

「先生、コーヒーは飲めないイメージでした」

「そうですね、普段はあまり飲みません」

相変わらず微笑を浮かべながら、ピリピリとした空気を出すという器用な印象は変わらない。

しかし、どこか心此处にあらずといった様子に光は気がついた。

「……友野はあの洋館のこと、どう感じますか？」

役目も終わったし、先生も疲れてるみたいだし帰ろうと思った矢先、そんな質問を投げ掛けられた。

「あの洋館、と言うと大宮が落ちた洋館ですよ？どう、と言われども……私はこれ以上大事にならなければいいと」

「そうではなくて。どうと言うのは幽霊のことよ。居ると思う？」

キョトンとして目の前の顔に視線を合わせると、思いがけず真剣な表情が見返していた。

（まさか先生まで噂を信じてるの？）

あの厳格で、非現実的なものを一切排除していそうな佐藤先生が。

「私は噂を信じていませんし、霊的なものは関係無いと思います」

戸惑いながらも光も真剣な表情でそう返した。彼女は洋館事件のホラー的関連性を、本心から信じていなかった。

今朝の磯野の話が肥大化したように、何か小さな原因が悪い方向へ大きくなっただけだと考えていた。

「そう。つまらないことを聞いたわね。代表格の生徒が今回の件をどう考えているか知りたかったの」

「先生は信じていらっしゃるんですか？」

「少し気になっただけよ。思ってもみない事件だったから」

質問の答えになっていないのだが、彼女はそれ以上の問いを防ぐようにゆっくりとコーヒーをすすった。

「さ、早く帰りなさい。下校時間ですよ」

用件は済んだからさっさと帰れ、という遠回しの合図をいつも通りの微笑で送られる。

光もさっさと撤退したいので、失礼しますと一礼して足早に立ち去った。

（あの先生が生徒に意見を求めるなんて余程のことだし……実は先生幽霊信じててビビりまくっているのかな。意外に人間らしい所あ

るんだなあ)

「ずいぶん長かったね、大丈夫？佐藤先生に怒られたとか？」

先生考察をしながら玄関まで歩いてくると、心配そうな声に迎えられる。

顔を上げて声のほうを見ると、同じ学年で他のクラスの女子委員数人が靴を履いて待っていた。

「うつん、違う違う。ていうかみんな、帰ってて良かったのに」

「そういうのいいから急がないと！あと3分でこのドア閉まっちゃうよー！」

彼女らの背後の自動ドアを見る。外はもう真っ暗だ。

「寒そう……」

早く帰りたいだろうに自分を待っていてくれた彼女らに、心が暖まりながら光は言った。

靴箱へ行こうとした光を邪魔するように何かが投げつけられる。

ローファーだった。

「寒そうじゃないよ！さぶいんだよっ！マジもう時間無いから靴取つといたよ、いそげ！上履きはお持ち帰りで」

「はいはいどーも。でも投げることないでしょ可哀想な私のローファー」

時間ピッタリに容赦なく停止する自動ドアに急かされて、外へ走り

出る。

下校時間を過ぎると生徒たち個人で学校を出る術は無く、先生に泣きつくこととなり、あえ無く罰を受けるはめになるのだ。

11月の半ばになると日はあつという間に落ちる上に、寒波が流れ込んだ影響で気温がガクンと落ちた。

通路沿いの木も枯れたものが多く冬であることを痛く感じさせた。

「突き刺すような風が足に！ううー、生足は辛い」

「男子のブレザーが憎い……あ、男子と言えば」

恨みがましくブツブツと言っていたC組の学級委員がふ、と光の方を向く。

「萩原君、教室片付け終わったらさっさと帰っちゃったな」

「へえそうなの？まあ遅いし、そりゃ帰るでしょ」

「意外に酷いやつだ萩原君！光を置いて先に帰っちゃうなんて！彼氏なのに！」

「は……は？！かれし？！ああああありえない！」

思わぬ発言に光はバツと発言者の方へ顔を向け素っ頓狂な声を上げる。

「何でそう思ったの？」

混乱を落ち着かせるように歯を食いしばってから、搾り出すような低い声で尋ねた。

顔が紅潮しているのは、運よく外灯に当たらず暗がりには居たおかげで見えなかった。

「うわっ！なんか光が怖い！」

「えー！あたしも付き合ってるのかと思ってた！だって一緒に居ること多いしさ！」

B組の副学級委員が驚いて興奮した声をあげる。

否定を聞いてなお好奇の目を向ける彼女に光はますます必死になり、勘違いを引き起こしかねないつつけんどんな態度で否定を続ける。

「男女はこれだから面倒くさい！友達だから一緒に居るけど好きとか無理！バカだしやる気ないしっ！」

「バカ？！学年トップじゃない！」

「頭がバカなんじゃなくて、性格がバカなの！ねえ、その勘違いって広まっちゃってるの？」

「そりゃまあ、私はともかく噂に疎い彰子も知ってるわけだし、かなり浸透してんじゃない？」

「あちゃー」

「私ウワサに疎いかな？でもバカだなんて信じられないな。頭良いし、委員会のリーダーもしっかりしてるし、運動神経もいいし」

D組の副学級委員が小さな声で光を向いて囁くように言った。

「ま、まあその3つは事実ね確かに……そうだ、今度話しかけてみたら？あいつ絶対喜ぶよ？」

「え？ムリムリムリ！だってあの萩原くんだよ？仕事じゃなきゃ話せないよ！」

と焦って首をブンブン振って否定する。

実際彼女は委員会の仕事で萩原に話しかけるときでさえオドオドとしている。

「彰子かーわいー！」

恥ずかしさで俯いた少女はB組の委員にむぎゅっと絞められ、目を白黒させていた。

「あー、でも彰子の言いたいこと分かるな。萩原君……いやむしろA組の男子って何か近づき難い。エリートオーラがあって」

「ね！ていうかA組が怖い。光のことも最初怖かったもん」

特進クラスであるA組は国立大学を目指す学年屈指の実力者が揃うクラスだ。

他クラスの生徒から見れば頭の固い勉強ばかりのエリート集団、もっと悪く言えば頭だけの偉そうな鼻持ちならない奴ら、という印象だろう。

光はその印象を覆すため、恋バナに積極的に参加したりあえてふざけたフランクな態度をとったりと、小さな努力を重ねたようだ。

しかし光は普段、双子の恵とも、話に上がったA組の友人達とも恋愛話などすることはない。

そのため彼女には年頃の女子が好んでする恋バナに対して、全く耐性が無かった。

どんな場面でも落ち着いた態度で対応する彼女だが（恵との喧嘩時を除く）、自分に対して恋愛の話題が降りかかると、どうすればいいのかわからなくなる。

そのため先ほど光が、萩原との噂を聞いたときに赤面したのは混乱からであり、決して彼への好意からではない。

果てしなく誤解を生む状態であったが。

「話戻るけどさ、じゃあ付き合ってるって月島君の方？」

「ばかつ！もういい加減にして。あんなバカでアホなやつ！っていうか、玲奈詳しいねA組のこと。萩原はともかく月島まで」

「ああまあ。顔はちゃんと見たこと無いんだけどね。成績優秀者の常連だからさ、名前覚えやすいし。カワイイ名前だよな、月島葵って」

「え、でも月島君は恵ちゃんと付き合ってるって噂聞いたな」

どんな噂だろうか。お熱い二人は仲良く遅刻といった内容であろうか。

そんなことを考える以前に、二人の恋愛とは程遠い衝突劇を思い出した光は、赤くなった顔を少し落ち着かせ困り顔でくすりと笑った。

「困ったことに、恵は恋愛感性の欠片すら目覚めてないの。恋でもしてくれたら少しは大人っぽくなるだろうに。それより私、彰子がいっ萩原に告白するか気になるなー」

「しししないよ！憧れって言っちゃえうつしょ！」

光に向いた矛先を流された哀れな彰子は顔を赤くして舌をかむ。
冗談に対しても真剣に対応してしまう彰子は、女子委員の中でのい
じられキャラだった。

「どうだかー」

目をジトツとさせて光が笑うと、他の委員たちもクスクスと笑って
彰子を小突いて囃す。うまい具合に光は自分に降りかかった恋バナ
火の粉を払ったようだ。

（……あ。もしかして月島と萩原がモテないのってこの迷惑な噂の
せいなんじゃ？）

成績優秀、運動神経も顔も悪くないはずの彼らだが高校1年からの
付き合いも関わらず、光は彼女と居るところを見たことがなかった。
交友関係が広くない上に、バイトばかりで用さえなければさっさと
帰宅してしまうのも原因であろうが。

彼らの青春のためにもこの誤解を解くべきだと、光は密かに思い立
ったのであった。

7話：中等部の少女

洋館落下事件から1週間、松葉杖をつきながら大宮が復帰した。

「え、1週間で退院できるもんなの？」

「むしろ俺の時はヒビで1週間も病院軟禁されなかったけどな」

「いやー、なかなか病院から出して貰えなくて困ったよ！ははは」

「あいつ懲りてないな、絶対……」

離れた場所から大宮のやり取りを見ていた谷が、呆れ顔で隣に立つ藤井に言くと、藤井も同じ表情で頷いた。

その隣の恵は朝ごはんで頭が一杯のようだ。視線は嚙り付いたトーストに釘付けた。

今日は珍しく余裕を持って登校したらしい。

リスのように頬を膨らませ、もごもごと口を動かしてトーストを見つめていた彼女であったが、ふと視線を逸らすとピタリと固まった。

「くっそ……今日の日直誰だよ」

ぶつぶつと文句を言いながら教室へ入ってきた萩原を見た瞬間、谷が感嘆の声を上げる。

「うつわ、すげえ荷物。よくここまで持ってこれたな」

彼は雑技団のごとく器用に山ほどの配達物を運んでいた。バランスを保って歩きながら横目に黒板を見る。

日直 月島

友野（恵）

「……………」

朝一番に仕事のある日直にとって、絶望的な二人組であった。
この学校、出席番号が男女混合制なのだ。そのため起きた悲劇であった。

ちなみに学級委員と副学級委員は日直免除のため、本来月島の次の出席番号の光ではなく恵とかち合ってしまったのである。
萩原は日直の名前を確認すると黒板の反対側、座席側に視線を向ける。

ごくりとパンを飲み込んだ少女が慌てて視線を逸らした。

ドスン……

手に持った荷物を教壇に置くと重々しく音が響いた。

恵はトーストを持つ手にぎゅっと力を入れると、ちらりと音の方へ視線を向ける。

目が合った。怒りを含んだギョロリとした目から逃れることは出来ないようだった。

逸らせないまま、威圧感を放つそれはどんどん近づいてくる。

「日直」

「おお覚えてたよっ！」

「余計悪い。確信犯か」

「……昨日までは覚えてた」

やはりとでも言いたげに萩原は目を細めてため息を吐く。

「朝教員室行ったら、日直来てないからって持たされた。重かった」

「う。……ありがとう、持ってきてくれて」

「トモウトそこはありがとうじゃなくて謝るところじゃね？」

状況を見ていた谷が思わずツツコミを入れる。

「次やったら学食500円分奢りだから。高2なんだからしつかりしろよ」

「え、あ、そんなあつさり許すんだ」

高圧的な態度を収め、諭すような口調でまとめた萩原に谷は脱力した。

「はあ……ていうかお前も仕事人任せにすることあんのに、よくそんな偉そうに言えるよな」

「だってよ、トモウトと俺とじゃ仕事をすっぱかす理由が違うだろ。俺と違って中学からここに居んだから、恒例の仕事を忘れるってのはヤバイだろ？でもまあ、もし俺みたいに確信犯で仕事押し付けてたら軽く殴ってたな。やっぱり自分がやられると気分悪い」

「とんだガキ大将」

傲慢な態度に藤井が苦笑いで呟く。

同時に、なぜコイツが学級委員なのだろうという思いに苛まれる。

「お前ら俺に甘過ぎだよな」

そう上機嫌そうに笑って言う萩原の頭に、さすがに谷の怒りの空手チョップが美しいフォームで炸裂した。

プロ漫才コンビのツツコミさながら、スパンと決まったそれに恵と藤井が思わずおお、と感嘆の声をあげる。

「うおおー！俺の血と骨の結晶！」

だが背後からあがった高揚した叫びに少女たち二人は一瞬で気を取られた。

「あ、本当だ！新聞出来たんだ」

叫び声を上げた大宮は教壇に置かれた山積み新聞の新聞へ向かって、松葉杖を駆使し駆け出していた。

恵や藤井をはじめ、近くにいた生徒もわらわらと近くへ集まる。

愛しげに新聞に抱きつく大宮の腕の隙間から一冊抜き取り、教壇に群がる集団から抜け出して折りたたまれた1面を広げる。

恐ろしげな写真が真っ先に目についた。

「ほおー、白黒印刷が余計に怖い。これが謎の洋館なのかー。確かに噂が立ちそうですね」

間抜けな声を出して恵が写真をまじまじと見る。

太い幹の間から屋敷ははつきりと写っている。外壁はくすんだ灰色で、本来の色を失っている。長い時間放置されて風化しているのが

わかる。

家を持つ暖かさからあまりに離れた荒廃具合は、見ているだけで寒気がするようだった。

「やだ私、それ持って帰りたくない。呪われる。絶対」

写真を見た瞬間、後退りしながら藤井が言った。

「大丈夫だよ、何も写ってないじゃん。ちょっと見た目が悪いだけでお化けなんか居ないよ！言葉どおり大宮は、骨折り損のくたびれ儲け……」

「骨を折って無いし、くたびれても無い！俺は勝ち組だ！」

新聞を抱き締めながらムキになって大声を出す大宮に、恵は苦笑いで押し黙った。

カッと思開いた彼の眼は否定を許さなかった。

「そうだね、ちゃんとお屋敷写ってるもんね。すごいじゃ」

「うっわ何この廃屋、ぼろっ」

恵のフォローを邪魔するように寝癖頭が新聞を覗きこんできた。

ぼんやりした顔でペットボトルを手に持つ月島であった。ちびちびとラベルの無いボトルから水分補給をしながら新聞を眺める。

「あー、おはよ葵。ボロいはないでしょー。例のお屋敷だよこれ」

ふーんと興味なさげの様子で月島は紙面を見る。

「なんだ。居ないじゃんお化け」

「ねー！やっぱりホラー都市伝説は嘘だったんだよね！」

二人の和気藹々とホラー特集を見る様子を、谷の陰に隠れている藤井が呆然自失で見つめる。

その脇を大股で歩く人影が通り過ぎた。

「おいコラてめえ！」

ヤクザさながらの声が近づいてくる。顔を上げる間も無く、茶髪の後頭部に空手チョップが炸裂した。
体が前へ揺らぎ、手に持ったペットボトルから水がバシャリとこぼれる。

「うつひゃあぶな！かかるところだったじゃん！」

すばやくバンザイの姿勢で新聞を持ち上げ、さらに本人もバックステップで避難するというすばらしい反射神経で、恵は飛び散る水を回避した。

「つてえー！ご、御神水が！なんてことしやる！」

「うるさい。お前のせいで朝から労働させられるわ谷に殴られるわ最悪なんだよ、日直さんよ」

「わあ、全部なすりつけた。不貞腐れちゃって……」

八つ当たり気味な萩原の態度に我に返った藤井が呟いた。

「そう、日直だったんだよ。朝思ひ出したんだけどさ、起きた時にはもう手遅れだったっていうか」

「完全にサボリじゃねえか。生意気言ってんじゃねえ！走れば何とかなんに決まってるだろ。お前のが俺より家近いだろ」

「いや俺のが遠いね。何メートルか向こう側だね」

「ああ、はじまつちゃった」

ため息を吐き明後日の方を向いて恵が言う。

その目に、朝の仕事を終えた光が教室へ戻ってくるのが映った。

「え、ちょ何で床、水浸しなの」

教室に足を踏み入れて数歩、月島の足元に飛び散った大量の水が目に入ったらしい光が立ち止まる。

「ひかりー、大丈夫だよ！ただの水だから」

進むのを躊躇している光に恵が声をかける。

「いや、ただの水だからって放置しないでよ」

ただの水ならば教室に池を作っても良いのか。良いわけがない。正論を言う光だが聞くべき張本人は口論の真っ最中であつた。

口論をする馬鹿二人の片方が、フタの開いたペットボトルを手に持っているのを見てなにかを確信したらしく、光は彼らをジトリと見据えた。

「キングオブ非常識どもめ」

喧嘩の内容はいつものごとく小さなことで、距離変わんないとしてもやっぱり決め手は足の長さだな短足、といった身の無い内容である。

身長は平均以上ある立派な男二人だが、中身は中学生以下だ。

同じA組の女子にすらモテないのは、噂の所為だけではないのだからと光は感じた。

そろそろこの非常識な奴らに誰かが鉄槌を加える時間だ。そう思い立った光は教壇前の席で鼻をかむ生徒に近づく。

「ちょっとこれ貸して」

トイレトペーパーだった。

万年鼻炎の生徒の必需品である。巷で配られる無料ティッシュでは追いつかない生徒達数人でシェアされて使われる。

鼻が真っ赤になるのが難点だが、無料ティッシュスポットを何往復もせずにすむ、ありがたい存在だ。

「点線から点線までだからな。一回の使用限度」

「はいはいわかった。ありがとう」

「何？トモネエ風邪？」

しびれる鼻の下を擦りながら聞く彼に首を振り、トモネエは笑顔で口を開く。

「うつん、ちょっと投げるものが欲しくって」

そう言つて振り返りざま、タンと片足を大きく前に出す。と、同時に手からビュンとペーパーを投げ放った。

それは実に美しくなめらかな動きであつた。

小学校時代はドッジボールで男子をも唸らせた投球スキルの持ち主であつた。スピードは筋金入りである。

風を切つて飛ぶローリングは新聞を手に持つ恵を越え、水溜りのそばで口論する月島の頭に……

「ふやっ?!」

……は当たらずに彼の脇を抜け、入り口付近に立っていた少女の頭に当たつた。

上ずつた悲鳴のほうへその場の全員が目を向ける。

「……」

状況把握ができず、一瞬時が止まる。

唯一全てを把握している光が、顔を仰向けて固まる少女に慌てて駆けつけた。

「大丈夫?!」

少女の足元に転がるトレットペーパーと駆け寄る光を見比べて、目撃者たちは未だ状況が理解できない。

「手元が少し狂っちゃったみたいでっ!あ、う、そうじゃなくてっごめんなさい!」

珍しくあわあわと取り乱す副学級委員に目撃者たちも答えを導き出す。

投げた。一瞬横切った風が凶器だったのだ。そしてそれが本来の目標を外したのだと。

「……やだー、副学級委員さんってば強暴ね」

「女の子の顔にそんなシモの物を当てるなんてえ……」

馬鹿男子二人のタッグいびりがはじまった。こういう場面での彼らのコンビネーションは、普段では到底考えられないほど輝いている。

「トモネエさん、ひどおい」

暴力の原因が自分たちの不始末にあり、自分たちに向けてのものであるとわかった上でのこの態度である。

「くっ……うっ、ごめんね？痛い、よね」

悔しいが反論もできない。

二人へ怨嗟の視線を向けてから、気を取り直し気まずげに目の前の少女を見、改めて謝罪する。

「痛くないですよ、大丈夫ですっ。ペーパーですもん！」

少女は困ったように笑っていた。

相手を傷つけずに自分の無事を伝えるにはどうすべきかで困っている様子だった。

そんな気持ちを汲み取り、穏やかそうな笑顔を浮かべる彼女に光の良心はさらに痛む。

名札を見ると、小柄なその少女はまだ中学生であった。

なぜ中学生が高校に居るのか。

この平成高校は、平成中学校と合併しており同じ校舎で同じ教師から教育を受けているためだ。

いわゆる中高一貫教育制度をとっていて、中学受験を終えれば同じ校舎で受験も無く高校3年生までの6年間を過ごすこととなる。

中学終了時に入りはあるが、ごく数人である。

そんななか萩原と月島は高校から入学したレアな人間だった。

ちなみに中高まとめて部活動のリーダーや生徒会長は高校2年生、すなわち5年生の役割である。

「えっと、誰に用があるの？」

中学生がこうして高校生のクラスへ赴くことは稀で、さらにそのほとんどが部活動や委員会関連である。

「大宮先輩に用が会って……」

「え？大宮？」

ちろりと視線を後ろへ向ければ未だに新聞の山にしがみ付き、恍惚の表情で何かを呟く大宮が目に入った。

「わ、わかった。大宮ー、ひたつてないでちょっとこっち来て！」

写真部の後輩だろうか。

この変態先輩に対してこの優しげな後輩が居ると思うと、光は複雑な気持ちになった。

「でも大丈夫か？ホームルームまであと3分くらいだけ」

ちゃっかり座席に着いていた萩原が飄々と言うと、少女は時計を見てあっと小さく驚いた声を上げた。

「何なに？俺に用？」

声とともに目の前に現れた大宮を少女はハッと焦った様子で見やる。

「あ、あの大宮先輩っ！大事なお話があるので、お昼休みに時間をください！おおお願いします！」

近づいて来た大宮に、焦った様子でそれだけを言っと少女は慌てて走り去った。

その声は思いのほか大きく教室に響きクラス中の視線を集めたので、少女の顔が紅潮していたのを大勢が見ていた。

少女が走り去った後、今度はクラス中の視線が大宮に集まる。

「だ、誰だっけあの子……でもなんか、すごいドキドキする……」

大宮がドアを見つめながら惚けた表情で呟く。

静まり返っていた教室はその言葉を皮切りに、さざ波のようにざわめいた。

「い、今のつてもはや公開告白だよね」

「あの大宮に告白？あんなにかわいい子が？あり得ない！」

「うそだろ？いやうそだ！大宮に先を越されるなんて、これは夢だ」

騒然とするなか、朝のチャイムが鳴り響いた。

8 話：大宮、冬の日に散る

昼休み、程なくして公開告白事件の少女が現れた。

「失礼します。あの、大宮先輩はいらっしゃいますか」

「はいはい！」

大宮が席を立ち目を輝かせて少女に近づいていく様子を、多くの生徒がチラチラと横目で見送る。

前方ドア付近で起こりかけている事件詳細を聞き逃さんと、ドアから席の一番近い月島は弁当も出さずに座り込んで耳を澄ましていた。

「おい、聞いたか今日……」

「静かに」

近づいて来た萩原のよく響く声を小声で鋭く遮り、月島は無言で目の前を視線で示す。

「てかお前は気になんないの？これからの状況によっては大宮にすら先を越されるんだぞ？そんなことになったら俺もっ、仏門に入って修行僧になるわ」

「いや俺別に、あの子がコクりに来たと思ってねえし」

「は？あの状況を見ておいて？……あ、話しはじめた」

大宮がドアの前に立つと、少女は話を切り出した。

月島は眉間にしわを寄せ、身を乗り出して聞き耳を立てる。

「それである、大宮先輩……聞きたいことがあって」

「何なに？」

大宮と月島がごくりと唾を飲む。

大宮の声は浮つき、表情は気持ち悪いほど爛々としている。
少女もまた高揚とした面持ちで口を開いた。

「ホラーの館の詳細についてなんですけれど！」

ズルッ

肘をつき、身を乗り出して聞いていた月島が思わずバランスを崩して机に突っ伏す。

「ほらな。アガリ症なだけなんだよあの子。さっきは俺が、あと3分でホームルームだって言ったら焦っただけだったんだって」

「ホラーマニアの子かよ。ああでも安心したわ。ははは、ざまあ見る大宮」

「それはそうだな。期待して損だったな大宮。ざまあ見やがれ」

そんな人の不幸を喜ぶ彼らに、苦笑いをした谷が惣菜パンを持って二人のそばに立つ。

「お前ら本当に性格歪んでんな」

「うるさい所帯持ち。お前にはこの気持ちわからんよ」

声をそろえてこちらを睨む二人に対し、所帯とかそんなんじゃねえしと顔を赤らめて否定する谷の態度は、さらなる怒りを買ったらしい。

モテない男たちの殴る蹴るの猛攻に谷は惣菜パンを取り落とした。すかさず月島がそれを拾い上げむしゃりと一瞬で食べきった。

昼ごはんを一瞬にして奪われた谷であったが、袋からもう一つ取り出してドヤ顔を披露する。

そんな攻防をしばらくしている内に大宮と少女の会話が終わったようだった。

大宮が教室内へ引き返すと、集まってきた数人の生徒に囲まれた。

「おいこら大宮。何の用だったんだよあの子？」

威圧的な態度でにじり寄り、何人もの生徒がひ弱そうな眼鏡ボーイの大宮を取り囲む様子は、リンチかカツアゲのようであった。

その輪にニヤニヤと笑う学級委員長の姿も加わったので、傍から見れば学級崩壊現場である。

「俺の武勇伝を聞きに来たんだよ、俺が退院したことを知って。たぶんあの子俺のファン」

「おい認めるよ。ただのホラー好きな子だったんだろ？わざわざあんな武勇伝、聞きに来るんだもんなあ」

「ちょ、萩原！ちょっとくらい夢見せてくれよ！いつもお前は容赦が無さすぎるんだよ！」

あごをいじりながらニヤニヤと見下ろしてくる萩原に、夢を壊された大宮が悔しさに叫ぶ。

それは彼の青春が散った音だった。

そう言いがつくりとうなだれる大宮を中心に笑いが起こるが、それは馬鹿にしたものではなく同情にあふれていた。

「そっかそっか。一緒にがんばろうぜ、また」

隣に立っていた仲間などはポンポンと肩をたたいて勇気付けようとさえしていた。

そう、大宮を囲んだ彼らは『まだ知らないどこかにあるはずの恋を求める、探求者たち』であつた。

「ちょっと期待しちゃった理由、聞いてくれよ。あの子美也子ちゃんっていうんだけどさ、ホラーが好きってわけでも無さそうだったんだよ」

「わざわざメモまで持参して聞きに來たのに？」

月島は美也子が持つメモ帳を見落としてはいなかった。

「聞いてるとき、滅茶苦茶怯えてた。ホラーに全然耐性無さそうな反応だったんだよ」

「怖いもの見たさみたいな感じじゃん？」

「いやいや彼とのデートの下調べに違いはない。お化け屋敷感覚で行く気だろう」

「それは妬ましい……俺が生霊となつておどかしてやるつか」

「まあ冷静になつて考えれば、それでも終始聞くことはホラー屋敷

のことばっか。俺のことなんかちつとも興味なかったんだな」

ふっ、と大宮が口の端を上げ、ニヒルに笑う。目を閉じ全てを悟ったようなその表情に、仲間たちは沈黙した。

「俺決めたよ。迷ってたんだが、今日のことが背中を押してくれた」

「お前、まさか……」

全員が息を呑む。彼のその表情はかつての仲間の内でも見たことがあるものだったから。

「画面の向こうの世界に……俺を待ってる女の子がきつと居る」

彼らの杞憂はあたってしまった。

それは新しい世界のはじまりの言葉であり、同時にこの世界との別れの言葉。

「早計すぎるぞ大宮！マジで現実を捨てちゃうのか？！さっきのが原因でだなんて、お前そんなに弱いヤツじゃないだろ。……あ、そうか、両立の道なんだろ？美也子ちゃんのことだって実はまだ諦めてないんだろ？はは、お前らしい」

「いや、俺は現実を捨てるよ。もう高2の冬が来た。来年は受験だ。潮時なんだよ」

「……選択肢でしか伝えられない思い、どんなに愛しても手を繋ぐことさえできない。そんな状況に耐えられるの？」

「それでもいいんだ。それに諦めたわけじゃない。大学デビューす

るころには現実にもどつてみせる」

そういつて柔らかく笑う姿は決意に満ちている。もう何を言っても無駄だということをその場の全員が悟った。

「それに今日は俺の17歳の誕生日なんだ。門出にはぴったりの日
だろ？祝ってくれよ」

そういえばそうだったと再び仲間たちに活気が戻る。
もう誰もが彼を見送る準備ができていた。

「ハッピーバースデー大宮。大事な今日という記念日に運命の人に
出会えることを祈ってるぜ」

それから大宮を囲んでいた集団は、静かにとうとうとハッピーバー
スデーを歌った。

こうして二次元に救いを求めた少年がまた一人、本日発売の恋愛シ
ミュレーションゲーム『ラブミストラル』と運命的な出会いを果た
し新たな境地へと向かうのである。

「ないわ……」

「あんなんやつてるから女子が引いちゃうのにね……」

遠くから冷やかな視線を送る女子全員のそんな声は、モテない彼
らに届くことはなかった。

9 話：金属音

真つ暗闇のトンネルに声が反響する。

「だああ眠い。明日サテライトの日だね？日曜だったのに学校かい。絶対遅刻だよー」

サテライトとは有名な予備校の授業を大画面に映し勉強する、特進限定の日曜授業（高2は1ヶ月に一回）を指すサテライト授業の略である。

1講1時間半を2科目、9時から休み時間を含む12時30まで予備校風授業を体験する。

科目選択は個人の自由で教師も特に指導をしない自由度の高いものだが、遅刻はしっかりとカウントされる。

日曜日なのに。救いは午前中で解散となることである。

そんなブツブツと愚痴る声と同時に、足音も二つ、カッンカッンとトンネルに響いている。

重い足取りの男子高校生が二人、少し変わった帰路についているところであった。

時刻は夜11時30分、バイト帰りである。

バイト先から彼らの住む屋敷までは徒歩10分ほど。10時あがりだったのだが気付けばこんな時間になっていた。

スタッフブースで1時間、30歳半ばのチーフから人生観のレクチャーを受けていたからである。

数々の名言が飛び出す彼の魂のレクチャーは、感動に吞まれ時間を忘れさせるのだ。

「寝坊？そしたらお前ついに特進からサヨナラか。他のクラスの奴

らに友達１００人でつきるっかな」

「うああ、無理だー。人見知り発動で一人寂しくトイレで弁当食ってる俺が見える。もはやそれが嫌で特進に残りたいのだからって過言ではない」

「何が人見知りだよ。どうせ再来年には大学生。イチから友達作り直しだろうが」

「でも実際嫌つしょ？今さら他のクラス行ったらって、グループ出来ちゃってるし入りづらいじゃん」

「まあ、浮くのは勘弁だな。でもまあ意地でも特進抜けない何よりの理由は、奨学金だな」

「ですよー。特進奨学金無いと生きていけないからね。でも寝坊遅刻一回で特進追放ってマジなのかな」

「マジだろ。生徒手帳に書いてあんだし」

「うわ。委員長っぽいこと言ってる。怖いんですけど」

大貧乏である彼らは高校の奨学金制度に頼りきりであった。

高偏差値大学の附属高校として有名だが、やはり金持ち学校なのだろう。奨学金制度は大丈夫なのかと心配するくらい整っていた。特進奨学生として返却不要の奨学金をたんまりと戴いているのだ。面接で認められた特進クラスの中でも品行方正、成績優秀の者が対象のため、彼らはそれなりの努力をしていた。

「はあ……金降ってこねえかな」

「ホントだよ。そしたらこんな暗い家ともお前ともおさらばなのに」
普段は会話もなく足取りも合わせず帰宅するのだが、熱血レクチャ
ーの余韻で脳の動きが活発なようで、珍しく話しながらの帰宅とな
った。

だがしかし眠気と疲れのたまったバイト帰りのこの時間の会話は、
内心が出たものであったりネガティブになりがちである。

タイプは違うにしろ楽観的でありたい彼らにとって落ち込みやすい、
一番気を付けなければいけない時間帯だ。

「昨日の大宮が羨ましいわ。一瞬でも女の子にちやほやされて。大
宮先輩っ、とか呼び出されちゃって。俺を出迎えてくれんのはこん
なホラーハウスだけなのに」

トンネルを抜けて見えた屋敷はやはりおどろおどろしい。

2人は、ハアとため息を吐いて屋敷を見上げるが、あんな噂が立つ
ても出て行く気は欠片もないようだ。

幽霊がとり憑いていてもおかしくない様子の外観だが、悪寒も肩凝
りもなく平和に住むことが出来るらしい。

「よっこいせ」

防犯は外観に任せっきりなので鍵などはかかっていない。

そもそも外側から、鍵を開閉する道具が無いため外出してもロック
不可能なのだ。

お土産でキーホルダーをもらった時、鍵を持たない彼らは本当の意
味で使う日が来るのを夢見たものだ。

一応ドア自体に鍵設備は付いているので、内側からは閉められるの
だが。ただしカンヌキというレトロな形式である。

そんなこんなで玄関のドアは力を入れればギイイと軋みながら簡単に開いた。

ボタン

ホラー映画であれば勝手に閉まった入り口がなぜか開かなくなる場面である。

廊下の手前、らせん状に地下と2階へのびた階段からは今にもごろごろとゾンビが降ってきそうだ。

もちろんそんな心配はせずに、明かり一つ点いていない、音が反響するほどだだっ広い玄関ホールを慣れた足取りで歩く。

ホールの先に伸びる廊下も相変わらず、窓から入るぼんやりとした月明かりが所どころ照らすだけで不気味に暗い。

「……………」

突然、ピタと月島が立ち止まった。

「あ?」

遅れて歩いていた萩原もつられて止まり、怪訝そうな声を上げる。

「今、何か聞こえなかった?」

「はあ?」

先の見えない廊下を凝視し、固まる月島の視線を追って萩原もそちらを見る。

「おいおい。幻聴とかお前、耳鼻科の世話になる金どっから出す気だよ。俺貸さねえぞ」

ぶつぶつと何やら言う萩原だが、どこか気にしているのだろう。小声かつ廊下から視線を離さない。

それでも耳障りに感じた月島が静かにしろ、と反発しようと思ったときだった。

カラ……カラ……

「……!!」

今度ははっきりと二人の耳に音が届く。

何か硬い、金属のようなものが石床をこする音。

カラ……カラ……

音はだんだんこちらに近づいてきている。

床に釘付けにされたように動けず、ただ二人は瞳孔を全開にして廊下の先を見ていた。

「……?」

二人の顔が恐怖で凍りつく。

息を呑んだ彼らの視界に入ってきたのはあまりに信じがたい光景だった。

窓から入る月明かりのなか、居るはずのない人影が映ったのだ。

居てはおかしい、ありえない人影。

カラカラという音と同時に、こちらのほうへゆっくりと歩みを進める。

左半身が僅かに照らされただけで顔すら確認できなかったが、彼女らにとつて充分すぎる情報を与えた。

長い髪。

くすんだ金色の波打つ、長い髪。

――夜中にオペラ歌ってる髪の長い女の霊が出るんだとき。

忘れかけていた谷の言葉がよみがえる。

月明かりの中を通り過ぎ、再び人影は暗闇に消える。
音はもう間近で、あと一つ窓を越せば廊下の終わり、すなわち二人の居る玄関ホールであった。

カラ……カラ……

迫る恐怖に彼らは限界だった。

「「うわああああっ！！」」

どちらが先ともつかず、情けない悲鳴を上げる。

悲鳴を上げたことで全神経が回復したのか、もつれる足で玄関のドアへと逃げ出した。

「キィアアアアアアッ！！」

背後から女の甲高い奇声が上がる。

その声にはじけるように背後を振り返った月島の目に映ったのは、暗闇のなか狂ったような足取りで走る影だった。

ブン、ブンと音を立てて空を切る音がそちらから聞こえる。
今まで引き摺っていたであろう凶器と思しきものを、こちらへ向け
て何度も振りかぶっていた。

「っ！！」

ザツと全身に悪寒が広がり、現実から逃れるように視線を外して前
を向く。

焦る頭に反してもつれる足がもどかしく、まだ少し距離のある玄関
のドアノブに向かって跳び付いた。
しがみついたドアノブを全体重かけて捻る。

ガチッ

「なっ！？開け！なんで！？」

追い詰められた表情で何度もドアノブを捻り押す。

だがどんなに体重をかけ寄りかかっても、頑なに動く気配がない。
混乱した頭で月島はドンドンと目の前の壁を叩いた。

少し出遅れた萩原はそんな月島の様子に絶望を感じつつ、それでも
ドアへ近づいていた。

「！！」

ブン、と間近に迫った風を切る音に、萩原の背を寒気が襲う。

無意識の言う、遠くへ前へ逃げろという訴えに従い、背後を振り返
らないまま踏み込んで跳躍する。

僅かに舞い、べしやりと腹を打ち付けながら床へ無様に着地する。
ガゴツと顎も床へ打ち、うぐと息の詰まったうめき声を上げる。

だが痛みにかまけている場合ではない。

すぐに腕と足に力を入れて体を浮かし、バツと体を反回転して中腰になる。警戒心剥き出しの瞳孔の開ききった目で、方向転換した先に居るはずの影を見る。

「逃げろっ!」

萩原の視線の先、まだ壁と化したドアと格闘していた月島に影は標的を変えていた。

「ヤアアアアッ!!」

影が再び奇声を上げる。

ハツと月島は視線を背後に向ける。凶器を振りかぶる影が視界いっぱいに映り、頭がパチンとショートしたように真っ白になる。足がすくみ、動かない。咄嗟に顔をそらしぐつと目を閉じ歯を食いしばる。

ひゅつと耳に風を切る音が届いたと思った瞬間、凶器は右肩を捕らえてガツリと打っていた。

「いつ……つつッ!!」

ジユウツという焼けるような音と痛みに襲われて崩れ落ちる。

じわりと出た涙で霞むなか肩を見れば、患部から服越しに僅かに煙が上がっていた。

「ッ?!」

「おい!逃げろ!」

壮絶な悲鳴に驚きフリーズしていた萩原だが、月島のまだ動ける様子を見て叫ぶ。

鈍い動きながらさらにこちらへ振りかぶろうとする影を目前にして、床に倒れこんでいた月島は四つんばいになり必死にその場を抜け出す。

ブン、と振り下ろされた凶器が石床をうがつ音が背後から聞こえた。玄関は諦めて、萩原の逃げだした廊下方面へと意識を向ける。バツと立ち上がるとそちらへ走り出した。

「ね、熱でんどう！」

ずきずきと痛む肩を押さえ、もつれながらも幾らか動くようになった足で走りながら月島が突然言った。

「……………」

当然萩原は理解できず顔を向けるが怪訝な様子である。

「金属の熱伝導！危険だ！」

焦った様子で叫ぶように月島が言う。

危険なのはそれ以前の問題だが、混乱した頭では熱さを感じたという衝撃が大きかったのだろう。

それをどうにかして伝えようとしている。

「あいつの武器武器！」

なおも真剣な眼差しでよくわからないことを伝えようとする月島を見て、実は彼以上に混乱していた萩原が若干だが冷静になる。

「武器？武器か！」

何やら納得した様子で萩原が一つうなずいた。
やはりあまり冷静とはいえないようだ。

おもむろにキュツと立ち止まると履いていたローファアを手に取り
振り返る。

そこにはやはり狂ったように追いかけてくる影があった。

「消える……消える……」

女の掠れた低い声でそう言い続けているのにも躊躇せず、萩原は片
靴のままタタツと小走りで近づく。

そして手に持ったローファアを大きく振りかぶると、シュツと勢い
よく影へと投げた。

幽霊だと頭のどこかで信じていたものに、当たると思ったのだろう
か。

学年トップの成績を誇る彼も、今の状況では脳の処理能力がまった
く使い物にならなかった。

かくして彼のローファアは――

見事、影に命中したのであった。

「やあつー！」

奇声を上げ思わず動きを止めた影が頭を抑える。

すると月島がはじかれたように走り出し、影の顔面部に全力のスト
リートをお見舞いした。

本来なら体をすり抜けるところであろう。

だがこれも、バシィ！と小気味よい音を立てて命中した。

「くあっ！」

カランッ

吹き飛び尻餅をつく影の、握り締めたままの凶器が石床に当たり大きな音を立てる。

必死の形相の月島がさらに追い討ちをかけようと瞬時に駆け寄る。

「ヤアアアアアー！」

抵抗した影が倒れてなお手放さなかった凶器をブン、と一閃する。

「うがつー！」

ジュツと音を立てて膝下から煙が上がる。燃えるような痛みにも月島が足を庇ってうずくまる。

無防備な背中が影の前にさらされる。

しかし影は焦ったように立ち上がり月島に背を向けると、一目散に玄関へと走り出した。

逃げたと言っている様子であった。それほどまでにその背中には必死に走っていた。

月島に遅れて攻撃態勢に入っていた萩原が、いきなりの敵の撤退に呆気にとられる。

「なっ」

呆然と立ち尽くす間に影は玄関へたどり着き、ドアを引き開けて外へと出て行った。

痛みが引いたのか、背中を丸めてうずくまっていた月島も顔を上げて閉まるドアを見つめる。

「え？」

ボタンとドアが閉まると何事もなかったようにしん、と屋敷が静まり返る。

しばらくポカンとした様子で二人は薄暗い廊下で固まっていた。

10話：途方に暮れる2人

呆然とドアを見つめ続けて数分。

嵐の後の静けさのように屋敷は静まり返っていた。
女が戻ってくる様子も無い。

「……なんだっただ？」

やつのことで萩原が声を絞り出すと、月島もよろよろと立ち上がる。

廊下の壁に背中をあずけて寄りかかると、両手で顔を覆う。

「……わけわかんない」

「ああ……ホントわけわかんねえ」

萩原は顔を俯かせると、髪をわさわさと掻き毟った。
理解できない問題に遭遇すると出る癖だ。

「でもとりあえず、一つわかったことは」

「あんのかそんなもん」

顔から両手を外し、ぐったりした様子の月島の顔が玄関ホールの手
うへ向く。

「俺さつき、怪現象で玄関開かないのかと思ってたけど、ドアは引
かなきゃ開かないな」

「ふざけんな……お前何年ここの住人やってると思ってんだ」

屋敷内から外へ出るときは、玄関のドアを手前に引かないと出られない。

ひたすらドアを押していた月島は大間抜けをしでかしたということだ。

毎日当たり前のようになっていることなのに、人間焦るところなことをしない。

はは、と乾いた笑いをこぼすと月島は廊下をゆっくりと歩き出した。

「とりあえず玄関に鍵を閉めよう」

「閉めたらあいつが入ってこないつつ保障はあんのか？」

落ち着き頭が少しずつ冷静になるのに比例して、底冷えするような恐怖がわき上がっていた。

先ほどの鬼気迫る恐怖とは違う、見えなくなった脅威に対する恐れであった。

「だってほら、あいつドア開けて出てったじゃん。もしすり抜けたりできるなら、そんな手間かけないだろうし」

「あ、てことはあいつ、幽霊じゃねえのか？」

”幽霊”信じたくはないがずっと彼らのなかでくすぶっていた言葉。改めて言葉に出すと、ピリと緊張した空気が流れた。

「それはどうだろ。そういうタイプの霊なのかもよ。まあとりあえずあいつ靴当たったし、よくゲームとかである物理攻撃が効かない定義じゃないんじゃない？すり抜けたりはできないんじゃないかな」

余裕のない場面での月島は問題に対応するにはどうするべきか、普段あまり使わない頭を回転させて打破策を見つけ出そうと冷静になる。

対して普段は冷静に頭を働かせる萩原だが、手に負えない状況になるとなかなか混乱から立ち直れない。その様子が今ありありとでていた。

「でも幽霊つてのは魂が丸出しで放浪してる状態なわけだろ？魂は本来物理的な物に内在してなきゃならないもんなんだから、すり抜けらんなくゃおかしいだろ」

そんな背後から聞こえた萩原の幽霊分析に、玄関に鍵をかけた月島は疲れた声で対応する。

「ずいぶん哲学マンモードだね。でも幽霊定義なんて生きてる人間にはわからないし。だから俺はさっきのは人間だったってことにするよ、物騒なのはやだし。今はあいつがドアをすり抜けられなかったってことが大事。これで安眠だい」

「ああそうか、そうだな。さっきのは噂を聞いて面白半分で忍びこんだ人間に違いない。他の忍び込んだやつを脅かして遊ぶ愉快犯なんだ」

珍しく他人の意見を鵜呑みにし、そう自分に言い聞かせて落ち着こうとする萩原をわき目に、月島はふらふらと玄関ホールすぐそばの自室へと戻っていく。

一週間の疲れと、バイトにバトルでバットで殴られ、3Bをこなした彼の体力はもはや限界を超えていた。

大型犬とルーベンスの絵さえあれば天使のお迎えが来てもおかしく

ないと本人は感じていた。

「うつパトラッシ……」

靴を適当に脱ぎ散らかし、窓際に敷きっぱなしの布団の上へバタンと倒れるとすぐに寝息をたてはじめた。

直前まで恐怖にさらされていたというのに、人間の強かさを感じさせる光景だった。

だがバットで打たれた以外は同じ状況下にいたであろう萩原は恐怖との戦いはまだ続いているようで。

（人人人）

手のひらに漢字で人と書いて、さっきのは人間だと自分に刷り込ませようとしていた。

落ち着き効果と併用できる今の萩原にはベストな行動だろう。

だが結局朝が来るまで眠気が訪れる気配は無かった。

11話：金髪女、タネあかし

「うつ、うつうつ……」

暗い夜道に噉り泣く声だけが聞こえていた。

深夜1時近くにも関わらず、ポツリと一人泣いているのはどうやら女性のようにであった。

人影は通りの真ん中で俯き、顔を両手で覆ってさめざめと泣いていた。

「どうして……」

肩を震わせてぐずぐずと鼻を鳴らしながら嗚咽を漏らす。

顔を覆ったまま数歩足を進めると、明るく照らす外灯の下へ出た。照らされたのは少しくすんだ金色の長い髪。

すると突然、彼女は身につけていたロングコートのポケットへ片手をガサリと入れた。

まさぐり、中から取り出したのは手鏡だった。

「……?!」

覆っていたもう一方の手も外し、そろそろと鏡に映った顔を見ると、思わず彼女は絶句した。

そこにあっただのは自分とは思えない、KO負け選手のような顔であったからだ。

「なんで……」

鏡に映った顔へ、ポツリポツリと涙が落ちる。
手をそっと右目に当てる。

紫色に変色し腫れたそこに、ピリと痛みが走る。
う、と息をもらすが、すぐにスーッと息を大きく吸った。

「なんで私がこんな目に合わなきゃいけないのっ?!」

悲痛な叫びが深夜の静けさを切り裂いて響いた。

「ホントはみんなと楽しくカラオケオールだったのに!!なんでこんな怖い目につ」

ずずずと鼻を吸り、ぼろぼろと涙を流して彼女は叫び続ける。

「もうやらあああっ!!」

外灯の中、悲しみに暮れるヒロインのように彼女は泣いた。

恐怖から来る緊張の糸が切れ、留まっていた感情を放散させたのだ。

彼女の感情をここまで抑制させた恐怖とは何であったのか。

それ以前に、彼女はなぜ危険も顧みず夜道で一人泣いているのか。
始まりは数時間前の出来事であった。

土曜日、授業の無い大学生というのは自堕落なものである。

起きたら太陽は南中過ぎなどとよくあることで、その時点でさらに二度寝を決行する輩も居る。

彼女もその一人で、午後5時を過ぎた今も、すびすびと寝息をたてて眠っていた。

「起きてよー。起きないと遅刻しちゃうよー」

まるで世話好きなギャルゲーのヒロインのようなセリフが降り掛かる。

「うにゅー」

だがしかし起こされる人間もまた、ギャルゲーから抜粋したような可愛い寝ぼけ声を上げて寝返りを打った。

ふわふわとしたブロンドの髪が白いシーツに広がる。

起きる様子もなく寝息をたてる彼女を見て、今度はため息が降り掛かった。

「てやつ」

ピースした二本の指が閉じた瞼の上から眼球にドスリと突き刺さる。

「うぐうつ!」

衝撃に目を押さえ、ジタバタと足をばたつかせて藻掻きだした彼女は、そのまま転がるとベッドから落下した。

「うわわ!落ちたっ!ごめんお姉ちゃんやりすぎたっ」

「目が……目がぁ!」

しばらく悶え苦しんだあと息を正し、髪もパジャマも乱れた姿でゆっくりと上半身を起こす。

それからボンヤリと薄目を開けると、目の前の人物に焦点を合わせた。

「美也子ーおはよー……」

「お、おはようお姉ちゃん。もう5時過ぎだよっ」

「あふ……ありがと美也子、起こしてくれて、カラオケ今日の7時からで……ふああー」

「カラオケ7時から?! ああ、やっぱり覚えてないんだ。お姉ちゃんっ、昨日の夜に私と話したこと忘れちゃった?」

「昨日の、夜?」

こてん、と首を傾げ眠たげにこちらを見返す様子に、美也子は困った表情をつくった。

「覚えてないんだね? 今、高校で話題の新聞の話だったんだけど」

「ああ昨日、先輩に告白したとか何とか言ってたっけ……」

「違う! それは皆にそう勘違いされちゃったよ、ってところでしょ! なんてそんな微妙なところだけ覚えてるの!」

うまく回らない寝起きの頭で考え、少しだけ思い出す。

昨日の夜遅く帰宅した自分に対して、妹の美也子が“大事な話”だ

と言って切り出したこと。

大学の人付き合いで、正直気乗りしない飲み会に参加した帰宅後であつた。

酔いが回っていた彼女が覚えていないのも無理はない。

「もう。大事な話なら酔つてるときに言わないでよ。覚えてられるワケないでしょー。今日でも良かったじゃん」

「昨日、散々明日じゃダメだって説明したのに！どうせ明日は遅くまで起きないだろうから、話すなら今日にすべきだって思つて」

「ふうん、そっか」

「遅くまでお姉ちゃんを寝かしておきたかつた理由は他にもあるの。体力を万全の状態にしておいて欲しかったからっ」

何のことやら、再び姉がこてんと首を傾げる。

美也子はそこまで言うとかポケットから何かを取り出し、姉の目前に突き付けた。

「お姉ちゃんへおつかい。詳しくはこのメモに」

「あ……」

メモの内容を読み理解するに従い、姉の表情はどんどん曇つていく。

相対して眠気から来る頭のモヤは晴れていき、昨日の記憶も段々と甦っていく。

メモには可愛らしい丸字で、しかし内容は全く可愛らしくないことがつらつらと書かれていた。

学校の近郊にある無人の洋館。

そのはずなのに、女性の歌声が聞こえたという噂。

周りほどの程度か分らないが、とにかく高い塀に囲まれている。

入り口は無く、侵入には長い梯子が必要なこと。

そしてその洋館への道順。

ざっとそんな内容だった。

そして浮かぶのは、昨日の美也子の言葉。

——明日、土曜日の日が変わる頃にお姉ちゃんに行ってほしいの。

「私が……この無人の洋館に行くの？」

「そうそう！思い出してくれた？」

「やだっ、何で私が！私はカラオケ行くんだもんっ、やだよ……」

涙目になって必死に否定する姉に、妹は暗い表情で顔を伏せる。

だがそれは情けない姉だと思っ気持ちの表れでは決して無かった。

「霊を払う力は、お姉ちゃんとお母さんしか持ってないから。……

私じゃお化け見えないし」

“霊を払う力” 美也子の口から随分スピリチュアルな言葉が出たが、
いたって本気の発言であった。

彼女はその力を、物心付く前から茶の間の話題としていたため、
前存在するものとして受け止めていた。

自分には無い、その除霊パワーを母と姉が持っているとの疑いも
無く信じているのだ。

「この話もとはね、洋館ホラーの噂が学校で話題だよってお母さんに言ったのがはじまりだったの。それ何とかしなくちゃいけないから詳しく調べてきなさいって言われて。だから調べに行つたのに、お母さん行かれないって。お姉ちゃんに行つてもらいなさいって」

「知らないよそんなの……放っておけばいいじゃない……怖いもん、幽霊怖いもん」

「普通の人なら見えない幽霊を、見られる私たちが何とかしなくちゃいけない。それが家族での約束でしょ？ごめん、私が偉そうに言えることじゃ無いけど」

「でも私一人じゃ無理だよ！お母さんについて行つた時だつてすごく怖かつたのにつ！出来ないよ。他の見える人が何とかするよ……なんで私がわざわざ。放っておけばいいよ」

姉、香苗は霊が怖かつた。

確かに彼女自身も、妹が言うように自分が霊能力者であることは認めているが、普通の女の子と同じように霊が怖かつた。

そんな怯える姉を責め立てることは出来ない妹。

美也子の暗い表情は、何も出来ない自分自身を情けなく思うものであつたのだ。

彼女には霊など見えず、当然除霊の力など無い。無力の自分が悔しかつた。

「お姉ちゃんはさ、普段からお化けが見えてるんだよね？でもやっぱり怖いんだ？」

これ以上の説得が心苦しくなったのか、美也子が少し話題を逸らす。

「うん怖い。普段は見えてるんだろうけど、わからないの。人と同じようにしか感じないから、気付かないの。でも、改めてこれがお化けですって宣言されて、それが見えちゃったら、もうそれはお化けではないから。怖いでしょ？」

「なるほど、人と同じよう感じるのかあ。じゃあ本当に人間なのにこれがお化けですって言われたら、騙されちゃうねー。あはは」

以前同じ質問をしたことがあったことを思い出した美也子が、当時と同じ切り返しをして笑った。

香苗も当時と同じように、それ嫌だねと言って笑ったのを見て少しだけ安心する。

姉をマイナスの感情から救うのは笑いだと美也子は長年の付き合いで学んでいた。

それで落ち着いたのか香苗は笑い終わると、ふうとリラックスした様子でため息を吐いた。

「お父さんの命を奪ったんだもん。やっぱり霊は怖いや」

「……っ」

落ち着いた表情をしながらも俯いてポツリ言ったその言葉に、妹は息を飲んで固まった。

「でも、お父さんの仇だもん。やっぱり霊が憎いよ」

「！……うん」

顔を上げ、美也子へ向けられた澄んだ目には先ほどの怯えの色は無かった。

少しでも気分を和らげられれば、他の視点からもう一度現状を見つめ直すことができる。

美也子はそんな姉の強みを理解していた。

「洋館行くよ。幽霊を私たちが何とかしなくちゃいけない、野放しにはしておけない、私たちの憎むべきものだから」

「うん！」

天気のようにコロコロ変わる香苗の性格が、美也子は好きだった。一つのことには捕われず、成長していくことができるから、と少し羨ましくさえ感じていた。

また口には出さないが、姉は恐怖との相性が良いと捉えていた。彼女のゴキブリを目前にした時の、奇声を上げながらの猛攻は凄まじい。

火事場の底力が出せるタイプなのだ。そして今回のように恐怖で動けなくなった時でも、必ず打破し乗り越える強かさがあった。

「お姉ちゃんはずこいね」

「え？何？それよりご飯作ろう！今日はカツだよ！あーカラオケ断りの連絡も入れなきゃ。うう、歌いたかった」

「ご飯も大事だけど……私がお姉ちゃん起こしたのは、除霊武器の準備してもらったための」

除霊武器という言葉に、美也子に背を向け鞆をあさっていた香苗が

振り返る。

「おっかないことをさらりと……カラオケ断りメール入れたら、準備するからさ。武器下から持ってきてよ」

そう言い、携帯を求めて再び鞆をあさはじめた背中に頷くと、美也子は部屋を出た。

廊下を歩いてすぐの階段を降り、さらにもう一階分降りる。

この家は3階建て地下付きという、敷地面積は狭いが上へ伸びた構造であった。

香苗の部屋は2階にあり、そこを出た美也子は地下へと向かったのであった。

地下には一部屋しかない。現在は誰も使っていない部屋だった。

カチ

壁のスイッチを押すと、暗い部屋に明かりが点いた。

照らされたのは、随分と物でごちゃごちゃした印象の部屋だった。

デスクの上は紙や本の雪崩が起きており、微々たるスペースしか茶色の木目が見えていなかった。

床も本やくちやくちの服やティッシュやらで散らかっている。

美也子は足の踏み場を選びながらデスクへと向かう。

武器はそこにあった。

カタン

金属バットであった。

デスクに立て掛けられたそれは、除霊武器とは到底思えないただのバットである。

「よいしょっ」

手に持ち、床のスペースを縫ってもと来た道を引き返す。
電気のスイッチ前まで戻ってきた彼女はちら、と横目で壁を見る。
そこには、へたくそなクレパス画が飾られていた。題名は『おとうさん』。

美也子は少しの間それを見つめると、ぎゅっと目を瞑り部屋の電気を消した。

金属バットを両手で引き摺るようにして階段を登る。

「ひふうー」

急ぎ足で登る階段は長年の住民にとっても苦痛である。

700グラムほどしかないはずのバットがずしりと重く感じる。
息を整えながら香苗の部屋のドアを開ける。

「お姉ちゃんこれ武器……」

一歩足を踏み入れ、姉の姿を見た美也子は口をつぐむ。

部屋の中はしん、としていた。

視線の先の姉は、ドアに正対してベッドの縁にちょこんと座っていた。

目を閉じ静かに座る姿は、先ほどの喧騒の中心人物とは別人のようであった。

「……………」

香苗がぱちりと目を開き、美也子の方へと無言で両手を伸ばした。

「あ、うん」

何となく音を立てないほうがいい気がして、摺り足気味にすす、と美也子が近づく。

そして手のひらを上に差し出された両手に武器を置く。

香苗はバットを受け取ると、すっとそれを胸に抱く。

しばらく目を閉じ、ぎゅっと強くそれを抱きしめていたが、体から離すと、バットの先端を口元へと持つていく。

「力を貸してください」

そう囁くと、バットの先へ優しくキスをした。

その瞬間、ふわっと暖かい風がそこから溢れた気がして、美也子は目を細める。

「ほわ……」

思わず感嘆の声が出て、慌てて口をつぐむ。

何だか少しでも自分が動くと、今の空気を壊してしまいそうだと美也子は思っていた。

そんな思いに気付いているのかいないのか、香苗はただ黙々と目を閉じバットに語りかける。

バットに語りかけているその光景など、どう頑張っても野球部のマネージャーが願懸けをしているようにしか見えない。

だが美也子は目の前のそれをどこか神聖視していた。静かに姉のその儀式を見守り続ける。

「うわっ、あんま見ないでよ」

しばらく静かにバットを抱きしめて何かを呟いていた香苗だったが、目を開けた瞬間、美也子がじっとこちらを見ていることに動揺する。

「え、いやなんか、目を離したらいけない気がして」

「見てないほうがありがたかった！恥ずかしいじゃんもう！」

「でもきれいだっただよー」

「ほらほらそれより、じゃーん！幽霊退治バットの完成！効果は一夜限りのマジカルバット！すごいでしょー。ちなみにおさわり禁止ね！私以外の人が触るととっても危険なんだから！」

自慢げに見せびらかしてくる香苗だが、パツと見るかぎり何の変化も感じないただのバットだ。

それでも美也子はすごいすごいと拍手をする。

この姉妹の仲が良い理由は、8割方美也子の寛大さにあるのだろう。中学生にしては実に大人だ。

「よしじゃあ今日は私がカツを作ってあげるね。お姉ちゃんはマジカルバット作りで使った体力を回復しておいて」

そういつて立ち上がろうとした美也子の眼前にビシッとマジカルバットが突きつけられる。

「またれい。私も作る！体力なんて食べたら充分回復するもん！それに、二人のパワーで勝算は倍だよ！」

「なるほどっ、じゃあ一緒に料理しよー」

こうして二人の共同作業の幽霊退治に向けてのカツ作りは始まり、キッチンでは楽しいクッキングタイムが繰り広げられた。完成系はパーフェクト、味もミシュラン3つ星級であると二人で絶賛した。

今日は完璧な当たり目の日だと確信した。

それなのに

それなのに……

お化け退治はあえなく大失敗。

幽霊に靴を投げられ、全力のストレートを喰らい、目の周りには大きな青あざ。

必死に逃げ出した。

そして街灯の下で泣きじゃくる現在に至る。

10分くらい街灯の下に立ち尽くしていただろうか。鼻をすするばかりで涙はもう出ていない。

だが顔は左目が赤く腫れ、右目は青く腫れるというなんとも派手なことになっていた。

やっと落ち着いた香苗は洋館の幽霊分析をはじめていた。

（履いてた靴を投げたり、全力パンチをかます幽霊なんて聞いたことない）

しゃくりあげながら思い出す二体の幽霊はあまりにイレギュラーだった。

他にもどうも人間くさい、幽霊独特の儚さを感じさせない様子が伺えたことに首を傾げる。

首を傾けた瞬間片側に集結した鼻の中の水をずっとすすり、うーと小さく唸る。

「さむい」

止めどない鼻水が号泣だけが理由でないことを悟り、はやく家へ帰ろうと思いつく。

くるりと振り返り街灯の下から離れると、暗がりに転がる物体に手をかける。

除霊武器、マジカルバットだ。

カラカラと冷えきったそれを引きずりあげ、そのわきのくしゃくしゃに放置した梯子も回収する。

（重いよー、寒いよー）

そして彼女はふらふらと夜道へと消えていく。

近場に停めてある車の暖房を求めて。

彼女はまさかさっきのが無断居住の貧乏人だとは思わないだろう。

そして逆もしかり、まさか霊能力者が除霊に来たのだとは思えない。

そもそもそんな職業が実在することを彼らは信じていない。

だが確かに人がいないはずの洋館で賑やかな事件が起きてしまった。すれ違いが幽霊を形作っていく。

2人の望む日常が確かに崩れていっていた。

12話：サテライト大事件

日曜日の朝8時、学校。

「まにあった……」

そう言い黒板に書かれた指定席に着いた月島は倒れこむように机に突っ伏す。

左隣の席では登校済みの萩原が、すでに机と一体化したようにへばりついて沈没していた。

サテライト授業では英語数学の2科目を受ける。教室は2部屋用意され、好きな順番で授業を受けることができる。

そして実はこのサテライト、強制ではない。自身の参加するという意思での授業だ。しかもサテライト授業代という出費も発生する。参加すると言った以上休めば出席に関わるが、わざわざ萩原と月島が参加しているのは特進奨学生だからだ。奨学金の中にサテライト授業分の割り当てがあったので、受けざるを得ない。

そのため友野姉妹は1限の英語のみ、藤井は2限数学のみの参加だったし、谷に至ってはただの休日だ。

ホームルームは無いが教室内に居るのが10人強と少数なので、座席表を見れば誰が居ないか一目瞭然である。

席は指定制であり、その科目選択者のなかで出席番号順に並ぶよう振り分けられている。

「あははっ！死体がふえたー」

月島の右隣、光の席に群れていた恵が、こと切れたように突っ伏す

2人を揶揄して笑う。

「恵、もう時間だから席戻んなよ」

「えー。うう、ハブリ席だからイヤなんだよなあ。なんで席余ってんのに横6人ずつなんだろ」

ハブリ席とはその横1列でポツンと1人だけ孤立してしまっている席のことである。

隣に人が居ず前の席の背中だけが頼りの孤独で寂しい席である。

ふてくされた顔で恵が席へ戻ると、教師が荷物を持って入ってくる。

「よいっしょ」

新人巨乳教師、新崎可憐だった。荷物を置いたときの揺れる胸が眩しい。

その気配に死体と化していたモテないメンズがのそのそと起きあがる。

そしてもちろん大きく揺れるそれをガン見する。

「……………」

一連の動作を見ていた光の、蔑むような視線などもとせずただガン見する。

女子のなかにも可憐級のメロンガールが居るには居るが、教師という彼女は特別重宝な存在だ。

堂々とずつと見ていても問題にならないから。

「はい、じゃあ教材配りますよ。6冊しかないから2人1組、席つけて使って」

サテライト先の有名予備校のテキストを前から回す。

生徒も指示通り1席づつ孤立した状態から、くっつけ2人席モードへフォームチェンジする。

「あ、1人休みですね。友野さん、空いてる席詰めちゃって」

「はい」

ハブリ席解任の恵が、にこにこと上機嫌で萩原の左隣の席につく。それを確認すると教師は後ろを向き、何やらリモコンのようなものを棚から取り出した。

ピピッと音がして黒板がウインウインと上へあがっていく。

すると壁に埋め込まれたテレビがデーンと大画面であらわれる。

何度も見た光景なので生徒もとくに驚かないが、やはり貧乏2人の心中は穏やかではない。金持ち学校めが、と改めて感じてしまう。

「それでは1時間30分、集中して取り組んでください」

開始の合図とともにスタートボタンが押され、砂嵐が映っていた画面がプツツと綺麗になる。

このクラスは英語の講義だ。

オープニングから画面が切り替わると、講師がいきなりアップで現れ一瞬全員びくりとなる。

「みんなー。楽しい英語の時間はじまるぞー」

サテライト用に撮影したのだろう、カメラを意識したアタックだ。一流大学目指して頑張ってるなどと手を振りながら言う講師の声が、ポカンとする生徒のなか明るく響く。

だがそこからは普通に講義がはじまる。
生徒たちも集中してノートを取りだした。

英語講師の指導の声とカリカリとペンを動かす音が教室に響く。

新崎先生は生徒監視と異常があった時の対応役で、とりあえずは教室に居ればいいので、黙々と赤ペンを持って採点作業をしていた。

「……………」

静かに講義が進む中、しばらくすると脱落者が現れる。

かくん、と首を力なく下げ、恵が夢の世界へ旅立っていった。

特進クラスの生徒は普段こそおかしな行動をする人はいいるが基本、授業に対する態度は真面目だ。

そのため高確率でこの状態になる恵は、特進内の異端者だといえる。

「……………」

その特進でトップの成績を持つ萩原だ。

普段なら隣で寝るやつがいようが、気にも留めず講義に集中するだろう。

だが今日は席がくつついていることと睡眠時間がほとんど無かったことがあり、自慢の集中力はまったく機能していなかった。

こくりこくりと船を漕ぐ恵を視線の端に捉えて口元を歪める。

（今一番欲しいものが睡眠時間なのに、頑張って起きてる俺の前で眠るなんて…ゆるさん）

実はそんなに腹が立っているわけでもないが、集中できずどうしようもないので、恵で遊ぶことにする。

「……」

眠る直前の恵のノートは悲惨なことになっていた。
もはや英語なのか日本語訳なのかわからない、によるとした
曲線がのたくっている。

私はマイケルは私はマイケノレ
という寝ぼけてどこを書いていたか忘れ2度書きしてしまう、忘却
性寝ぼけ現象からによるが続いているので、日本語訳だった
と推測できる。

（なにこのマイケル暗示。マジ怖え）

鼻で一笑して落書きをしてやろうとシャーペンをかまえる。
暗示を漫画のようなフキダシで囲い、その下に恵の似顔絵を、

（……人の顔ってどう書くんだ）

描こうとして手を止める。

去年の美術の授業に彫像画があったが、芸術科目は美術、音楽、書
道からの選択で書道を取ったため、関わっていない。

なんと、人の顔など描かずにこれまで生きてきたことに今気付く。

（えーっと）

恵の寝顔を見ながら模写をする。

そこまでして描く必要性を全く感じないのだが、いらん所でも真面
目なヤツである。

いらん所で不真面目でもあるのだが。

（うつわ、まつ毛長っ。バケモノか）

これだけ近距離で長い時間顔を見るのははじめてのことだ。
1年半をこえる付き合いでの新発見である。

（……ていうかコイツ、黙ってるほうが全然いいな。もったいないヤツ）

長いまつ毛や少し日焼けした肌、さらさらとした黒い艶のある長髪。小柄で明るい印象の彼女だが、こうして大人しく眠っていると、艶やかな色香がただよう。

普段は幼さが目立つこともあり、ふと、こうした場面で驚かされる意外なギャップの持ち主だった。

「……………」

誉めたところで、ちょっとはマシに描いてやろうと思っても、どうにもならないことはある。

人参のような輪郭から目、鼻、口すべてがはみ出していた。強調したまっげは白目をギザギザと上下に両断している。

模写したはずの恵はかわいさとか色気とかそれ以前に、人として危ういラインの絵だった。

どんなにがんばって見たところで妖怪でしかない。

（俺、もしかして……絵心無い？）

今まで気がつかなかった彼の神経を疑う。

人物画以外はうまく誤魔化してきたのだろう。先生も、自分も。衝撃だった。

呆然と自分の絵と恵を見比べる。

「……はは」

こんなところで自分の短所に気づくとは、と小さく笑いがもれる。その声に反応したのか恵のまつ毛がピク、と動きうつすらと目を開けた。

そしてぬぼーっと萩原の方へ顔を向ける。

「ぶくっ」

そのあまりの間抜け面に吹き出しそうになり口を押さえる。あまりの落差だった。

あながち似顔絵も間違いではない、新種の妖怪のようであった。こしこしと目を擦りながら、とりあえず妖怪モードからは立ち直る。

「……?？」

吹き出しそうな萩原というレア現象に、寝ぼけながらも違和感を感じたらしい。

寝起きで視界がぼやけてよく見えならしく、顔を近付けてまじまじと見る。

(近いっつの)

上半身をこちらへねじり、ためらい無く近づけてきた顔にさすがに動揺した萩原が身をひく。

そしてそのまま視線を逸らそうと思ったその時、

「……?!」

背中にドスと激しい衝撃を受けて、前へと押しだされる。

目の前にはまだボンヤリとした顔でこちらを見る恵。

（ヤバいッ！！）

押し出された後の一瞬、脳裏に映し出される大惨事。

このまま勢いに逆らわなければ恵と顔面同士が衝突、当たりどころが悪ければ唇ドッキングコースだ。

（そんな少女漫画展開ヘドが出るっ！）

なんとしても惨劇を防ぐ一心で、脳から体全体へ緊急任務が言い渡される。

——顔は右向け右ッ！腕は正面恵方向へガードを作れ！

脳の指令に即座に対応する顔と腕。最悪の展開を防ぐ素早い防御手段のはずであった。

ガスッ！……むにやつ

（むにゃ？）

ガスッ！は方向転換した顔の側面が、押された勢いで恵の顔面にヒツトした音だ。最悪と予想された唇衝突は避けられた。

では腕へと伝わるこのむにやつと感は何か。

ゆっくりと顔を元の方へもどし、自分の左腕の位置を見る。

「……」

肘から先の腕一面に、恵の胸がジャストミートしていた。

そろそろと視線を上げると、口を大きく開けたまま硬直している恵

と目が合う。

その顔には眠気などもはや微塵も無い。

「いや、違う」

みるみる顔が赤くなる恵に冷や汗をかきながら萩原が弁明しようとする。

しかしそんなものが聞き入れられるはずもない。

「ふ……ふやああああッ！！」

前から後ろから輪唱した悲鳴があがる。

（後ろからも?!）

思いがけず背後からあがった悲鳴に驚き、バツと後ろを振り返る。

同じタイミングでこちらを振り返った月島と目が合った。

一体何が。月島の奥へと視線を移す。そこには悲鳴をあげた口のまま真っ赤な顔をして固まる光が座っていた。

双子の姉妹だと感じさせる、恵とよく似た表情であった。

普段は似ても似つかない2人が、めったに見せない表情で血の繋がりを感じさせるとは、感慨深いものがある。

キンコンカーンコン……

膠着状態を破るように、授業終了の鐘が鳴る。

その音に我に返った友野姉妹が、体を震わせながら言葉とつめき声を吐き出す。

「なに?なんで?」

「く、くっう……！」

顔は真つ赤なままで、恥ずかしさの他に怒りが沸き上がるのが見てとれた。

「不可抗力だ」

「え、俺、何したの？」

悲鳴の輪唱を引き起こした二人の方を向き、クラス中の目が点になっていたが、我に返った新崎先生が思い出したように口を開く。

「あ、えー授業を終わります」

ガタンッ！

四人が一斉に椅子から立ち上がる。

二人は怒りに身をまかせて、二人はその殺意の波動に気押されて。

「くっ！」

萩原と月島が逃走をはかりスタートダッシュをきめる。

先日から逃げてばかりで、ビビりまくりの自分に唇を噛むが仕方ない。ヤバい逃げると無意識が告げているから、頭より先に体が動いていた。

だが逃げることさえ許されなかった。

ガッツ！ガタガタガッツ！

走りだしたと思った瞬間、萩原と月島がバランスを崩す。

サツと素早く出された足にひっかつたのだ。

騒音をたてて椅子と机にぶつかりながら、その場に膝をつく。

慌てて立ち上がるうとした所で手遅れだった。

もがく間も無く首元を掴まれ、床へと強い力で押さえ込まれる。

気付けばべたりとうつ伏せになり床とキスをしていた。

「……?!」

あまりに早い展開についていけず混乱する。

状況が掴めず動けないうちに、体がコロリと半回転させられるのを感じる。

視界は一面の床から一転、仰向けになり開けていた。

「え？」

仰向けになった彼らの目に映ったのは天井ではなく、馬乗りになつて見下ろす人の顔。

まだ紅潮した頬に潤んだ瞳、きゅつと眉をひそめた少女たち。

そんな可愛らしい顔を見上げながら、男たちは恐怖しか感じる事ができなかった。

こんな状況でなければ、いつもは見せないそんな表情に違った感情を抱いていただろうに。

「「この……変態っ!!」」

バチーンッ!!

ビュッと風を切って頬に迫った手のひらは、拷問のムチのような音を發てて頬を打つ。

「いつてええ!!」

たまらず馬乗りになったお仕置き仕掛人を退かそうとするが、少しでも動こうとすれば首をきゅっと絞められる。

マゾならばこれ以上ない歓喜の瞬間だが、その世界に踏み入れたことの無い彼らは対応出来ない。

スイッチの入った彼女らはなおもビンタを続ける。

力にモノをいわせて彼女らを退かすか、彼女ら自身が冷静さを取り戻すまでこの状態はしばらく続くだろう。

見るに耐えないので、ここでなぜ月島がひっぱたかれるに至ったかを振り返ることにする。

教室に入ってきたとき、新崎先生は落ち込んでいた。

(あんな所に水いっぱいバケツがあつたなんて)

実は彼女の起こしたテキスト落下水没事件によって、生き残った6冊で授業をすることになった英語クラス。

隣同士机をくっつけ2人でテキストをシェアすることになり、光のペアは月島となった。

それなりに会話をすれば盛り上がる2人だがそこは特進クラス、話さず真面目に授業に取り組む。

(Accordinglyでまとめに入ってるからこの問題の答えはこっから先に……ん?)

パツと集中が途切れる。
左肩がずしつと重い。

（……あーあ、もう）

急に重くなった肩を見ると、茶髪頭が目に入る。
月島が光に寄りかかって爆睡していた。
授業中にここまで寝込むのは珍しいことを知っていた光は、あきれながらも疲れがたまっているのだらうと同情する。
週5のバイト事情を彼女は知っていた。

（1、2分は起こさないでいてやるか）

小さくため息をつきペンを持ちなおすとテレビへ視線をもどす。
電車の中で隣の人が寄りかかってくるという同じようなシチュエーションでも、嫌悪感よりも同情心を持つタイプだった。
きつとすんごい疲れてるんだらうな、と。
まあ結局肩で押し返して元の位置に戻ってもらうのだが。
真面目で厳しい面もあるが、相手のことを心から思いやれる、優しい女の子なのだ。

「……」

光が再びペンを走らせはじめ、小さな振動が月島にも伝わっているはずだ。

しかし平和な顔で平和な寝息をたてながら眠る彼が、起きる様子は無い。

いやむしろ眠りはより深いものになっているようだ。
ずるっと肩に支えられていた頭が落ちる。

もはや体全体で寄りかかっていたのか、頭はより光方向へ、かつ下へと落ちていった。

ぽにゃっ

顔面が、柔らかいエアバッグによって落下を止められる。言わずもがな、胸である。

（——！！）

光の頭が真っ白になる。
だがまだどこかで、無意識のことだから仕方ない、落ち着けと唱える自分が居た。

（急いでこいつを退かして、コトをおさめよう。忘れよう、これは事故だから！）

その理性が頭が真っ白になった彼女に提案する。それに従い、震える彼女の左手が月島を退かそうと動き出す。
しかし。

「んー……」

感触が良かったらしい。まだ寝たままの月島は、幸せそうな様子で顔をもごもごと押しつける。

これもまた無意識であり事故だ。
だが光の中でそう言っていた理性はどこかへすっ飛び、頭は完全に真っ白になっていた。

「——っ！！」

軽く叩いて起こすために出していた左手で、力一杯月島をどつき飛ばす。

勢いで後ろにいた萩原の所まで吹っ飛んだが、気に留める理性はもうない。

突然突き飛ばされ、目は覚めたが状況の理解出来ない月島が驚いた顔で辺りを見る。

キョロキョロと宙をさま迷っていた目が光を捕えた瞬間、さらに驚きに見開かれる。

ぶるぶると震え、真っ赤な顔で歯を食い縛る光の顔なんて、初めて見るものだったから。

恵と喧嘩をしているときの怒りの表情とは、全く違うものだ。

目が合ったことが喉元まで出かかっていた悲鳴の引き金となった。

「ふ……ふやああああッ……！」

そして、今に至る。

1分ほど続いた往復ビンタは、姉妹が落ち着いたことによりおさまった。

力では負けないはずの男子2人を圧倒して叩ききつたのだ。

女子を本気の力で払いのけられないことや、予想外のこととで頭が対応しきれなかったことを考慮しても、姉妹の戦闘力はスカウターを壊さんばかりだった。

なにより素早い。考える暇を与えない。

「う、こわあ」

「うらやましい」

クラス中（といっても争い渦中の人間を除いた、たったの8人だが）の視線を浴びながら、友野姉妹は立ち上がる。

ブスツとした表情で惨めに転がる男子を一瞥すると、早足で教室から出ていった。

それを見送る、頬をパンパンに腫らした涙目の男2人は思う。多分こいつらには一生彼氏なんか出来ないだろうな、と。

そして口を揃えて言う。

「バケモノめ」

13話：続・サテライト大事件

じんじんと腫れた頬に痛みと熱を感じながら月島と萩原は教室移動をする。

次は数学だ。

昨夜から今日にかけて体力的精神的にダメージを受けっぱなしだ。今日1日でもう笑い方さえ忘れかけていた。

「うわ、ひどい顔」

教室に入ってすぐ聞こえたのは藤井の声だった。少し心配そうなその声に片手をあげて大丈夫だ、と挨拶をする。

「よう！きたきたー！」

これは大宮の声だ。

ガタガタと机にぶつかりながら、異様なハイテンションで近づいてくる。

何だかすごく関わりたくないの、無視して黒板に張られた席順を見に行く。

早く席に着いて静かに眠りたかった。今日は休み時間もいつもより長い。

「あはは！なにシカトしてるんだよっ！」

月島が、がっしりと腕を捕まれる。

反抗する気力も無い。

だが目の前の萩原だけ良い思いをさせるのは腹が立つので、ガツと腕を確保する。

「離せ俺は寝るんだ」

「一緒にハイテンションを堪能しようよ」

彼らの穏やかな時間はまた奪われるようだ。

「聞いてくれよ！」

「座らせてくれよ」

「よしわかった！座って話そう！」

逃すつもりは無いらしい。

2人の席も把握していたらしく、先導して座らせる。

彼の大きな声はガンガンと疲れた頭に響くので、おちおち寝てもいられない。

興奮した大宮は話したくて仕方ない様子で、鼻息荒く口を開く。

「彼女を求めて昨日発売のエロゲを買ったんだが」

「そいつはよかった。運命の相手には会えた？」

「ははは、イエス！」

聞いてくれて嬉しかったんだろう。パアアという効果音がふさわしい満面の笑みを浮かべる。

とりあえずエロゲにひどくのめり込んでいることがわかった。

「それでだ。……月島葵って名前、エロゲに出てきそうだなって話

したことあったよな？」

「あったあった……まさか」

「居たんだよ。俺が買ったやつに」

「うわ……」

「こいつを見てくれ」

そう言って見せてきたのはその件のエロゲの説明書だった。

月島葵と紹介された少女が確かにそこに居た。

水色のショートカットに黄色のヘアピン。つり目でもたれ目でもなく平行に伸びた濃い青の瞳。全体的に涼やかで落ち着いた印象の長身美少女だ。

そして乳の貧しいキャラである。

「どう思う？」

「……」

そのキャラは名前一致の上に、外見もなんとなく月島（本人）のポイントを捕らえていた。

「すごく……似ています」

沈黙する月島に変わり萩原が答える。それだけ言つと気分が悪くなつたらしく、青い顔で立ち上がり、逃げるように藤井の元へ向かった。

（なんだこの、妙にそわそわする嫌な空気）

続いて月島も席を立ち上がり、この変な空気から逃れようとする。

「まてまて！まだ用はすんでない！」

まわりこまれてしまった！

がつしと捕まれ席へと戻される。

「ちょっとこれつけてみてくれ！」

笑顔で差し出されたのは黄色のヘアピン。もちろん説明書の美少女が着けていたものとほぼ同じものだ。

（うわ、こいつ完全に面影を重ね合わせてる）

微妙な空気の中逃げ出したい気持ちは山々だったが、手遅れにならないうちに更正しなくてはと、そう感じた。

「冷静になれ大宮。お前の前に居るのは」

パチンッ

説得しようと同じ向き直った月島の髪に、素早くヘアピンがつけられる。

「うわあああん！葵いいい！！うわあああっ！！」

「ウウワアアアアーッ！！」

筋張った感觸の熱い包容に、腹の底から悲鳴を上げる。

精神的大打撃を受けた男の悲痛な叫びであった。

「骨つばいよ葵いい！貧乳だもんなぁあ！！」

「誰かいつそ……俺を殺してくれえ！」

「なに、あれ」

少し離れた席でおののいた様子で藤井が呟いた。

「見るな藤井。目が腐る」

瘴気にあてられて逃げてきた萩原が、藤井の斜め後ろの空いていた席でぐったりして言った。最後の力を振り絞り抜け出そうとする月島を大宮がパツと解放する。

「そんなマジ顔で嫌がるなよー。いつものお茶目な大宮ジョークですってば！」

「冗談にしても全力でやりすぎだ大宮氏。月島は心に9999のダメージを受けた」

「はっはっは！俺の愛で回復してやるよっ」

大宮の最後のセリフは予鈴でかき消されて、月島の耳に届かずにすんだ。

日曜日は午前授業のみだ。

昼食を食べてすぐに帰宅した洋館の住人たち。

部屋に着いた途端、靴を脱ぎ捨てて倒れこむ。

西洋式なので靴は常に入り口付近に散乱している。

顔の下のコタツ布団がモサリと顔面を押し返し、疲れた体に気持ちいい。

毎週日曜はバイトを入れていない。今日はもう自由だ。

寝不足の萩原はそのまま眠りにつくとうとする。

「いけね」

しかし思い出したようにポケットを漁って携帯電話を取り出すとポチポチとアラームを設定する。

17:30 ON

それで満足したのかペツと携帯を投げ、布団に顔を埋めた。

「うつ……」

だいぶ遅れて月島がよると部屋に入る。

体力的精神的に萩原よりも大きなダメージを受けていたようだ。

帰宅する道のりも一苦労だったらしい。

ガスッ

「だはっ！」

部屋に入ってすぐの所に倒れていた萩原につまづいて倒れる。
最後までついていない。

「つてえな」

足の痛みに萩原が起きる。

だがお互いに喧嘩をふっかける体力は残っていない。

のそのそとそれぞれの寢床におさまると大人しく眠りにつくのだった。

14話：お屋敷探検！@1階

日曜学校で力尽きた、萩原と月島が眠りについてしばらく。
部屋にはカチカチと音をたてる時計すら無いので、時折イビキが聞こえる以外はいたって静かだった。

……コトッ

萩原のまぶたがぴくりと動き、うつすら目が開く。
小さな物音が聞こえた気がした。

「……？」

窓際に目をやるが布団をかぶった月島が動いた様子はない。

（あいつじゃないのか）

コトッ

もう一度確かに小さな音がした。しかしどこから発せられた音なのか萩原にはわからない。

視線を泳がせて天井へと戻す。

ネズミでも這っているのだろうか、そう思った。

ゴトッ

今度は大きな音だった。

耳のすぐそばで硬いものが床を叩いたような音の方へゆっくりと視線を向ける。

そこには――

ジャジャジャジャーッ!!

「っ!？」

突然耳元で交響曲第5番が流れる。

これでもかという大音量で鼓膜を刺激する。

萩原がセツトした携帯電話のアラームだった。

ジャジャジャジャーン……

（くそビツクリした。だがグッジョブだ。もう少しで夢のオチを見て後悔するところだった）

萩原が目を覚ましたのは今だ。

（リアルな夢だったな。コトコトいいやがって）

あまりに現実的な夢だったのか、そわそわと辺りを見渡す。

何も起きていないのを確認してアラームを止めると、のそつと起き上がる。

ゆらゆらと窓際へ歩いていくと、ドギヤと転がる塊を蹴りあげた。

「ぎえ！」

当たりどころが悪かったらしく、腹の上辺りを押さえてそれは悶絶していた。

「がはっ！てめええ！」

「レッツ探検タイム」

「はあ？」

「これから毎週日曜に1時間、屋敷探検をすることになった」

「いや、なったって……何を突然」

「俺たちはこの部屋とこの先のキッチン、あと隣部屋の風呂トイレのことしか知らないよな」

「うん。そこしか行ったことないし。特に他に必要ないし」

「でもよ、今まではどうでもよかったけど、俺たちはもっとこの屋敷のことを知るべきだと思ったんだ。いろいろとあった今」

「いろいろとあった今？……え、まさか、まだ昨日のこと引きずってんの？あれは噂を聞きつけて脅かしにきた人間だって。屋敷探検したって何も出てこないって」

萩原が沈黙する。言葉を選んでるようだ。

昨日、突然襲来した謎の金髪女について夜が明けるまで悩んだ萩原は、人間だと暗示し信じこもうとした。

だが結局、身に染みた恐怖感や女の異様さが頭に残り、どうしても人間だと信じきれなかった。

人なのか、幽霊なのか。

白黒はつきりわからないのが気持ち悪くて仕方ないタイプなのだ。

この物騒な屋敷に、霊的な疑いがないかを確認して、やっと晴れて人間だったと思うことができる。

それがわからなければ、これからも恐怖にとりつかれる上に、喉にデカイ骨が引つかかったようなもどかしさが残る。

一人ではおっかないので月島を巻き込んで調べようという魂胆だが。

「昨日のが何だったのか、きちんとわからないと気持ち悪いんだよ」

「うわ、物好きなことで」

一方で月島は正直、現実逃避がしたかった。

白黒つけなくていいから人間だと思い込んで居たかった。

（うーん、でも屋敷探検ツアーか……気になるなー）

だがそれよりも目先の楽しさを優先する奴だった。

そんな考えから興味を持ち賛同すると思いきや、ふと思い出したことを口にする。

「でも確か俺たち、“屋敷散策は禁止”って決まり作ってたけど。……てかあれって何で作ったんだっけ？」

「もし金目のモン見つけたら、欲に目が眩むからつつう理由だったな。屋根があるところに住めりゃ十分だから、余計な欲張りしないようにっていう」

値打ち物に目が眩んでこの屋敷の物を勝手に売りさばいたら、立派な犯罪だ。

すでに今勝手に住んでいる時点で、バレればギリギリアウトっぽいグレーゾーンである。

はつきりと黒である行動、しかもただの高校生が高額取引をするなんて、疑われて当然の行動をするべきではない。足がついたら大変だ。

高望み、ダメ絶対！の精神を保つためである。

「でもまあ今回は仕方ないだろ。それに今はもう貯金もできたし、我慢のできる１７歳でいられるだろ」

「ははは、そうだ。あのころの俺たちは若かった。欲望のままに動いちまうくらいにな」

よく寝て疲労心労がとれたらしい。探索に好奇心がくすぐられる元気が出たらしく、子どもの感性丸出しで意気込む。

「じゃあ今日はこの階コンプリートな」

「全部で６部屋か。よし行くぞー」

こうして探索隊が調査をスタートした。

——１階第１の部屋、バストイレの隣

開けた途端、ホコリ臭さが鼻を突く。長い間閉められたままであることを感じさせた。

「カーテン閉まってんね、何も見えない」

「電気どこだ電気」

部屋の中はほぼ確認不可能なほど暗い。壁沿いにスイッチがないか確かめる。

実はこの屋敷、中世レトロで外装はボロクソのくせに、妙に近代的な装置が揃っている。

自室のシャンデリアも、壁に付いたスイッチをひねることで電気を点けられる。

カラオケによくある、ひねって明るさ調整チューナー式なのだ。

そんなナウいシステムのくせに、スイッチは木製という中途半端なレトロの取り込み方をしている。

そう、この外観おんぼろ屋敷、内装は結構最近のものなのだ。

「あつた。電気マックス」

月島がスイッチをひねるが、反応がない。

「あ？点かない」

「マジかよ。仕方ねえ、懐中電灯だ」

一旦キッチンへ引き返し、懐中電灯を手に入れる。

「点灯ー」

かちつと灯りがつくと、二つ分の懐中電灯が部屋を照らす。パワーは申し分ない。

「うわっ！」

光に照らされ真っ先に目に入ったのは、重厚感たっぷりの甲冑だっ

た。

銀の鎧が閉められたカーテンの脇に2体立っている。

「うはー、生鎧だ。高そう」

「ああ、相当な値打ちモノに違いない」

早速金に目が眩む貧乏人たち。

だがさすがに気を紛らわす冗談だったようで、四方へライトを向けて窺う。

壁にかけられた自然画、机、机を囲むように設置されたいくつかの椅子。

「……会議室か？」

一応二人が中に入って確認しても、めばしいものはそれくらいだった。

机に椅子があるだけの、ただの会議室らしい。まあカッチュウがある時点でただの会議室とは言えないかもしれないが。

「たいしたもんは無いし、次の部屋行こうや」

——1階第2の部屋、会議室の隣

「1部屋につき20分探索の予定だったんだが、さっきみたいのだと調べることがないな。残りの部屋も入れて20分で終わっちゃうぞう」

萩原がそう言う後ろで月島が壁のスイッチをくるくると回すが、こ

の部屋の電気も点かないようだ。

「タララタッタターン」懐中電灯」

月島が定番の道具出し効果音を口ずさみながら点灯する。
照らされた中にパツと目を引くものがり、眩しそうに目を細めながら萩原が聞く。

「おいドラえもん、あれはなんだ」

「大きなノツポの古時計だよジャイアン！」

非常に上機嫌なようだ。

探険をしているだけで楽しくなってしまうのだから、やはり心は永遠の小学生なのだろう。

ホコリまみれの中、早足で時計に近づく。

「動いてやがる」

百年はゆうに越えていると思われるノツポな古時計は、カッカッと元気に時を刻んでいた。

「でも九時差してるからやつぱ狂ってるよ。てかボンボン鳴りそうなのに、鳴らないタイプなんだね。聞こえたことないし」

「さすがに壊れてんのかもな。何年製とか書いてないのか」

明かりで照らして詳しく調べるが、焦げ茶の木目に手がかりは無いようだった。

時計に萩原が気をとられている間に月島は辺りを見渡す。

だがひじ掛け椅子やセッテイ、小机がいくつかあるだけで、この部屋もまた大したものは無いようだ。
しいて言えば、

「おわっ?!……ああ、なんだ」

「どうした?」

「絵があつた。なかなかのボンキュッボン」

壁にかかったプラチナブロンドの天使の絵が、スタイル抜群美女であることが見物であつた。

おわकारの通り、大したハプニングもなく埃っぽい部屋の探索が続く。

内装は廃墟とは言えない整いようで、電気を通して掃除をすれば観光地になりそうな様子であつた。

銀の鎧に大きなノツポの古時計、宗教画。西洋趣味を持った以前の住人が集めたインテリアといった物しか見当たらず、この屋敷の異常さを語るものは特に見当たらない。

むしろ外観の雰囲気に沿つた中身といえるものばかりだ。

——1階第6の部屋、廊下の突き当たり

「本日のメインディッシュ。期待がかかりますねー」

「これでこの階ラストですしね、徹底的に調べてやりましょう」

観音開きの大きなドアを前に目の前に、本来の目的を忘れたように
楽しそうな声で実況をする。

軋むドアを開けて一歩足を踏み入れるとコツ、と部屋に反響する。

「広いな」

そう言つて懐中電灯で中を照らす。相変わらずカーテンは閉まつて
いて真つ暗だ。どうせ点かないだろうと、もう壁のスイッチをいじ
る気にはならなかった。

デン、と縦に長い机が3つあるが、目を引くのは奥の壁際だ。

「あ？でつかい……箱？」

素材は木製のごく普通の古びた箱だ。

だがそれは部屋一辺に広く伸びており、その大きさに圧倒される。

表面には幾何学図形の紋様が均等に並べて彫られている。

雪の結晶のようなものや、祭りの景品でよく見る、くるくる回すと
模様のできる定規でかかれたようなもの。
それは意匠の凝った美しいものに思えた。

「うーん、いい仕事してますねえ」

近づくほどによく見えてくるその彫刻に鑑定士さながら唸る。

「こんなでかい箱、何に使ってんだ」

部屋の一辺とほぼ同じ大きさの箱なんて使いづらく大抵邪魔になる
だろう。小さくポンポンと作って小回りが利くほうがいいに決まっ
ている。

オシャレ目的なら役目を果たしているが。

「まあいいや、開けてみるよ」

月島が躊躇いなく木箱に手を掛ける。

「……？」

触れた瞬間、幾何学の紋様たちが波打ったように感じた。

「うわっ?!」

手を置いた周辺から、サアアッと色が広がっていく。

まるで上流から下流へ水が伝わるように、幾何学模様の溝に沿って色が流れ込んでいく。

赤白黄色、緑青紫

暗闇のなかで薄く発光し広がるカラフルな色の伝播は、夢の国の夜のパレード、あるいはクリスマスのイルミネーションのように美しかった。

瞳にキラキラとした光を映して、目の前の光景に二人は圧倒される。

「……」

またも襲ってくる、これでもかという非現実な状況に、ただただ言葉を失う。

見守るなか紋様は隅々まで色に覆われた。

ふわりと光を強めたと思えば瞬いて消えかかる。

カチッ

そして突然、鍵が開いた音がした。

「……?!」

パア、と箱の隙間から光が漏れた。隙間はどんどん広がっていく。機械的な小さな音を立てて箱の蓋が開いていく。

カタン…

開ききつた蓋が壁に当たる。

箱の中は光に溢れ、暗闇に慣れた2人の目にしみた。あまりの眩しさに目を逸らす。

だが目が見えないと悶絶している場合ではない。

薄目を開けて、目をしばつかせながら必死に箱の中を確かめようとする。

「これは……」

光の中真っ先に目に入っただのは

「スプーン？」

スプーンにフォーク、ナイフといった食器類だった。

これだけ大それた箱に入っているのだから、相当な値打ちモノに違いない。

月島が恐る恐るスプーンを手にとる。

何の変哲もない銀のスプーンだ。なんとなくマジシャンの真似をするように、さきつちよを上縦に持つと、くいと曲がるか試してみる。

曲がるわけがなかった。

首を傾げながらブンブンとスプーンを左右に振ってみる。

「うわ」

揺れるスプーンは視界に定まらないが、月島は見逃さなかった。スプーンの皿部分を数字の羅列のようなものがスーッと横切ったことを。

メタリックな銀の肌に浮き出し流れていった光の数字は、屋敷のレトロな雰囲気とは似つかない近代的なものを感じさせた。

「あ？」

呆然と箱の中身を眺めていた萩原が月島の声に怪訝な顔を向ける。

「いやなんかこれ、光ったんだけど」

萩原へスプーンを向けて見せる。

頭に疑問符を浮かべながらスプーンの皿部分を掴んで萩原が受け取る。

「あつつ熱！」

悲鳴を上げて萩原がスプーンを取り落とす。

反射的に耳たぶに指先を当てて冷やす萩原の指は、確かに赤くなっていた。

「は？熱い？」

床に落ちたスプーンの柄の部分を取り上げ、一瞬だけ熱いと言われた皿部分に触れてみる。

「本当だ」

一瞬でもわかる熱を感じた。

とりあえず危険なのでスプーンを一旦箱へ戻す。

それでも恐れることなくカチャカチャと他の食器も手に持つ。

「フォークはー……」

とりあえずブンブンと左右に振ってみる。

数字が流れるのを確認して、萩原へ話しかける。

「おい」

ペペーッ

フォークを持たせようと話しかける以前に、三つ又の先から出た赤い熱線が萩原に当たった。

「あぢち熱ッ！てめええ！」

さすがに二度目がわざとであることに混乱していた萩原でも気付く。頭にきたのか、手にもっていた銀のナイフをチンピラよろしく月島へ向けて横風ぎに振る。

危なげなく後ろへ下がってかわすと、熱線フォークを萩原へ構えて不敵に笑う。

「へへっ、近づくと撃つぞ。さっきの鳩尾パンチを俺はゆるしていいいっ」

「てかお前この状況下でなにテンション上がってんだ」

思わず萩原がツツコミを入れる。

混乱するだろう場面で、万博に遊びに来た子どものように遊ぶ月島が信じられないようだ。

月島は時に好奇心が何よりも優先される恐ろしい奴なのだが、萩原にその心中がわかるはずもない。

「いやだってさ、何が何やらわかんないから、もはや面白くて」

「トチ狂ったってわけか」

「だっておもしろくない？なにこのよくわかんないビームフォークとか！それに昨日の女の武器さ、激熱バットだったじゃん。ここにある熱グッズと共通してない？」

「あの女はこの部屋からバットを持ち出したってことか？」

「そうじゃないかなー、と」

「もしかしてあの女コソコソここに出入りして、開発活動してた奴とかだったり」

「マッドサイエンティスト的な？うーん、この開発グッズを狙った泥棒のがあり得そうだけど」

なんだかサイエンスな香りが漂ってきた。

『国で内密にすすめる開発プロジェクトがこの屋敷を隠れ蓑に行われていて、研究者の女が部外者の俺らを殺そうとした』とか。

『今まで俺たちに気付かなかったってのはおかしいから、打ち棄てられた研究所と聞きつけて忍びこんだ、ただの泥棒っしょ』だとか。

突然ナゾの技術を目撃してしまった彼らが冗談混じりとはいえ、子どもの妄想のような考察をするのは仕方ないことだ。

現実味を帯びないことが続き、少なからず思考が斜め上へ飛んでしまっている。

だがそれを見たことにより幽霊の仕業という考えは薄れていた。

彼らの中の脅威は今、ホラーからサイエンスへとなりかけていた。

怪奇現象と言われる、静かな部屋で突然バシッ！などと音が聞こえるラップ音。それは建材が外気と内気の温度差で立てる音だと言われている。

夜中目が覚めてるのに動けなくなっちゃう金縛り。あれは脳が起きているのに体が寝ている状態、という人体の不思議現象だ。

そんなことを聞いていた彼らにとって、理性的な知識の産物と幽霊は反するものに思えたのだ。

「またあの女、来んのかね」

「どうだかな。泥棒説ならもう来ねえだろうけど。あんだけ殴られたら」

「でもそうじゃなかったら、この屋敷危ないんじゃないんすかね」

「そう思うなら貯金出来てきたんだし出てけや。へへ、そしたら晴れて俺の城だ」

「あれ？お前は出ていく気ないんだ。あんなビビってたのに」

「何かいったか？出ていく気なんて最初からさらさらないぞ」

「まあなんか、あの女なら戻ってきててもなんとか撃退できそうだし

ね」

ざっと見たかぎりでも、箱の中にはハイテクグッズがまだまだ山ほど見えた。

なかなか把握するのに時間がかかりそうなので、ゆっくり調べていくことにしたようだ。

今の彼らには、『幽霊じゃないし人間の女なら別に怖くなくね?』という心理があった。

徒党を組んで敵が現れたとしても『最先端道具のこともわかったし何とかなるんじゃない?』という根拠の無いナメたスタンスになっていた。

度重なるイレギュラーの猛攻を受け、彼らの感覚はだんだんマヒしていった。

適応力が懸命に働いているのだろうか。

2人は屋敷の住人にふさわしい精神面を身につけはじめていた。

15話：母、絵理子

密集した東京の住宅街。

その中の一件に霊媒師家族は住んでいた。

今日は日曜日、家族は全員家から出ていない。おうち大好きインドアフアミリーなのだ。

朝十時、末っ子の美也子はリビングのソファーに座ってゆったりとテレビを見ていた。

マイクを持ったサングラスおじさんが画面いっぱいに映っている。

「んー、おはよう美也子」

「おはよお姉ちゃ……」

ソファーの背後からした声に振り向けば、とことことパジャマ姿で現れた香苗が居た。それを見た美也子の表情が目を見開いたまま固まる。

泣き腫らした右目の周りがむくんで、顔がもっさりしてしまったのはまだいい。

本来おでこの中心にあるべきはずの冷えピタが、左目を覆うように額から斜めに、頬へと流れて貼られていた。なんというか、言葉にできない残念感が漂っている。

「ど……どうしたの？ 冷えピタずれてるよ」

パジャマ姿の香苗が美也子の隣に腰掛けると複雑な面持ちで質問する。

「それがさあ、ちょっとこれ見てよ」

ペローツと粘着力の落ちた冷えピタを外すと、目の周りに痛々しい青アザが広がっていた。

「うわぁっ、痛そう」

「なぐられたのー、すごい痛かったー！」

「なぐられた？！どうして？……えーっと……痴情のもつれ？」

「痴情のもつれって……美也子！どこでそんな言葉覚えたの！」

「うわ、そんなの中三だもん、常識だもんっ知ってるよっ」

「うわぁーん！知らないうちに美也子が汚れたぁー」

「わわ、落ち着いてっ。昨日の夜お化け退治しに行っ……その後のはずだよな？だって幽霊に人は殴れないし」

「むー。私そんな殴られるようなドロドロな関係の人居ないもん。これね、マジに幽霊にやられたの！」

「幽霊って、人のことパンチできたんだ」

「うん、すごい混乱したー。でもさすがそこは私！何があったかはちゃんと覚えてるの。聞いてくれる？」

「うんっ、聞きたい」

青アザのできた顔は痛々しげだが、大泣きしてスッキリしたのだろ

う。思い出すのが辛いということも無いようで、飄々としていた。

「暗いなか何か居るのが見えたとき、もう死ぬかと思ったんだけどね、むこうもスッゴい驚いたみたいでいきなり逃げ出したの、2体とも」

「二対一だったんだっ、でもお化けのくせにビビりだねえ。お姉ちゃんのが落ち着いてたりして」

「ねー！お姉ちゃんはいっだってクールだもんね！……そんな微妙な笑顔で見ないでよ、どうせ嘘ですよ。もうキヤーキヤー言いながらひたすらバットを振り回したよ」

（ゴキブリ退治の時と同じノリかあ。オバケたち怖かっただろうな。お姉ちゃんの悲鳴、すごいから）

「でもあいつらすばしっこくて、ぴょんぴょん跳んで逃げてね。私も頑張つてそれを追いかけてー、がしばらく続いたんだけど。突然幽霊がね……」

冷えピタの貼られていない方の眉をキュツと中央に寄せると、顎を引き上目遣いに美也子を見る。

そんな思わせぶりに間をあける態度に、何があつたのだろうと美也子は不安げに姉を見やる。

特に不安になるような展開が待っているわけでは無いのだが。香苗が続きを話そうと口を開く。

トン……

「「きやあああッ?!」「」

突如、二人の肩に手が置かれる。気配を感じさせないまま、いきなり襲われた肩への衝撃に全身をびくりとさせ悲鳴をあげる。

涙目で二人が固まっていると、スーッと香苗の肩に置かれた手が、なめらかな動きで頭の上へと移動する。冷たい手が一瞬首筋に触れてびくつとなり鳥肌が立つ。

とす、と頭の上に置かれた手がゆるゆると頭を撫でるが、落ち着くことはできなかった。

「香苗……その話、私も聞くわ」

「おお母さんっ」

手の持ち主は二人の母、絵理子だった。

16話：すべりこみ特進生の災難

月曜日の朝八時ギリギリ。

またも恵は飛び込みセーフの登校劇を繰り広げていた。

「りゃああああっ！」

力強い叫びをあげチャイムの最後の余韻が残るうちに、教室ドアという名のゴールテープを走り抜ける。

ゼーハーと息をあげて、よろよろと席へ着くその姿は、死闘を繰り広げた戦士のさまたった。

呆れる光が後ろを振り向き、恵に何かを言いかける。しかし微笑を携えた佐藤先生が教室へ入ってきたので諦めて前へ向き直った。教卓に荷物を置いた先生はまもなく話しだす。

「今日は朝テストの日ですね。点呼中までは教科書を見ていていいですからね。」

「……?!つつそ」

背後から恵の息を飲む音がして光がため息をつく。

昨日のサテライト授業後、部活メンバーの家にお泊まりした恵は、もちろん予習などしていない。

いつもならば前日に光からテストのことを教えてもらえるのだが、知らされずじまいで今日になってしまった。

心配した光が送った携帯メールも確かめずに過ごしてしまったようだ。

恵が週一で参加する園芸部は、まったり仲良しな部活だ。

普段の活動も顧問の先生を含め、校庭の花壇の傍らにシートを引き、

談笑したり昼寝したりというよくわからない部活内容だ。

そんな部活のお泊まり会だ。談笑と昼寝に毛が生えた程度の活動内容で、まったり感に包まれて携帯の存在など忘れてしまっていたのだろう。

点呼が終わり、テスト用紙が前から渡ってくる。

光がちら、と振り向き、少し心配そうな面持ちでプリントを手渡ししてくる。それを絶望的な表情で恵は受け取った。

どんなテストであっても、特進クラスの生徒は六十点以下をとった場合、担任と一対一でのカウンセリングタイムが設けられた。

あの女教師のカウンセリングは精神を疲弊することを、経験者の恵は知っていた。

嫌なコトをすぐに忘れる恵も、その時ばかりは気分修復に二日かかったからだ。

（やってやる）

静かな決意を胸に、裏返しのテスト用紙をぺらりと表へと向けた。全部で十問、六問回答すれば勝ちだ。

問題をざっと見た後、恵はペンを持つ手にグツと力を入れた。

「……ッ」

ちよつと泣きそうになったのを我慢するために。

そうして放課後、恵はトボトボと一人で廊下を歩いていた。

まんまと呼び出しをくらったのだった。

一応心の準備はしてきた。光に頭を撫でてもらい、辻にリポビタンDを奢ってもらった。藤井の提案で、みんなが書いてくれた寄せ書きをお守りしてもらった。

“頑張れ！大丈夫だ！私たちがついてる。生きる。そなたは美しい。”

そんなことが書かれたメモ帳をギュツと胸に抱くと、ポケットに大切にしまい込んだ。

もう佐藤先生から指定されたカウンセリングルームの前だった。小さな個室のなか、机を挟んでお見合いで椅子に座るのだ。地獄である。

（……がんばれ私！）

決意したような眼差しで、トントんとドアをノックして「失礼します」と小さく言い教室へ入る。

「座りなさい」

すぐに冷たい声に迎えられる。顔をうかがえば、やはり冷たい表情だ。いつもの微笑がはがれている。恵もまた神妙な顔つきで彼女に指し示された向かいの席に着く。

座るとすぐに、ス……と机の上にテストが置かれた。
50点

（惜しかったのかあ）

恵不得意の英熟語問題だった。getの後に何がつくかで全然意味

が変わっちゃったりするあれである。

だがもう少しノートや教科書を確かめる時間があれば、あと10点ならなんとかあっただろう。

シー……ン

沈黙。テストを差し出されたあと、無言で恵を見つめる教師からピリピリと圧力がかかる。

恵はテスト用紙から目を離さずに、体へ浸透していく威圧感を紛らわせようとする。

脅威に目を合わせたら終わりの気がした。

「……………」

「……………」

沈黙がしばらく続く。

机と椅子、本棚だけが置かれた狭い室内に響く時計の音。

その刻む回数と共にどんどん強くなる胃のモヤモヤ感、そわそわ感と恵は戦っていた。

「二回目です」

「……………はい」

ようやく教師が口を開く。刺すような冷徹な声だ。

「顔を上げなさい！」

普段荒げることのない彼女の、鋭く怒りを含んだ声。顔を上げると

細められた目が、射るように恵を睨んでいた。

「どうしてこのような点数をとったのです？」

「……テストのことを、忘れてしまいました」

彼女に即席の浅はかな嘘など通じないので、正直にそう伝える。

「勉強不足でした」でも正しいし、まだマシに思えるが、恵は常に勉強不足状態であるので理由にならないのだ。

「……………」

「……ごめんなさい」

「このような点数をとって、どう考えていますか？」

「反省しています」

「前回もそう言いました。あなたの反省は将来に活かされない」

「……ごめんなさい」

バシッ

突然テスト用紙が叩かれて、恵の肩が思わず揺れる。

そのままその手にくしゃりとテストは握られ、シワが寄る。

恵は下唇を噛みながらその様子を見ていた。

「恥ずかしい。勉学のために一生懸命になるべきあなたがこんな点数をとるなんて、見苦しい。このクラスの汚点です」

「……」

「自分の未来のために、学ぶことに貪欲にならなければいけない。あなたからは、その気持ちが感じられない。それでこんな点数をとるなら、このクラスに必要ない」

目を落とした恵が、より一層深く俯く。

「あなたに問います。なぜこのクラスに居るのですか？その姿勢なら、ここに居る必要は全く無い」

実際この言葉を言われ、進学クラスから出ていった人が居ることを恵は知っていた。

今でも園芸部で仲良しの友達だからだ。

返答を間違えれば、容赦なく他クラスへと移動になる。

「まだここに居たいです。気がゆるんでしまいました。これからは頑張りたいです」

「質問に答えてください。なぜこのクラスに居るのですか？」

そんな問答が続く。

それから十分、二十分と尋問時間は過ぎ、プレッシャーと反省心で恵の頭は疲れきっていた。

「私が悪かったです。このクラスに居ながら、成長しない私が。進学クラスに居て、勉強に追われることが、私のだらしない性格を鍛えることに、繋がると思うっていたのに……それが将来にも繋がって」

「なぜ将来に繋がるの？具体的なビジョンは？」

「だらしなさを鍛えて、きちんとした性格になれば、私の弱点の克服にも、なりますから……」

目は虚ろで若干言葉も切れ切れだが、疲れた方がまともなコトを言えるようになる、だらしない特性の持ち主である。

「そうですか」

その一言とともに、乗り出し気味だった体を背もたれへと戻す。彼女から来る圧迫感が少し薄れ、首辺りを見続けていた恵が虚ろな目で表情を窺う。

「わかりました。もういいです」

三十分以上続いた尋問時間は終了した。同時に説教も終了のようだ。ある程度筋の通った解答ができた時点で解放される。教師側が納得できなければ一生続く拷問なのだ。

いつもの落ち着かない微笑みに戻った教師の表情が、今は何より恵に安心感を与えた。

「それと、もうひとつ」

まだ解放する気は無いようだ。だが冷たい表情に戻ったわけでは無いので、とりあえず悪いことではないらしい。ぱちりと瞬きをして恵が首を傾げる。

「私だけでは結論が出ないので、ぜひ聞きたいことなのです。……大宮の屋敷騒動について、どう思いますか？」

「大宮の屋敷騒動……」

「いろいろな人に聞いたのですが、原因が事故なのか幽霊なのか。未だに私はよくわからない」

今まで説教していた相手に、悩んでいることを隠す様子も無く問いかけてくる。

脈絡も無くポン、と尋ねてくるのだからよほど頭のなかのキャパシティ占めていることなのだろう。

彼女が生徒を頼って質問する様子など、ツチノコ発見のような珍しさなのだが、恵はさほど驚いてはなかった。疲れていたせいだというのもあるが。

（光も聞かれたって言ってたな）

双子の片割れが同じ質問を受けていたことを事前に聞いていたからだ。珍しすぎる、天変地異の前触れだとか二人で騒いだのを思い出した。

「私は幽霊じゃないと思うんですけど……でもいろいろな人に情報を聞いて、それでもモヤモヤしているんですよ」

真剣な眼差しで話を聞く佐藤先生が小さく頷くのを見て、話を続ける。

「それはもう、先生が納得する方法は自分の目で確認するしか無いんじゃないませんか？屋敷へ行って」

「でも私は屋敷に近づいてはいけない、とみなさんに言ってしまった

たし。私が近づくわけにはいかないでしょう」

「……でも、生徒の安全を守るために言ったんですよね？だったら私は“生徒の模範として教師も屋敷に近づいちゃいけない”という考えだけが正解とは限らないと思いますけど」

恵は疲れてきつていた表情に、なぜだかキラキラと生気を戻しながら話す。

「どうして？」

「“生徒の安全のために教師が現場を確かめに行く”っていうのも、先生としての模範行動だと思います。私は……いえ、みんなも、安全確認のために先生が現場調査に行ったって言うなら、誰も文句言わないと思います」

明るい表情ですらすらとそう言うてのける恵を、先生は静かに見つめる。

「……先生は、本当に気になったことは他人の情報だけじゃ納得できないんじゃないですか？そしたらもう、先生の悩みを解決する方法はそれしか無いですよ」

そう言い切ったあと恵は「ねっ？」とでも言うようににかつと笑った。

すると信じられないことが起きた。

「ふふ……クスクスッ」

あの佐藤先生が、笑いだしたのだ。

「……………?!」

あり得ない光景に恵が目を真ん丸にして驚く。

恵名物THE驚愕フェイスだ。

「ふふつ、まるで悪魔の囁きじゃない。私の倫理観をねじ曲げて、欲しい言葉を投げ掛けるなんて」

佐藤先生の“教師模範”として、危険な場所へ自分自身も近づいてはいけない”という考え。

それを恵は“教師模範”として、危険な場所の状況を自らで識るべき”という考えで塗り替えてしまえ、と提案した。そうすれば自分のなかの知識欲を満たせると。

欲を満たすために自分の考えを変えればいいじゃん、なんて確かに悪魔の囁きだ。

「確かにちよつと調子に乗りましたけど。先生がお屋敷に近づいちゃいけないなんて思ってる人、ホントに居ないですから。うー、そんな極悪人みたいに言わないでくださいよー」

「あなた本当に口が上手。しかもちゃんと一番欲しい言葉をくれるわね。その饒舌、将来悪いことに使わないでね？」

「詐欺師あつかいですか?!」

鬼教師の珍しいボケ発言に、恵も珍しくツツコミで返す。不思議な漫才コンビの誕生だ。

「あなたの提案はきつと的確よ。的確だから少し嫉妬してしまったの。でも私、生徒にそんな風にズバッと言われたの初めて。うれしいものね、ありがとう」

そう言うてにつこりと笑う姿に、恵は驚きを通り越して戦慄を覚えた。

（満面の笑み?! あ、あり得ない! これ、先生新作のドS攻撃なのかな! こわいもん!）

もう帰っていい、と言う先生に恵は一礼してカウンセリングルームを出る。

ドアを閉めトコトコと離れていく足音を聞きながら、佐藤先生は静かに目を閉じる。

（頭の回転が早く何でも器用にこなす。悩む相手の思いを考察し解決を導くことに喜びを感じる、他人想いな生徒）

目を開けて、恵が持ち帰らなかったくしゃくしゃのテストに目を落とす。

（才能があるゆえの怠け、常識に欠ける態度、計画性の無い生徒）

「私と真逆だからこそ……聞いて正解だったのね……」

ふ、とため息を吐くと彼女は小さく呟いた。

結局、恐怖心と心労を残し、恵は教室へと向かう。
なんやかんやで一時間以上経っていた。

とぼとぼと衰弱した様子で2年A組にたどり着く。
教室にはまだ明かりが点いていて小さく話し声が漏れていた。

「おかえり」

出迎えた声に顔をあげる。ドアの先、真っ先に光と目が合った。

「ただいまっ」

とととと近づいて頭を下げた恵を、光は苦笑いでよしよしと撫でる。

「1時間ですんだなら、まあマシなんじゃない？」

「うん。反省のポーズ」

満足気に恵が頭を撫でられる。

「本当にメンタル強いね。あの試練けっこう泣いて帰ってくる人多
いっていうよ」

「マジかよ、さすがトラウマメーカー」

藤井と谷の声に反応した恵は、驚いた顔で右を向く。

「待っててくれたんだ！ありがとー！リポDと寄せ書き、スッゴク
効いたよ！」

「マジ？じゃあ、寄せ書き一文字につき百円くれよ」

奥からしたその声に恵がさらに驚く。

「え？豊！？葵も！なんで居るの？」

「なんで居るのってヒドいわぁ。俺らだって生きてるんだから、そりゃ居るさ」

「だって月曜は大抵バイトですぐ帰るじゃん！」

「なんか今日、バイト7時からだから余裕あるんだって」

「へえー」

「そろそろ勤務時間調整しないと、103万円税金コースなんだよ」

「へえー！」

個人が1年で稼いだ総額が103万以上になると、所得税をとられてしまうというアレである。

本来なら例え7時からであっても、睡眠時間や予習時間に当てるために帰っていただろう。

鬼教師と2人きりで説教、というシチュエーションに同情心が働いたのだ。

だがもうひとつ、昨日の『おっぱい事件』の所為、というのもある。双子は昨日のことなど、何もなかったように萩原と月島に接した。若干とげとげしさは見え隠れしたが、不可抗力だったとある程度理解したのだ。

だが男2人には双子取り扱い注意報が昨日から出たままになっていた。

そんなわけで2人は恵を待つことにしたのだ。

「ありがとー」

嬉しそうにお礼を言う恵に悪い気はしないようで、2人はニツと笑って応じた。

「てかホントあの人の1時間説教で、よく神経ぶつつんしなかったじゃん」

「説教が1時間なわけじゃなかったんだよ。なんか説教のあと突然、先生の相談タイムになったの」

「は？相談？佐藤先生が？」

谷の怪訝そうな顔に、疲れの残る表情で恵が頷く。

「隠してる様子じゃなかったから言うけど。こないだの大宮の事故のこと、すっごく悩んでるみたいで……お化けの仕業じゃないかって」

「佐藤先生お化け信じてるんだ」

「それ、私も聞かれたヤツじゃない。何て答えたの？」

「私なんかにまで聞いちゃうんだから、他にもきつとたくさんの人に相談してるんだろうなと思って。それで納得出来ないんだったら、自分の目で確認しないとダメなんじゃないかなって」

「そう先生に言ったのか？」

萩原が即座に尋ねると、こくりと恵が頷く。

「先生屋敷行くって？」

「うん。行く雰囲気だった」

（（……マジかよ））

まさかの家庭訪問である。

幽霊襲来に等しい恐ろしさが近づいていることに、彼らは絶望するしかなかった。

17話：扉を開ければ

バイトを終え屋敷へ帰宅した住人達は中へ入らず、玄関前で立ちすくんでいた。

鬼教師、来館決定！

日程不明の抜き打ち家庭訪問への杞憂で胸が張り裂けそうだった。玄関を開けたらすぐそこで、佐藤先生が笑っている気がして。

「びつくり箱の蓋を開ける気分」

「そんな甘いもんじゃないだろ」

「普通の人にさえ住んでんのバレたらヤバいのに。よりによってあの人だからね」

11月の冷たい風が吹き荒ぶなか、屋敷を見つめる2人。そのうなだれた背中に、シャンと生氣が宿る。

「居るとも限らないのにビビってどうすんだ。もし居て見つかったも、暗くて誰かはすぐにバレない」

「もしバレたら素直に事情説明して、お涙頂戴展開に持っていく。鬼の目にも涙を狙うしかない。でもそんな状況になったとしたら…」

…」

「「末代までの恥だ」」

同情されるのはプライドが傷つくようだ。しかも失敗すれば警察に報告されて家なき子コースだ。

そう言いながらも決意したように玄関のドアをそつと開ける。
素早く中に入り、後ろ手でドアが完全に締めきらないように隙間を
開けておく。

屋敷内から音がしないことを確認すると、静かにドアを閉め、カン
又キで鍵をした。

映画の潜入シーンさながらの動きだが、散々ドアが軋んで音を立て
ているのが残念だ。

足音を立てないように玄関ホールすぐそばの自室へ入る。

「ふう。とりあえず開けたらすぐ先生つてのは無かったな」

「どうするよ？もうこの屋敷のどこかに居たら。先生と3人で密室
状態だよ」

「そいつは……どっちが先生のお相手をするか決めなきゃな。お前
にその権利やるよ。この屋敷に女が突然入り込んでイチャつく妄想、
散々してただろ」

「お前だつてしてたじゃん妄想。清楚でエロい女の子が雨の日に迷
いこんでーって。お前に権利ゆずるよ」

「いやいや、お前年上の女が迷いこんだ妄想もしてただろ？俺より
ぴったりだ。お前が先生と一晩熱い夜を過ごすべきだ」

「おい、こんな話を膨らませたらダメだ。先生来てるフラグになっ
たらどうすんの。せつかく『良かったー、先生居なかったぜ！』の
がフラグになるだろうと思って避けたのに」

「フラグ？」

「あ、いや、わからないなら良い。……そういやコイツ、何だかなだでサブカルチャー方面は強くないんだったっけ」

「何ぶつぶつ言ってるんだ。気持ち悪い」

「……………」

「今度は何黙ってるんだ。気持ち悪い」

……コツッ

「……………」

天井から聞こえるはずのない物音。

それは確かに耳に入り、2人を押し黙らせる。

月島は萩原よりも一足早く気付いていたようだ。

コツ……コツ……

ゆっくりと階段を降りる音。

廊下へ繋がる直前の玄関ホール両脇から、螺旋状に伸びた階段が音源だろう。

誰かが一階へ降りてくる。

「……………うそだろ」

コツ……コツン

小さく囁いた言葉も掻き消して、石を打つ音はゆっくり近づく。コツンという音が一層大きく聞こえ、一階の床を踏みしめたことを知らせた。

さすがに二人の背中に寒気が走る。

外壁の防音は完璧のくせに、内部での音は丸聞こえなのが判明した。

「……………」

だんまりでやり過ごすことにしたのか、恐怖で動けないのかは謎だが、彫像のように二人は固まっていた。だが音は止まない。

カラ……カラ……

「——!!」

聞き覚えのある、金属が石床をこする音。脳裏に一昨日の騒動がよぎった。

（（居るの、先生じゃなくて——））

カラッ……

音が止まる。

ただ、止まった場所はどこ間近。ドア一枚隔てたすぐそばのようだった。

「隠れるぞ」

萩原がこそりと空気をもらすように囁く。

それを合図にぱつと動き出し、音ひとつ立てずにキッチンへと向かった。

入り口から死角になる、シンクの手前の物置スペース（救難ばしこなど物が高く積み重なってる）の陰へとしゃがみこんだ。

ガチャ

すぐにドアの開く音がする。

カーペットを踏みしめるモゴ、というこもった音が侵入者を知らせた。

「……………」

コト、ごそ、と小さな物音がキッチンまで聞こえてくる。散らかった部屋の中を探っているのか、蹴飛ばしているのか。暗闇にくぐもった音が響く。

それは間違いなくキッチンへと近づいていた。

（ヤバい、こっち来る）

（来んな来んな！）

息をも止める勢いで黙りこむ2人の心の中は、台風上陸中のように荒れていた。

カラ……

室内のカーペットを外れ、無情にもキッチンの石床が音を立てる。静まりかえる空間を切り裂くようにカラカラと鳴らし、何かが物陰へと近づく。

気付かれないことを願い、隠れた2人は唇を噛みしめて物陰の隙間

から侵入者を窺っていた。

カラ……カラ……

暗闇に突如変化が現れる。

2人の目に飛び込んだその変化は、背筋を凍らせ息を詰まらせる。

「——っ?!」

小さな赤い点が二つ不自然に空中に浮いていた。

「……………」

息を飲む音に反応したそれは、隠れた2人の方へ真っ直ぐに向けられた。

目のように、いや実際目に違いない。暗闇にぼんやりと人のかたがが浮かんでいて、そのちょうど目の位置で鮮やかに光っていたから赤い光点は、みるみるうちに近づいてくる。

そんな獲物を捕えた捕食者に、怯んでいた被食者が抵抗を思い出す。危険となった隠れ蓑から水中でもがくように腕をばたつかせ、情けない様子で飛び出す。

このキッチンが簡易的な物で、屋敷の物としてはそこまで広くない。倉庫も兼ねて物が散乱していることもあり、足場の横幅は人4人分程度だ。

そんな狭い空間で出口は一つ。

赤い光を放つ異物の方へと逃げなければいけないことに、混乱した彼らは飛び出してから気付く。

「うつつ」

うめき声をあげながらそれでも出口へと走る。それしか逃げきる方法は無いのだから。

全速力で走り、赤い点の左右を抜け出口へ向かおうとする。

「かはっ！」

ゴスという鈍い音の後、ジュツと焼ける音が響く。

苦しげに息を詰まらせた萩原が、鳩尾を押さえよろよろと後ずさる。

上半身を折り曲げたことで、お辞儀をするように突き出された後頭部に、躊躇いのない動きで追撃が入る。

素早く振り下ろされた鈍器が頭蓋に命中し、萩原の視界がスパークする。

ふらふらとよろめく萩原にさらに追い討ちをかけようと、細長い鈍器がヒュツと風をきる。

ガンッ！

「っ！！」

激しい衝撃音。だがそれは萩原へのとどめの一撃ではなかった。

「にげろっ」

手近にあったのか、まな板を携えた月島が襲撃者の首あたりを殴打した音だった。

赤い光がビュンビュンと錯乱したように飛び、辺りを照らす。痛みに悶絶しているようだ。

後頭部を押さえた萩原がよろりと揺らめきながら必死に足を進める。頭痛と吐き気を感じながら、それでもしっかりとした足取りで走りだした。

先行して走っていた月島が、向かったのは廊下の突き当たり、最先端技術部屋だった。

観音開きのドアを開け放ち、そのまま部屋の奥の箱へと飛びついた。と冷たい箱にしがみつくように触れると、先日と同じようにふわりと箱が輝きだす。

ボタンとドアが閉まる音に驚き、月島が振り返る。入ってきたのは、うつむきながら辛そうに歩く萩原だった。

部屋の真ん中ほどまで足を進めると、力尽きたようにしゃがみこんだ。

「頭やられたの？」

「……ああ」

やつのこと苦しげな声を出した萩原が戦力にならないことを悟り、月島は複雑な表情で箱へと向き直る。

何か使えるものはないか。

長く伸びた箱にそって横ばいに歩き中を窺う。

……カラカラカラッ

「くそっ」

ドアの向こうから金属音が耳に届いたと思えば、急激に音量を増していく。真っ直ぐにこちらへ近づくその音に、広い部屋が窮屈に感じるような圧迫感を受ける。

焦り震える手で、目に入るイマイチ武器にならない食器や家具を、ガサツと持てるだけ左腕に抱えこむ。

バンと強く壁に打ち付けられドアが開く。その音に月島は振り返ると、腕のなかからナイフを取り出しダーツのように素早く投げた。キンツと弾かれる音が聞こえ、奇襲の失敗が伝わる。

冷や汗をかき追い詰められた表情を、2つの赤い光はしっかりと捉えているようだった。

月島は腕のなかの小物を次々と放るが、ことごとくカキンと虚しく金属音が返る。

暗闇のなかでも素早く冷静な態度をとる襲撃者は、凶器を弾き返しながらもじりじりと歩み寄る。

ピタリと赤い光の動きが止まる。

座り込んでいた萩原が、視界にぼんやりと映った靴を見てしがみ付いたのだ。

足元にまとわりついたそれを、煩わしそうに赤い光は捉えると、決めるように足を前へ出し萩原の指を踏みつけた。

「でえ！」

痛みに手を離れた萩原へ、素早く踵落としが炸裂する。

それは再び脳天に命中し、彼はとうとう意識を手放し気絶した。

自分から注意が逸れた——そう月島は感じとる。今の一瞬を無駄にするわけにはいかない。

左腕に残ったあとわずかの発熱グッズから、ブン、と細長い棒を投げようと前へ構える。

「……！」

構えた瞬間、棒の先からバシッ！と赤い光線が放たれた。
フォークと同じ、熱線放出式だったようだ。しかも鮮やかな赤い光線は花火のように強く、勢いよく前へ噴射した。

「っ！！」

まばゆい赤が襲い、襲撃者がわずかに悲鳴をもらした。咄嗟にかばうように腕を体の前に出したが、威力に耐えられないのか後退って逃れようとする。

思いがけないことに驚いた月島だったが、現状を把握し、しっかりと手のなかの金属の棒を持ち直す。

強力な遠距離武器の登場に完全な形勢逆転が目にとれた。
前を睨むように見据えると、火花を散らしながらじりじりと敵に歩み寄る。

「……」

手元の武器では火花の範囲内に入らなければ攻撃できず、迫る赤に押されながらただ後退する襲撃者。

月島は赤光に照らしたされたその顔を凝視する。

金属マスクで顔上部を隠し無機質に、表情を窺えないままこちらを見返していた。人工的なレンズが瞳の位置で赤く光っている。

攻守逆転に冷静な判断ができるようになった月島は、機械マスクを見て目を細めた。

（やっぱり人だった）

ふ、とそんなことを思った瞬間、その顔がぐっと近づく。

「……?!」

半瞬して喉元に突き刺すような痛みが走り、かはつと衝撃に咳き込んだ。

躊躇していたはずが突然、火花を恐れず身を乗り出した襲撃者の持つ武器が突き出され、喉元に命中したのだ。

からん、と緩んだ手から光線棒を取り落としゲホゲホと咳き込む。痛む場所を押さえようとして、動かした腕が止まる。

喉元にはすでに自分の物ではない指が絡み付いていた。

「がつ」

指に力を込められ、すさまじい力で締められる。それは冷たく細長い指に似つかわしくない威力でミシミシと首を圧迫する。

月島は懸命に腕と足を前へ出し、離そうともがき対抗するが、締める力は変わらない。激痛が続き圧迫でろくに空気を吸うことも出来ない。

（昨日もこんなことなかったっけ）

いよいよ走馬灯を見だしたらしく、手足の抵抗が収まっていく。光に殴られ首をしめられたことが脳裏をよぎっていた。

月島の視界はぼんやりと白みを帯びて、苦しいと感じながらも意識は朦朧としていた。

（あ、これ俺、死ぬ……）

最期の抵抗を、という思いからか月島の腕が持ち上がる。

そして自分の首を締める腕に指先で触れる。

彼自身そんな小さな反抗で何とかなると思ってもいないだろう。

「……」

だが触れた瞬間ぴく、と締めていた腕が揺れ、ふと力が弱まった。喉を潰さんと力を込めていた指が、僅かな力しか入っていない指を恐れたようだった。

そしてついには喉元から離れた。

月島は急激に酸素を取り込み苦しげに咳き込み、呼吸する。

「う……」

突如解放した襲撃者は小さく唸り、怯えたように後退る。そして赤い光を散らしザツと背を向け走りだした。

玄関へ外へ、まっすぐに走る。何かしらに恐怖を感じたらしく、そわそわと腕を不安げにさすりながら。

からくも二人目の来訪者を追い返すことに成功した屋敷の住人は、冷たい床の上で意識を失った。

18話：襲撃者、タネあかし

「はあっ……げほっ」

屋敷から走り逃げた人影が、荒い呼吸をしながら膝に手をつく。

屋敷の襲撃者だ。

うつむいたまま煩わしげにカチャリと顔につけていた金属のマスクを外す。

額にはじつとりと汗が浮かび前髪がはりついていた。

冬の夜風が熱をもった顔を冷やしていく。

ざわざわと木々や伸びた草が音をたてるなか、力が抜けたように尻をつきしやがみこんだ。

その瞬間ゴツと一際強い風が吹き目を瞑る。

ガタガタガタッ

「っ？！」

背後からの騒音に振り返る。開けたままにしていたドアから風が入り屋敷の内装を揺らしたのだ。

枯れ葉が散るなか鬱蒼と佇む屋敷の全貌をあらためて目にする。

静かな威圧感、背筋を冷や汗がつたうような光景だった。

ピピピピッ

異様な空気を切り裂くように電子音が響く。着ていたコートの内ポケットをまさぐり携帯を取り出し、電源ボタンを押し耳にあてる。聞こえてきたのは若い女の声だった。

『あ、もしもお母さん？大丈夫？』

聞こえてきたのは今の状況下に、似つかわしくない明るい声だった。だがお母さん、と呼ばれた襲撃者の心には温かいものが染み渡る。

「香苗……」

『うん香苗。12時に車で来いって言ってたから屋敷の前につけていたよ』

「そう、わかった……ありがとうね」

『う、うん。なんか大丈夫？具合悪そうな声だけど。お化けに何かされた？』

「お化け？お化け……お化け」

そう拙く繰り返し同じ言葉を吐く香苗の母、絵理子の手は小さく震えていた。

「あれはお化けなの？そうよね、お化けのはずよね。人のはずないもの！」

『だ、大丈夫？何があつたの？』

絵理子は視線を左下へと流す。そこには彼女がつけていた金属マスクが転がっていた。

赤外線搭載で暗闇のなかでも障害物がぼんやり浮き上がって見える、便利グッズである。間近に寄れば、人の顔も判別できるようになる優れモノだ。

静かにそれを見つめる、普段は柔和な表情は陰しく青ざめている。

少し間があき絵理子はようやく口を開く。
冷たい風を受けふわりとショートボブが揺れた。

「屋敷の霊が、月島……私の生徒の顔をしてたの。近くで顔を見たとき、はつきりと確認した」

『え……』

「私の心を読んで、そういう形をとったのでしょう。汚い真似をするな、と思って頭に血が上った。思わず首を絞めたわ。とにかく早く消えてほしくて、がむしゃらに首を締めた。でも抵抗が収まってきたもう終わると思ったとき……それが私の腕に指で触れてきて……」

そこまで言つと絵理子——佐藤先生は眉をきゅつとよせ、さらに表情を強ばらせた。

「その指が温かくて。それを感じたら締めてる首の感触が急に生々しく感じて、首もまた温かくて。人にしか思えなくなった」

『うん……』

「私、なんで人を、生徒を殺そうとしてるのかって思って……幽霊に誰かが殺されるのが嫌で行っているのに、私が人の首を締めて、それじゃまるで私が……！」

『お母さん……』

人前で感情的な面を見せることなど絶対になかった絵理子。そんな彼女が感情のままの思いを娘へとぶつけている。今回のことで彼女のなかのトラウマが刺激されてしまったのだ。彼女は未亡人だ。愛していた夫の命を幽霊に奪われてしまった。そのため幽霊を憎み、もう大事な人を傷つけさせないという強い思いがある。

その彼女が守るべき生徒を殺そうとしていた。からくも夫を殺した幽霊と同じ、首をしめるといった方法で。

「こんな屋敷に生徒が居るはずない、幽霊の心的攻撃だったってわかってるわ。でも私には……私には、あれを退治することが、もうできそうにない」

「……もういいよ。そんな所いても辛いだけだよ。あったかい紅茶買ってあるからさ、帰ろうよ」

震える声に錯乱した母の様子を案じ、香苗がやわらかい声で話しかける。夫を失った時でさえ娘の前では心を荒げずに居た母親が、こうして感情をあらわにしている。

（多分あの時は私が感情的になってたから、辛くても冷静になっちゃったんだろうな。こんなに弱ってるんだ。私だってもう大人だ。こういう時は私がしっかりしなくちゃ）

『今日は休もう……お母さんはもう齢なんだから、あんま無理したらダメだよ！』

気遣いなのか悪口なのかわからない言葉であつたが、絵理子は強ば

らせていた顔を少し緩めると小さく「そうね」と呟いた。

19話：地獄の一泊二日合宿

12月初頭、HR。

『ステップアップ！受験合宿』そう表紙に書かれたしおりをクラス全員が読んでいた。

人里離れた森の中、学校持ちの施設でひたすら勉強するという特進クラス特製合宿だ。

身の凍る寒さの12月、心をも凍らせる2日間だと代々先輩から伝説が受け継がれている。

「睡眠時間は2時間30分です。各自学習進行ペースに合わせて必ずとってください。当日は大部屋にふとんが敷き詰めてあります。出席番号順に人数分並んでいます。一応オリエンティングで場所の確認をしますね。目覚まし時計の使用はできません。先生方が何人が配置されているので、今から寝るという旨を伝えてください。しっかりカウントしているので。なお、2日目は7時完全起床ですから、それまでに忘れず睡眠をとってください」

部屋など無い。なぜならひたすら勉強したあげく、先生の監視下雑魚寝だから。

休憩を授業の合間に十分挟む設定なので、そこで睡眠時間を稼ぐのが手だろう。

（1日目お風呂、15分しかない……）

シャワーが人数分あるわけではない。スケジュールを見た女子たちは争奪戦を覚悟し、静かな闘志を燃やした。

2階にある学習室から地下1階にある風呂場への大人数徒競走、そして覗きがいのない熱闘入浴タイムが期待できそうだ。

ちなみに男子は1日目入浴時間は無い。

「何か質問はありますか」

「2日目は入浴後自由時間となっておりますが、この時点でも各自に部屋は用意されていないんですか？」

手を挙げ、指された女子が怪訝な声で尋ねる。

確かにきちんとした部屋が無ければ、談笑したくてもプライバシーの無い、先生や男子混合の雑魚寝部屋ではめになる。

「用意されてません。ロビーや食堂を使ってくつろいでください。ロビーにはソファもたくさんありますよ」

「はい……」

うわあ、という声が音にはならずもクラス中にこだまする。

救いの無い自由時間だ。隠れてやりたいあれやこれやが完全に不可能な仕様だった。

「マンガやゲームは不用品に入りますか？」

「入ります」

「……ですよねー」

一瞬にして月島はじめ数人の希望は崩れ去った。

「バナナはおやつに……」

「入ります。ただしおやつの持参不可」

そんな恵と萩原の小声の問答が、聞こえた生徒の心をさらにむなくさせた。

合宿当日の朝は早い。まだ夜が明けたばかりの早朝、校舎前に人だかりができていた。

「さむいよう…ねむいよう……」

「うー…あー……」

あちらこちらから幽鬼のような声があがる。昇りたての朝日の中、多くの生徒が眠気と眩しさに目をしばつかせていた。

「おはよう」

太陽光を浴びながら、朝に強いらしい光が爽やかな挨拶で登場する。

「はあ、重かった」

そう言う彼女の後ろにはズルズルと引き摺られた、ほとんど意識のない恵が居た。

「恵起きなさい。着いた」

「おふぁによぉ」

もごもごと口が動き鳴き声を出すが目は閉じたままで、もはや寝言だ。光と登校できなければ遅刻は確実だっただろう。

「ひーかりっ！」

ボストンバッグを地面に置いた光の背中に突然、がばっと何かが飛び付く。

「え、愛理?! なんで……」

飛び掛かってきたのはB組副学級委員、関原愛理だった。恋バナが好物のハイテンション少女である。

「全クラス学級委員は強制参加だぞ。知らなかった?」

「よろしく、光ちゃん」

「玲奈…彰子……」

抱きつかれたまま振り返った先、小さく手を振りながら近寄る二人が目に入る。

C組学級委員の眼鏡ボーイッシュ少女、田島玲奈と、D組副学級委員の小動物系女子、神谷彰子がそこにいた。

他クラスの学級委員が参加することを聞いていなかった光はポカンとして驚いた。

「なにその顔！光、もつと喜ばなさいっ！このこのっ」

「わひゃっ！くひゃひゃひゃっ！やめっ！ひー！あはははっ」

ぺたつと張りついたままだった愛理が、光の脇腹をくすぐる。

常人のくすぐりなら我慢できる光を一瞬で悶えさせる彼女は、学年一のゴットハンドの持ち主だった。

また関原という苗字をもじり、セクハラという不名誉なあだ名がつくスキンシップ大好き少女だった。

「うわ、朝からテンション高えな。トモネエ、時間だからバス誘導はじめるって」

「わ、わかったきやふははっ！ひゃうーっ！」

「お！彰子、チャンスチャンス！萩原くんだ！いっちょパンくわえてぶつかって来い！」

「ふえっ？！パン？！ぶつかる？！」

（ホント、なんでこんなテンション高いんだこいつら……修学旅行じゃねえぞ）

座席順はなく、バスに入った順から適当に座ることとなる。誘導をする委員2人は最後の乗車が確定だが。

「ふいー、間に合った！一番乗りい！」

流星のごとく時間ぎりぎりに登場した月島が、走ってきた勢いのままバスの中へ乗り込む。

佐藤先生はチラリと腕時計を見たが、とくに咎めもしなかった。
1番後ろの長い座席を2人分占領し、のびのびとする月島の隣に重い足取りの大宮が続いた。

着席した大宮はシートベルトを締めると、足を持ち上げ体育座りになった。いきなりの引きこもり態勢に月島が驚いて見ると、大宮は盛大なため息を吐いた。

「ハアア……」

「うわ、どしたの？こんなテンション低い大宮見たことない」

「そりゃそうだろ。葵とずっと一緒だって昨日の夜約束したのに、起きたら地獄合宿とか、ハア……」

「は？ああ……まだやってたんだあのゲーム」

「あたりまえだろ。はあもう3次元の月島葵で脳内補完しよう。昨日の夜は熱かったなあ、葵」

「気持ちわるっ」

「そうそう、その冷めた感じそっくり！もっと言ってくれ」

「うわあ……なあ、もうその二次元の葵ちゃんルートはクリアしたの？クリアしたならその余韻を楽しみなよ」

「クリアはしてない。けどいい所までいったんだ……18禁的な意味で」

「はは、うわあ、なるほどなー。そっか、勉強で煩惱消さないかね」
そう、話を切り上げようとした月島の思惑もむなしく、大宮はキラリと眼鏡を反射させると突拍子もない発言をする。

「なあ葵、俺……今日1日お前のこと葵だと思っても……いいか？」

「うおおおい！」

（だめだ。どう話を逸らそうとしても大宮の近くに居るかぎり、ピンクな方向に軌道修正しちゃう！）

「なんか車酔いしてきた。座席、前のが酔いにくいんだよなあ。前行こつと」

「え、まだバス動いてすらないぞ」

月島は逃げ出した。素早い動きで長椅子から抜け出すと、乗り込んでいる生徒に「後ろ行って」と伝え、空いている席に着く。

「うぎゅ……」

「あ、ごめん」

どかっとならに席についた勢いで、先に窓際に座っていた生徒にぶつかった。妙な鳴き声をあげて眉間にシワを寄せた生徒が、目をうつすらと開ける。

「うわ、トモウト酷い顔。どんだけ朝弱いのか」

「葵……？」

寝起きのためか恵の表情には血の気がない。いつもの健康的な雰囲気はなく蒼白な表情に月島が驚く。

「なに、トモウト風邪？」

「はあ……今ね、もうそれはそれは恐ろしい夢を見たんですよ」

「なんだ悪夢か。どんなん？」

「葵を皮切りにみんながバツバツと倒れて行く夢だよ……血まみれで。うっ、壮絶だった……」

「そりや確かに恐ろしい。そういう夢見るのって、何か意味ありなのかもよ。トモウト悩みでもあるんじゃない？」

「うっん、むしろこっちが心配になったよ。倒れる前にみんなが苦しみながら、何か伝えようとしてくるの。でも全然聞こえなくて……葵こそ何か嫌なこととかあったりしない？」

心配を心配で返し、お互いの表情を窺う様子を見て、二人がぷつと吹き出す。

「何この心理カウンセリング対決！どっちかが悩み相談しなきゃ始まらないじゃん！」

「だめだねえ、似た者同士だからなあ」

「俺らにはマイナス方面の話は出来ないんですよ」

「あらら……人一倍マイナス思考なのね」

「うわ、それ言っちゃう？ トモウトまだ眠いんじゃないの。そんなこと言うなんてボロ出まくりじゃん。二度寝、いや三度寝しなよ」

「うん……すごい眠い」

寝起きから続き、恵は血の気のない顔のままだ。のろのろと左へ傾むけていた頭を正面へ戻し、目を閉じる。すぐに背もたれに全体重をあずけ眠る体勢に入った。

「ホントに辛かったら言つてよね……豊と二人とも最近……なんか変」

語尾はもはや消え入るように呟き静かになる。だがしっかりと月島に伝わっていた。

（トモウトにはなんか隠してることに気付かれたか。さすがに精神的にキテるからなあ、最近）

バスが動き出しガイドが「おはようございます」と快活に話しはじめる。ロングの茶髪を巻いた若く美人な彼女に、主に男子から大きな拍手が起きる。

だが普段なら同じように歓喜するはずの月島は一瞥もくれずに目を閉じた。

（こんな合宿が嬉しく感じるなんておかしいよね）

屋敷の住人たちは家から離れられることに喜びを感じていた。

彼らは二度目の来訪者にコテンパンにされたが、戸惑いながらも住み続けていたのだ。

どうして彼らは出ていけないのか。寒いなかでの公園生活や、誰かの家を転々と借りる綱渡り生活が耐えられないのだと、口では言う。

（合宿に来て嬉しいなんて思うくらいに、あの家に居たら危ないってことはわかってる。でもなぜか……出ていく気になれない）

一時的でも離れることに喜びを感じながら、どうしても屋敷から出て行き、住み替えをするという気が湧かない。

長年暮らした愛着からなのか。

寒空の下過ごしたあと、屋敷が与えた暖かさを絶対の安全地帯と、本能が刷り込んだからなのかもしれない。

（離れたいけど離れたくないなんて、あの家に恋でもしてんのかな俺。どんな月9だよ……家がヒロインって斬新かも）

合宿内容への配慮からか、バスガイドの挨拶もすぐに終わった。

走行音とクラクションが窓ガラスごしに聞こえるだけで、バス内は話し声一つしない。

睡眠タイムと化したそんな空間で、エンジンの小さな振動を感じながら、月島もまた眠りについた。

20話：コイバナ

曇天の下、常緑の木々に囲まれて生徒たちは立ちすくんでいた。

上空から見れば森の中にぽっかり生まれた、コンクリートの孤島に見えるに違いない。

実に空気のおいしい絶賛マイナスイオン排出中スポットだ。

「うわあああ、寒い！早く全員降りてこいやああ」

全員下車するまで建物内に入るとは出来ない。あまりの寒さに生徒たちは立ちすくんで震えていた。

都会に慣れた彼らに雪の積もる山の冬場は厳しい。

「ひひかり、なんで私こんな所にいるの？これ夢？うぐぐ寒い」

「ちょっとまさか、朝から覚えてないの？一応起きてたのに。今日合宿でしょ、バスに乗ってここまで来たの」

「え、怖っ！昨日寝た時からまったく覚えてないよ」

顔を埋めたマフラーの隙間からもふもふと白い息を出し、ぴったり身を寄せあつた双子が騒ぐ。

その輪に青い顔をした藤井がよろよろと加わった。

「寝てたのに車酔いした……」

そう言いぐつたりとうなだれる藤井の頬に、光と恵は開けたての温まっていないホッカイロを押しあてた。

「うーん、あつたかい……気がする」

「私たちの愛のあたたかさですよ」

「開会式終わったら即授業だけどそんなんで大丈夫？」

「ふふ、二人の愛のホツカイ口があれば大丈夫」

その言葉に双子はにんまり笑うと、ホツカイ口にかけた力を強めてさらにぐぐつと藤井の頬を押す。

頬肉を中央部へと押されたその顔は、普段のすっきりと整った顔立ちから、かけ離れた憎たらしさだった。

脱癒し系を果たしてしまった藤井を見て、双子はけらけらと笑う。

「やめなふぁーい」

怒ったような声を出しつつも藤井も楽しげに笑う。

全員降車し、団体が動き出してもまだホツカイ口攻撃は続き、藤井の憎たらしい顔は移動式となる。

「うわっ」

のろのろと移動する彼女らを追い抜かす瞬間、ちらりと様子を窺った谷が驚愕の声をあげる。

「ぶはっ！お前の嫁？あれお前の嫁？」

「おいお前の嫁、あの顔はやバいぞ。おにぎりとかあだ名つくレベルだぞ」

谷の視線を追いかけて見た、脅威の藤井に月島と萩原が茶化す。

「べ、別に嫁とかじゃねえし……」

「うわっ」などと失礼な感嘆の声をあげたにも関わらず、谷の表情は今やにまりと破顔していた。

「おい、顔が気持ち悪いぞ」

「あんな顔にされても無抵抗な藤井かわいいな。もぐもぐうまうま
って顔だね」

「うるせえな……」

文句は言うが否定はしない谷が早足で歩きだし、さっさと建物内に入る。

モテないメンズはそれを追いかけて玄関で素早く上履きに履き替えると、もたもたと履き替えにでこずっていた谷の尻を蹴り上げた。

「つてえ！」

「イチャついてんじゃねえよ」

「いつどこでイチャつきました?! ええい、うざったい!」

コートのポケットに手をつっ込んだまま、蹴りの応酬をする。

「萩原、みんなを背の順で並ばせてください」

「はい。……くそ、邪魔が入った」

「大丈夫、谷は責任持って俺が殺しとく」

「殺ッたら整列しろよ」

「お前ら……」

呆れた様子の谷の鳩尾に二度拳を入れて月島は満足したのか、ポケツトへと手を収める。

「お前ら……俺のことサンドバッグだと思ってるだろ」

「お前が目の前でイチャつかなきゃ、こんなことにはならないよ」

「そんな彼女欲しいなら、光か恵と付き合っちゃえよ」

「うつわ、何その情性みたいな。てかあの二人は無理でしょ」

「うーん、意外にいけると思っただけだな」

「っていうかそれって、男として恥ずかしいセリフだぞ！男の情性で女がホイホイついて行くとしたら、大間違いなんだからね！女を何だと思ってるのよ！」

「お前、変なところでクソ真面目だよな」

「クソ奥手なお前よりはマシ」

鼻で笑いながら言い合い、身長の違いは彼らは整列のために離れる。それにしても谷をいじっている間の彼らは実にイキイキしている。

狩猟民族の血でも騒いでいるのだろうか。

「ちょっとちょっと、私たちってどこ並ぶのー？エリート集団超怖いんですけど」

「あは……なんか肩身狭いね」

「まあ授業サボってプチ旅行出来るなんてラッキーだから、我慢しよーぜ」

A組の列から外れ、他クラスの八人の委員たちはポツンと佇んでいた。

「みんなー、とりあえずBCDE組の順番で並んで。あと玲奈、この合宿地獄だから。ラッキーとかないから」

「……しおりの時間割見てなんとなくわかってたけど、現実逃避しただけだから。希望壊すなし……」

「わかってるなら、いい」

そう話す玲奈と光の瞳はどこか疲れたように遠くを見ていた。

「ちょっとちょっと！ラッキーはあるでしょ！彰子大接近のチャンスじゃない！ここでくっつけちゃえるように頑張るんでしょー？」

「愛理ちゃん、ホント、やめて……」

その言葉に近くで固まり話していた他クラス委員男子組が、ざわり

と騒めく。

「え、神谷って恋愛とかするタイプなんだ」

「A組に居るのか、誰だ？」

「ホント、恋愛じゃないから！憧れだからあ！」

「うわ、どうした神谷」

「うひょああああ！！」

タイミングよく彰子の背後に現れた萩原に、キャラ崩壊の奇声をあげる。

らしくない様子にさらに萩原が困惑した表情を浮かべると、彰子は顔を蒼白にして俯いた。

「なんなんだ？まあいいや。先生がお前らは別行動だって。竹谷先生についてけってさ」

「はい」

ぞろぞろと竹谷先生の方へと移動する委員たち。見送りながら萩原は疑問を口にする。

「神谷ってあんな大声出すタイプだっけ？」

「うーん……まあ、あれはレア中のレアだと思って」

いつの間に一大プロジェクトとなってしまうた、萩原と彰子をくっ

つけよう大作戦。

進展なのか後退なのかわからない今のイベントに、光はどう対応すればいいのかわからず曖昧な笑みを浮かべる。

とりあえず自分なりに、プラスな方向へ行くような行動をしようと思いつく。

「ねえ……あのさ、萩原はどうして自分に彼女ができないかわかる？」

「は？どうした突然。お前が恋愛話とか」

「いや別に普通だから！他のクラスの子たちと居る時は話すし！いいでしょ別に」

「ハッ、つか何その質問、いじめ？そりゃ、俺の努力不足なんじゃねえの。女子との交流とかないし」

「やっぱね、そう言うと思った」

「……まあお前がモテないっていう点なら、勘違いとかもあるんだろうけど」

「は？」

思案顔で腕を組む萩原の、思わぬ発言に光が固まる。

「なんか男女3対3で昼飯とか食ってるから、デキてる3組と勘違いされてるらしいぞ」

「な……それ」

「この前の委員会のあと聞いてその場では否定したんだが、だいぶ広まってるらしい。さすがにちょっと悪気は湧いたんだが、何かぐだぐだしてるうちに言いそびれててな」

「知ってたんだ」

「なんだ、お前も知ってたのかよ。なら何とかしようと思わなかったのか？」

「なんとかしようと思っても、こういうのの対処って私の専門外だし手が出せないの」

「17歳女子高生がそんなんでどうすんだよ。ホント恋愛に耐性なさすぎる」

「ふん……別に私はどうだっていいんだもん。恋なんてする気もないし。萩原は知ってたならもっと焦るべき」

「だったら同じだよ。別に誤解されて困る相手なんて居ないし、俺もどうでもいいんだよ」

普通ならば誤解は放っておけない所だが、頓着が無いのかなんなのか、彼らの意見は意外な一致を見せた。整列したA組の列が教師の先導で動きだし、合宿所案内オリエンテーションが始まった。のろのろと歩きながら萩原と光は会話を続ける。

「でも谷と律のこと嫉妬してるよね？」

「嫉妬お？目の前で青春されんのがウツザいだけだつつの。早くどうでもいいから決着つけていう苛立ち」

「心せまつ！でも、か、彼女がほしくないわけじゃないんでしょっ？それならもつと困らないと」

「いいんだよ、別に“今のままで”な」

口の端を上げてそう言う表情に、光の中で一つの疑念がわきあがった。何となくだが、心当たりのある疑念だった。

「……萩原ってさ、もしかして好きな人居る？」

質問に萩原は不敵な表情は変えないまま光を見下ろす。光が首を傾げて見返すと、目を細めて悪役のような笑みを浮かべた。

「え、当たり？」

「わかるように言えば、わかるんだなお前でも。さて気付いたな、これでフェアだ」

「フェア……？なにが？」

「お前は苦手分野のことは、他のことよりボロが出やすい。俺は一方的にお前のそのボロに気付いちゃってたんだよ。不平等だったろ？」

「は？……はああ？意味わかんない」

「ボロってのはその顔だよその顔。八割がた騙せても俺は騙せなか

ったな。今までの会話の流れ的に“専門外の苦手分野”でボ口を出してる心当たりがあるんじゃないの？」

「はあ？何それ……そんなの別にないし」

「お前、好きなやつ居るだろ」

自分には関係ないこと。

曖昧でよくわからない、何の役にもたたないと感じているもの。そして何より“知るのが怖い、向き合いたくないもの”。

光にとって、今話題にあがっている専門外の苦手分野である“恋愛”は、そういうものだ。

避けてきたそれを突き付けられ、一方的に押し付けがましい意見を述べられただけが、光はすっかり動揺していた。萩原の最後の言葉に、今や弁明の余地のないひどい顔を晒していると自分自身わかっていた。

「まあ向き合いたくない気持ちはわかるが認める。俺にはバレてる。なんだよ睨むなよ。お前が確率の低いスイッチを押したから、こんな面倒くさい話になってんだぞ」

「なにそれ……」

「トモネエのコイバナ」

「それが確率の低いスイッチ？萩原の勝手にセットしたスイッチじゃない。私の知ったこっちゃないのに」

「俺が知ったこっちゃあるからいいんだよ。あー、すっきりした。」

別にお前も情報もらえる相手ができたとか、軽くプラスに考えとけよ」

「……情報とか……何勝手に話進めてるの？別に萩原の言ってること肯定してないでしょ」

「うわあ、まだそれ言う？鏡で顔見てこいよ。めんどくせえヤツ」

「萩原に言われたくない」

紅潮した不機嫌顔でそつぱを向いた光。それから萩原も視線を外すと、静かにゆっくり深呼吸をする。
それでも落ち着かなかったのか顔を俯かせると、爪が食い込むほど両の拳を握り締めた。

（ぶぐぐぐ！くそくそくそ……！なんで俺がこんな話……！くそ恥ずかしい！仕方ない仕方ない！こいつらどっちかがそういう話に興味を持ったらそれをスイッチにして頑張るって決めた俺をうわあ殺してえ！くそおおおっ！！）

歯を食い縛り何かに耐えるように震える彼の表情は、感情丸出しの青春高校生そのものだった。

「ここが仮眠所です。荷物もここへ置いてください。筆箱を使うのでカバンから取り出しておいてください」

佐藤先生の声に萩原が我に帰ると、広いお座敷一面に布団が敷き詰められているのが目に入った。

そろそろと部屋の端に作られた広い通路を渡り、壁ぎわに設置された棚にカバンを置いていく。

「おい、筆箱持つてくんろろッ……」

荷物を置いてすぐ、身を翻して部屋から出ていこうとした光の背中に、平静を装いそこねたカミカミの萩原が呼び掛ける。

「そうね」

「どんだけ上の空なんだよ」

「うるさい」

地獄の合宿が始まる以前に、彼らの気分はドン底に落ちていた。

21話：勉強会スタート

日が暮れ外はすっかり暗くなった午後六時、合宿所は自習の時間だった。

部屋は、自習室とグループ学習室の二つが用意されていた。

机の間に敷居が置かれていて、プライベートな空間で集中して勉強に取り組める、自習室。

わからないことはすぐに相談でき、リラックスした空間で弱点克服がスムーズに進むグループ学習室。

六人組はグループ学習室で固まって、学校配布の冊子教材を科目はバラバラだがひたすら解いていた。

「誰かー、問十ヘルプ！」

「ツバでもつけときゃ解けるだろ」

「それじゃ紙は溶けるが問題は解けんよ」

谷と萩原の漫才をわき目に、谷の前から教材を覗きこんでいた藤井が唸る。

「うーん……本当に難しい」

「めんどいし答え見ちゃいなよ」

「月島は黙って染色体と向き合ってる」

「もう染色体とは別れましたあー、今は神経ちゃんですうー」

「浮気性なやつめ」

「バカ野郎。恋には一途、それが月島」

隣同士で言い合いになる彼らの背後に、ぬっと人影が立った。

「おい、何騒いでるんだ？」

「「すいません」」

学習から脱線した会話に鋭く反応した見回り教師が、ドスのきいた低い声で脅しかけてきた。

一気にしんと静まった六人の間にカリカリとペンの走る音が響く。だがすぐにカリ、と動いていた光のペンが止まる。そして数秒、恵のノートの上をカリカリと走るペン先をジトリと見つめる。

——何してるの

止めたシャープペンを動かし、恵のノートの上部にそう書く。顔を上げた恵は、光の怪訝な顔を一瞥すると、カリカリと返事を光のノートに書き始める。

——もう勉強するのガマンの限界だけど、やんなきゃダメだから最終手段にでたの！

そう書ききり、ニツと笑顔をつくって光を見る。光はその笑顔をジトリと見据えると、ノートを取り上げパラパラと前のページをめくる。

数ページにわたり、それは最早お絵かき帳と化していた。
歴史上の出来事をポップなキャラクターが吹き出しでしゃべっている。

キャラクターは歴史上の人物を元にしたようで、炎の中舞を踊る猫などが描かれていた。

他にも犬やウサギなど可愛らしい動物の絵柄が多いなか、光の目に異質な物が映る。

『イチゴパンツ（1582）で太閤検地！』

その語呂合わせタイトルの下には、精密に模写された豊臣秀吉がイチゴ模様のブリーフで田に立つ、あられない姿があった。

「くっ……！くふうっ！」

ノートを投げ捨て慌ててパチンと手のひらで口元を押さえる。

「あはは光、沸点低い」

顔を赤くしてふるふると震えて笑いをこらえる光を見て、恵も笑いだす。

「なにしてるんだお前ら」

少し離れた所に居た、先ほどのガテン系教師が目ざとく見つけ、ドスのきいた声を発しながら近づく。

ホント何してんだという四人分の視線も浴びながら、友野姉妹は笑みを引つ込める。

「……教科書の写真が面白くて」

「真面目にやれ。女子はもうすぐ休憩に入る。時間を無駄にするな」
休憩という言葉にぴくつと恵が反応するが、すぐにバトル入浴タイムのことだと気付き落胆する。

「はい……」

教師が離れてるのを見計らって二人がため息をつく。それで取り直したように再びペンをとり、黙々とテキストに取り組む。
程よく緊張した空気が流れ、全員が真剣な表情となる。バ力をやるだけでない彼らの底力と言いたいところだが、役一名はお絵かきに夢中になっているだけのようだ。

沈黙の時間が数十分ほど続いた頃、入り口付近に現れた佐藤先生の声がそれを破る。

「女子は入浴時間です。仮眠室で荷物を取って、移動してください」
ガタン、と一斉に女子が立ち上がると一目散で仮眠室へのスタートダッシュをきる。
シャワー争奪戦はもう、始まっているのだ。

「こええ……」

横切る女子たちの据わった目を見て谷が呟く。だがその声はバタバタという足音にかき消された。

「あははっ！みんな遅い遅い！」

ビュンと風をきって圧倒的な速さで走る恵。成績はA組のビリを争

う彼女だが、スポーツに関しては体育会系顔負けの運動神経の持ち主だった。
階段の手すりに手をつき、華麗なターンと共に階段を3歩で降りきる。

「ヒャーハッハー！」

追隨を許さない速さで、一階の玄関ロビーを駆け抜け、流れるようなターンを再び披露する。長めの捻れた階段を牛若のように身軽に跳ねて着地する。
そのまま真っ直ぐ進み、分岐した廊下を右に曲がる。

（一番いいシャワーをゲットだ！でも……光が遅いのはおかしいな）

友野姉妹の走行速度は、恵に軍配が上がるにしろ、光も遅れをとるほどでは無い。

それを知っている恵は、ふと不安を覚え、ちらりと後ろを振り向く。

「なあっ?!」

見えたのは背中、反対方向へと走っていく光と藤井の姿だった。

「あの子が一人で迷わずに行けるわけ無いもん。泳がせて正解だった。これで一つシャワーが開く！」

「いきいきしてるね、光……」

恵のバカを利用した光の作戦勝ちのようだ。合宿所に来るのはこれが初めてではないのに、情けない体たらくである。

光は座敷の仮眠部屋で着替えを取り出し、トップで部屋を飛び出す。

風呂場はもう目前だ。

「待てえー！光いー！」

部屋を飛び出したところで追い付いてきた恵が背後に迫る。

「追い付いたか……思ったより早く方向転換したしね」

余裕を残して走っていたらしい光が、ぐんとスピードを上げて最後のスパートをかける。

ワンツートップで脱衣場に駆け込み、浴室に一番近い籠へ荷物をダクシュートする。

「うらうらうらあーッ！！」

「ほああああーッ！！」

「きええええーッ！！」

二人が着いて少したつと、言葉をなくしたような奇声をあげながら、次々に女子たちが脱衣場に駆け込んでくる。

シャワーの為というか、負けず嫌いの多いこのクラスの闘争心が、彼女達を駆り立てているようだった。男子陣が見たら驚愕するであろう、阿鼻叫喚の図であった。

「ミニタオルミニタオル……」

がさがさと荷物の一番下になっていたタオルを取ろうとした、恵の手がピタと止まる。

「あ、ぱんつ忘れた」

「あら残念、取ってらっしゃい！じゃあお先」

「別に……無くてもいいか……」

「取ってきなさい。シャワー一緒に使わせてあげるから」

道を踏み外そうとした恵を阻止する光の表情と声は、真剣そのものだった。

そもそも最初からシャワーと一緒に使うという考えが、このクラスには何故浮かばないのか。

こういったヘマをした生徒が、黙っていながらもあと何人かは居る。今ここは、おそろしい無法地帯だ。

「だりゃあああーッ！！」

予想どおり、タオル一枚の女子が居ながら色気の無い風呂シーンとなってしまった。湯気の立ち込める風呂場へと、戦士たちが次々と叫び、駆けていく。カランカランと桶が転がる音が反響し、壮絶さを煽る。

滑って転ばないことを祈ろう。

その頃残った男子たちは、女子の変貌ぶりなど露知らず、静かな時間を過ごしていた。

「食事配給当番は移動の時間だ。エプロン取って食堂行けー」

その声に数人の生徒がペンを置き、立ち上がる。

今日の夕飯準備は女子の入浴時間と被ってしまっているので、担当は全員男子だった。月島と谷もその中の一人で、気だるそうな足取りで部屋を出て行く。

ちなみに学習室に一人残った萩原は、学級委員特典で食事当番免除だったりする。今回の場合あまり喜ばしくない特典だが、外に出た彼らは沈黙から解放され、与太話を始める。

「俺の家エプロン使わないから持ってなくてさ。昨日の夜、準備始めてから必要だって気付いてマジ焦ったぜ」

「え、じゃあどうしたの？ノーエプロン？」

「まず借りようと思って何人かに電話したんだよ。夜中にかけても怒られなような奴に。でも居てもレースのフリル付きしかないとかで、誰も予備エプロン持ってなくてさ。てか一応お前にも電話したけど出なかったんですけど」

「あ、そうなの？多分寝てたわ。夜は電話コールごときじゃ起きないからね」

「うわ、でたよ月島。で結局誰からも借りらなくてさ。泣く泣くこないだ妹が、家庭科で作ったエプロン持ってきた」

「フリル借りるよりはマシだったんだ妹のエプロン。柄は？」

「リラックマ。チョー可愛いだろ」

「うわ、いいじゃん幼稚園の先生みたいで。子供に大人気じゃん」

「ふみかってピンクのアプリケで名前付いてんだぞ」

「いいじゃん新婚みたいで。嫁さんの名前入りエプロンみたいじゃん」

「いねえよそんな新婚さん！しかも妹とそんな気分味わえても嬉しくないし！お前ホント適当っすね」

そんなエプロントークをしているうちに仮眠室の近くに着く。無意識に前方にある女風呂をチラリと見てから座敷部屋へと入る。男のサガなのだから仕方ない。

「うわ、お前のヤツ穴空いてんじゃん。歴戦のエプロンだな」

「毎日使ってるからね。俺の愛が凝縮されたエプロンさっ」

「そんなお前の得意料理は？」

「カップラーメンと肉じゃが」

「ニートとお袋さんの味の両方だと……」

「ちなみに肉抜き肉じゃがね」

「じゃがじゃねえか」

それから料理トークとなり、女子顔負けの家庭的な様子を見せて歩く彼ら。

ちなみに近くの女湯では、男子顔負けの戦いが繰り広げられている。荒々しく風呂場で戦う少女らと、料理話に花を咲かせる少年らのこの姿。

女が戦うというのは自然界でも多く見られる、おかしくない姿なのだが、近年で日本人の性の在り方も変わったものだ。
一つ言えることは、やっぱり女って怖えなあ、ということである。

22話：午前2時、午前4時

合宿一日目の午前2時。

丑三つ時といえば幽霊話でよくイベントの起きる時間帯だが、学習室に缶詰の学生達はただただ現実を追われていた。

「う……うひい！」

情けない悲鳴を上げ生徒がまた1人、教師に襟首を掴まれ消えていった。

居眠りをした生徒には強制的に『心頭滅却、三分間雪上修行』が執り行われた。

キンキンに冷えた夜の空氣のなか着のみ着のまま放り出され、3分間閉め出しをくらうのである。

真夜中の暗い森を見ながらの3分間だが、ホラー要素を感じ取る余裕など無い。

ただ、凍死という二文字を脳へと届ける、大自然の脅威を感じる3分間コースなのだ。

「問7解説してやろうかー？」

「たのんますー」

いかにも空元気といった明るい声がグループ学習室から聞こえてくる。

夕飯前と同じ場所で固まった仲良し六人組は、完全に深夜のテンションだった。

「ストップりっちゃん！その読みはツツジだよ！」

「やるじゃない恵！」

「へっへっへ！夜になると頭が冴えさえなのだー！」

脳内アドレナリンが迸り、一様に目を爛々とさせ、もはや異常の域に達していた。

一日中勉強した結果がこれである。

そんな中で1人、明らかに浮いてグロッキーな人物がいた。

「なんで4にならないの……ありえない……ありえない」

目を虚ろにさせて暗いオーラを放つ、光だった。

答えが合わないらしい答案に向かって、もう5分以上ブツブツと何やら呟いている。

ペンを片手に微動だにせず、集中して口だけを動かしている。

しかし何事か、突然サツと素早い動きで顔を上げる。

口を引き結び瞳孔を開いて前方を見据える様子は、警戒した猫のようだった。

「お、おーう。お前らー、勉強するのはいいが、もうちょい声落とせー」

光の視線の先には、まさにちょうど六人組を注意しようと、離れた位置から方向転換した教師が居た。

光の睨みに思わず足を止めると、その場で聞こえるように声をかける。

教師がこちらへ向けた敵意のようなものに、光は鋭く反応して顔を上げたのだ。その行動は、危険にさらされた野生動物のようだった。

「光、野生化してる。気を確かにつ」

「気は確かだもん」

なだめる恵に口を尖らせて言い返した光の姿は、トモネエトモウトの関係が逆転したようだった。

「みんな覚えといて。光は夜になるとバカになります」

「ああ。ついでにトモウトが、夜になるとその穴を埋めるようにマトモになるのも覚えとく」

「昼だってマトモですー。もう……うるさい豊。余計なこと言う暇あつたら頭使いなよ」

そう光をまねて言った恵には、姉の風格まで湧き出ている気がした。目を細めた薄笑いの表情が偉そうで、普段の恵の姿を考えると小憎たらしい。

「うわうつぜ、お前にだけは言われたくない」

「うわー、なんてひねりの無い言い返し。言われた通り頭使えば？お馬鹿さん」

「調子に乗んじゃねえよ、脳ミソにシワの一本も無いツルツル野郎」

「一本はある！確実に一本はある！さつき頭使ったから」

「じゃあ見せてみるよ」

始まってしまった萩原月島によるバカ狂騒曲バージョン深夜。当然教師は反応するわけで。

「おいうるさ……」

再びギロリと光の鋭い眼光を浴び、教師はその場でフリーズする。普段の礼儀正しい優等生姿を知るがゆえ、先生はどう反応すればいいのかわからない。ただ何だか反抗的な態度に、ちよっぴり泣きそうになる。

「……静かにやれよ」

光の威嚇のおかげで6人は、それなりに恵まれた環境で学習できているようだ。

恵まれた環境下とはいえ、寝たらさすがに罰則は免れない。

深夜のテンションはいつまでも保っていられるわけではない。

午前4時が近づきオールに慣れていない彼らは、魂が抜けたように燃え尽きていた。勉強でのオールだということがさらに辛い。

「俺、もう、寝る」

「私も」

谷のやつと紡ぎだしたような声に藤井が賛同する。

「一緒に寝るなんてラブラブね」という冷やかしを言うはずの仲間たちも、今や廃人のようにただ起きているだけだった。

「あー……俺ももうムリー」

あまり考えなくてすむ、英単語書き取りに移行していた月島がパタンとノートを閉じる。

荷物をまとめ3人が立ち上がると、おぼつかない足取りで部屋を出ていった。

寝る、と一言言い残し30分ほど前に光は退室している。

つまり座敷に居た6人組は、今や萩原と恵の2人だけとなっていた。

「萩原寝なくていいの？」

退席した分の空席を詰めずに、斜め前の離れた位置から恵が尋ねる。教師は離席しているので、堂々と話しても心配の必要はない。

「あと30分やって7時まで寝られるコースにすれば、そのまま朝礼出れて睡眠時間が稼げる」

「あ、同じ作戦だ。朝礼って仮眠室でやるもんね。みんなが7時になって、勉強部屋から仮眠室に移動してくる間、寝て待つ作戦だよ」

「そこで睡眠時間5分稼ぐ計算。それに2時間半睡眠で起きて、いきなり勉強とか俺……ムリ」

普段「ムリ」やら「出来ない」など滅多に言わない萩原。疲れでプライドストッパーが外れているのか、ぽろりと「ムリ」が口からもれた。

「うわ、萩原が素直だー」

驚き目を輝かせた恵が、萩原の前の席へと、膝をついたままトタトタ移動する。

机を挟んで向き合い、両肘をついて手のひらに顔を乗せる。視線を落とし、びっしりと文字の書かれたノートを見る。

「……………」

トントンとシャーペンを人差し指で軽く叩き、萩原の手は止まっていた。

「わかんないのー？なに、古典？」

「頭まわんねえ」

「これさっきやったヤツだ。えっと、このはべりはー……………」

なんとということでしょう。恵が萩原に勉強を教えています。視界を邪魔する髪を耳にかけ、さらさらとテキスト上にペンを走らせる。恵のくせに、とってもクールだ。

「だから答えはAでしたー。わかった？」

「ああ。…………ふふっ…………くくく」

「え、なに笑ってるの？」

耐えきれずといったように、笑い声をもらした萩原。ついに疲れて変なスイッチが入ってしまったのかと、不安げに恵は尋ねる。

「お前が俺に勉強教えるとか……………」

「うわあ、自分が頭良いの前提。いくら学年一位でも、疲れきった

理系に得意分野じゃ負けられないよ」

「ピエロ女」

「へ？」

「お前頭の回転早いくせに、なんでいつもバカばっかやってんの？」

「私のことそんなふうに使ってたの？買いかぶりすぎだよ。ピエロじゃないよ、私はちゃんといつでも素だよ」

ふうん、と感情薄く相づちを打つと勉強を再開する萩原。
だが少しして再びペンが止まる。

「……何見てんだよ。気が散るんだけど」

萩原が頭を上げた先には、じっと見返す恵の顔があった。

「へへ、私の目力におそれをなしたか」

「は？」

「豊はかわいいなーって、見てただけだよ」

「……は？」

自分に該当しようなない耳を疑う褒め言葉に、目を点にする。

女子の『可愛い』は挨拶のようなものとはよく言っが、何もした覚えのない今、言われる筋合いは無い。

しかも普段恵は、可愛いをすぐ連呼するタイプの女子ではない。

「今の発言はちょっと引くぞ。なんかバカにされてる気分になるしな」

「だって実際バカにしてるもん！」

そう小馬鹿にしたように笑う恵を睨むと、ため息を吐いてノートに視線を落とす。

話を続ける気が失せたらしい。

「豊、子どもみたい」

萩原の聞く耳を持たない態度に構わず、恵は続きを口にする。しつかりと聞き取ってしまった萩原は片眉をピク、と持ち上げ、俯いたまま不服そうな声を出した。

「的確に俺が腹立つ言葉言いやがって」

「だってホントのことだもん」

「……なんだよ、珍しく攻撃的だな」

「ピエロだなんて、思わないでよ……私いつも素直だもん」

静かな声で言ったその声は、不思議と萩原を責めるように響いた。萩原が顔を上げる。

少し俯いた恵は珍しく無表情だった。

「……お前、怒ってたの？」

そう尋ねるとむ、と口を尖らせて不機嫌な表情となった。

「そうかも……」

（言われなきゃ気付かないのかよ……こいつ、頭の回転は早くても自分のことになるとホント鈍いんだな）

「……何笑ってるのさ、こっちは怒ってるのに」

眉間のシワを深くして恵が睨むが、萩原は笑みを引つ込めない。

「全然素直じゃねえじゃん。自分の感情もスムーズに出せないなんてよ」

その言葉に恵は一瞬ポカンとした表情になった後、困ったような笑顔をつくる。

「本当だ、だめじゃん私。なんだか疲れた豊はいつもより相手のこと見るね」

「いつだってみんなの心配ばかりしてる優しい委員長だろ？俺は」

「嘘つけっ」

早くも恵の怒りはどこかへ行ってしまったらしい。楽しげに笑っている。

そして突然、ハッとイタズラを思いついた子どもの表情になる。

「そっか！……そうだねー、見栄っ張りで悪ぶってるだけだもんねー豊はー。優しい委員長だよ、うん」

「はあ？」

「よしよし」

子どもをなだめるように頭を撫でる恵に萩原は舌打ちをするが、手を振り払うことはなかった。

23話：勉強会後のバイキング

『ステップアップ！受験合宿』二日目、午後6時。

学習時間全行程を終え、夕飯の時間だった。

ご褒美らしく、バイキング形式の料理がずらりと囲む中、生徒達は和気あいあい食事をしていた。

山盛りに揚げ物や肉類を乗つけた、全体的に茶色い皿の者。

食欲がどこかへ行ってしまったのか、野菜がちらほら乗っただけの草食動物のような皿の者。

スイーツパラダイスを気取った、デザートしか乗ってない皿の女子。

「この日のために私は生まれてきたのだ……」

「ふふ、こういうお皿のデコレーションって、性格でるよねー」

恵の皿はカレーにグラタン、プリンといった、子どもの夢を叶えたようなメニューだった。

野菜中心の藤井の皿の上はバランスよくヘルシーにまとまっていた。実に性格が出た皿である。

「うひゃー、りっちゃんってこんなときでも栄養バランス考えるんだね」

「このあとヨーグルト取ってくると完璧」

「乳製品いっつも食べてるよね。りっちゃんヨーグル党？」

「そうだね。毎日必ず朝夕2回食べる習慣だから、立派なヨーグル

党かもね」

「……ふうむ、なるほど」

「へ？なにがなるほどの恵？」

「うっん別に」

藤井律子のFカップはヨーグルトでできています。

みんなもレッツ乳製品！

恵が話を切り上げると、左を向いた藤井が心配そうな面持ちで口を開ける。

「光、ずいぶん静かだけど大丈夫？」

「え……？うんちょっとボーっとしてただけ」

食事の時間がはじまってから一言も言葉を発していないが、光は居たのだ。

話にも参加せず箸を握り締めたまま宙を見つめる彼女は、どうやら心ここにあらずのようだった。

「光、今は食べることだけ考えなよ。ボーっとしちゃだめ。意識をしっかりここに向けて。お箸しっかり握って」

「わあ。どうしたの恵？光のお母さんになったみたいな発言しちゃって」

「だらしのない光を恵ママは許しませんからねっ」

「なに偉そうに……ちょっとボーっとしてただけじゃない」

「ふふふ、反抗期の娘と親子の会話」

我を忘れかけていた学習時間から一転、和やかな時間が流れる。

先ほどまでの、血走った目をした若者達がペンを持ち「うゝ、あゝ……」と唸るだけの絵面はまるでゾンビの集会のような壮絶さであった。

それを知っている教師たちは疲れを労うためか、食事中の粗相をある程度、黙認していた。

「おまえら……」

「ん？」

呆れた様子の谷の視線の先には、ぎゅうぎゅうに食料の詰め込まれた、タッパーと弁当箱があった。

「気持ちはわかるが、みつともない、みつとも無さすぎる」

「うるせえな。食料確保のチャンスなんだ、今やらなきゃ後で後悔する」

いわゆるお持ち帰りタッパーの持ち主は言わずもがな、萩原と月島だ。

バイキング形式を良いことに、日持ちしそうなものを中心に、詰め込み作業を行っているのだ。

「肉野菜……ああ肉野菜……肉野菜」

「一句詠むなよ……」

感極まって松島の芭蕉状態になった月島。

弁当箱の他に、彼のパーカー前ポケットには、はみ出るほどのふりかけが収まっていた。

置かれていたものを全て持ってきたのであろう。

「やべ、紅茶取り忘れた」

「もうやめとけて！見てらんねえっ」

食事時間も終盤にさしかかり談笑に移りはじめた雰囲気の中、バイキングコーナーでハイエナのように貪る友人の姿など、谷は見たくなかった。

「お坊っちゃんだねーお前はー。仕方ない。意地汚く見えないように、バレないようにやれば文句ないんでしょ？」

「いやいや、もう取りに行かないっていう選択肢を選びなさい！」

「先生だって黙認してるし、もう怖いもんなんてねーよ。いいだろ別に」

「その考え方が怖えよ！特にお前は学級委員の体裁とか気にしてみよう！」

「日々の生活の糧を得るチャンスに比べれば、そんなもの1ミリの価値にも満たない」

「なんだ。そういう外聞のこと気にしてたの？なら俺は失うモノな

いし、別にいいじゃん」

止める間もなく、月島がバイキングコーナーへと再び向かう。気を取られている隙に萩原も消えていた。

「もうあいつら……スラムの子供みたいなくましさで……ついてけない」

「普段どつという生活なんだろうね。あれもモテない原因の1つだよねあの人ら。ケチそうで……」

隣で一部始終を見ていたらしい女子が、苦笑いで谷の呟きに応じる。外聞や体裁を気にして育った、高層マンション39階住みの谷にとつて、彼らのハングリー精神を理解するのは難しいようだ。言葉通り、食に対するものだけに発揮される精神だが。

バイキング先で萩原が教師に呼び止められる。

ついにお咎めを受けたのかと思いきや、そうではなかった。学級委員の仕事を命ぜられたらしく、マイクへと向かい司会業をはじめ。

「静かにしてください、連絡します」

ポケットに入りきらなかったコーヒーマルスを両手からはみ出させながら、平然と仕事をまっとうする。

A組のハリボテカリスマ人間とは彼のことだ。

「——11時が就寝時間で、それまでは自由時間です。ただしもちろん、鍵は開いています。が外出だけはしないでください。以上です」

ハリボテカリスマの連絡が終わり食事時間が終了する。
バラバラと食堂から出ていく生徒たち。

萩原もその流れに乗り、マイクから離れ出入口へと向かう。

「はーぎわーらくんっ」

明るいい声で呼び止められ萩原が振り替えると、満面の笑みとクールな微笑を携えたB組C組の女子委員ズが立っていた。

「あ？なに？」

「ちょっとさー、このあと時間くない？」

「どうした？ミーティングでもしたいのか？」

「そうそう！合宿のことさー、ちょっと思うことがあって」

「ふーん。他の奴らには……」

「もう私らが連絡しといたから平気。8時に会議室に来てくれ」

「会議室って1と2あるけど」

「1でお願い」

「わかった」

萩原の了解を受けると、クスクス笑いながら萩原の脇を通り抜ける関原と田島。

女子が腕を取りあってそういう笑い声を上げるのは、大抵イタズラ

を仕掛けた時だ。

萩原は何か面倒なことを仕組まれていることに、気付いているのだろっか。

「やべ、タツパ忘れてた」

気付いていないようだ。

24話：さよなら日常

ミーティングをしようと呼び出しを受けた萩原が会議室へと向かう。風呂上りに配給された牛乳瓶をぶらぶら振りながら、階段を上り2階の会議室のドアを開ける。

「なんだ。まだ全然きてねえじゃん」

円形の机がドンと置かれただけのシンプルな会議室には、まだ1人しか着席していなかった。

「5分前なのに珍しいな。他の奴ら、疲れて寝てなかったか？」

「え？うつん……」

会議室で縮こまっていた1人が、いきなりの質問にさらに縮こまってオドオドとする。

小柄なその人物はD組副学級委員の神谷彰子だ。

「えっと、光ちゃんと愛理ちゃんと玲奈ちゃんは、ちょっと用があるから先行っててただけだったから。すぐ来ると思う……」

「ふーん」

どかっと席に着くなり、萩原は牛乳瓶のキャップをキュポンと外す。

「……………」

紙のフタをぺりぺりとめくり、風呂上がりの一杯を堪能する姿を、

彰子はぼんやりと見ていた。

「はー、たまに飲むとうまいよな、牛乳って」

「え？あ、うん、そうだね」

こくこくと焦るようにならずいて肯定を示す彰子。

それからお互い会話もなく黙り込む。

持参したキャラクター物のノートをただじつと見つめる彰子。

その正面で手持ちぶさたげに、タカタカとリズムカルに机を叩く萩原。

「……こないね」

「会議室1つて言ってたよな？」

備え付けの時計が8時を指しても2人から人数は増えず、違和感に部屋が包まれる。

「ちよつと隣の会議室見てくる」

「え、いいよ私が」

「いいって。すぐすむし」

「あ……うん」

聞き取れないような音量でもごごと申し訳なさそうにお礼を言う。
萩原が部屋から出ていくと、彰子は小さくため息を吐いた。
背もたれに寄りかかり目を閉じると、もう一度ため息を吐く。

「……絶対あの2人のいたずらだあ」

彰子の脳裏には関原と田島のしたり顔が浮かんでいた。

「いねえ」

すぐにがチャリと戻って来た萩原を、困った表情の彰子が迎える。
正面の席へ萩原が着くと、決意したように拳を握った彰子が、背筋をしゃんとさせて萩原の顔を見た。

「萩原くんあのね、これ、イタズラだと思うの」

「は？」

「愛理ちゃんと玲奈ちゃんの。ミーティングなんて多分嘘つ。萩原くんと私で遊んでるのあの2人っ」

必死の形相で言いたいことを感情のままにまくし立てる彰子。
真剣な眼差しで話す彼女の言い分は、耳には入るが今のところ萩原には理解不能だ。

「え、どういうこと？イタズラ？」

「なんか、萩原くんと私をね、こい……とにしよ……とっ、うっ」

「あ？俺と神谷を、の後なに？」

「うっ……萩原君と私を、く、くっつけようとしてるの」

顔を好調させ、そう言い切った彰子はもはや涙目だ。

「萩原くんも私も全然そんなんじゃないのに、勝手に盛り上がってるの。もう、ばかみたい！」

一度言い切ったならなにやら暴走スイッチが入ってしまったらしい。ぶすぶすと頭から煙が上がらんばかりに赤くなり興奮している。

「こんなことして……もう耐えられないっ！私が大人しくオドオドしてるだけだと思ったたら大間違いなんだからっ。うううー」

「神谷って、意外に熱い性格なのな」

「……うつつ」

遠くを見て唸っていた彰子が正面に視線を戻すと、複雑な表情で見返す萩原が居た。

力んだ拳を解放すると、へにやりと脱力したように、机にうつ伏せになる。

「落ち着きます……なんか恥ずかしいのと緊張とで頭に血が上って……」

「思ったより変な奴だなお前」

「あはは、そうですね……恥ずかしい」

「なんで敬語なんだよ」

「え、や、なんかもう」

「まあいいとして、つまり。関原と田島の陰謀で他の奴らは来ないのか」

「は……うん。だから帰って平気のはず、ごめんね」

「は？なんで神谷が謝んの？ったく。あいつら何考えてんだよ」

「元は、私が悪いんだと思う、紛らわしいこと言っちゃって……」

「紛らわしいこと？」

「憧れっていうのが紛らわしかったみたいで。私、萩原くんみたいになりたいなって、そういう意味で言っただのに」

一気にクールダウンしてリラックスモードに入ったらしく、彰子はいつもより流暢に萩原と会話できているようだ。

「俺みたいに？やっぱ変なやつだな」

「そんなことないよ、憧れてる人、いっぱいだと思う」

「ふーん？そういう扱い受けたことないから全然実感ねえけどな」

「へ、そうなの？」

「ああ、だからなんかソワソワするから憧れとかマジやめろ。……まあその話はもういいや。それよりあれだ……お前のクラスだけ昨日の評価シート出てないんだけど」

「え、あ、さつき光ちゃんに渡しておきました。遅れてごめんなさい」

「出したんないいや。これで鬼畜教師に怒られなくてすむ」

「鬼畜教師って……あはは」

それから昨日今日の合宿の話に移る。

A組のスケジュールとB C D E組は違う内容だったようで、お互いの差異に驚いていた。

話が一段落すると、彰子が出していた筆記用具の片付けを力チャ力チャとはじめる。

だがピタリとその手を止めると、くすぐったそうな笑顔を浮かべて尋ねる。

「うーん……やっぱり気になるから聞いちゃおうかな。……萩原くんって光ちゃんのこと、どう思ってるの？」

「はあ？なんでんなこと。やっぱりあの面倒くさい噂のせいか」

「だって2人が並んでると、なんか目が引き寄せられるというか、お似合いって感じなんだよ……えへへ」

なぜか照れる彰子を、今日一番の呆れた眼差しで萩原が見る。

「お互いにそれはないと思ってる。ホントいい迷惑な噂」

「え……あ、ごめんなさい」

バツサリと迷惑と言い切った姿は、今回のイタズラに対する自分の

姿に重なった。

自分との噂のせいで、相手に迷惑をかけていることが腹立つという感情。

それを感じとった彰子は自分のことを棚に上げて軽率なことを言ったと謝ったのだ。

少しシユンとしながら片付けを再開し、筆箱のチャックをキューツと閉めると、ノートと共に手に持ち、席を立つ。

「神谷とこんな長時間話したの初めてだよな」

「え、うん、そうだね。あのね……私正直、萩原くんのことちょっと恐かったんだけど、今日とっても話しやすくてびっくりしたよ」

そう言っただけでまた照れたように笑うと、小さな歩幅でとことこと歩き、おやすみと一言残し会議室から出ていった。

（慣れれば結構話せる奴なんだな。何で副学級委員に選ばれたのか不思議だったんだが）

4分の1ほど残っていた牛乳を時間をかけて飲み干すと、鼻の下を拭い、席を立つ。

ゴミ箱は会議室の端に設置されていたが、部屋設置のものの使用は許されていなかった。

各階に設置された、燃える燃えないビンカンの分別ゴミ箱に捨てなければいけない。

（めんどくせ）

会議室は2階だ。同じ2階では、先ほどまで勉強していたグループ学習室前の廊下にゴミ箱が設置されている。

電気を消し、廊下に出て目的地へと大股で向かう。
開放された学習室のドアを横切り、ゴミ箱の前に立つ。

——ガサッ

開け放たれた学習室から音が聞こえた。

廊下の明かりが入り込まない真っ暗闇から。

ゴミ箱の上で牛乳瓶を持ち上げた格好のまま、そちらを向いて固まる萩原。

暗闇からの音といえば、とつさに思い当たるのは屋敷での騒動。

（いやいやいや無い。疲れ疲れ）

恐怖の館から離れた安寧の地でそんな心配をする必要は無いと、自分を奮起させ小さく首を振る。

持ち上げていた手から牛乳瓶を離す。

ゴミ箱へまっ逆さまに落ちた瓶は、不安を払うように騒音を立てた。

ガシャンッ！！

「うわあああっ！？」

「うおっ！？」

瓶の音に呼応して暗闇から響いたのは若い男の声だった。
どたどたと畳を踏みしめる足音が廊下へと近づく。

走って現れたその人影は——

「はあ……なんだ……」

ただの月島であつた。

「何してんだお前。1人肝試しか？」

バクバクとおさまらないチキンなハートビートを感じながら平静を装う。

「いや、これ取りにきた。電気は教室の前の方にスイッチあつて面倒だから点けなくていいかなつと。座つてた場所覚えてたし」

忘れ物らしい手元の筆箱を振つて説明する月島。

面倒だから電気を点けなかったというのは嘘だろうと、萩原は瞬時に勘ぐる。

最近猛烈に必要とされている、度胸をつけるための訓練だったのだらうと、そう解釈した。

「ウノの罰ゲームでマジック使おうと思つたら筆箱無いのに気付いてさー」

度胸をつける訓練に見事失敗した証拠に、やけにテンション高く説明をはじめる月島。

ビビると半笑いオーバーアクションで聞かれてないことも明かす、気分はぐらかしタイプだ。

「へー」

そういつたことが丸分かりな萩原が、どうでもよさげに相槌を打つ。そしてさつさと、早足で廊下を歩きだす。

思いがけぬドッキリで疲れがどっと出たらしく、ここで身のない話をする時間も惜しいのだ。

それは月島も同じなようで。げっそりした様子で足を動かしはじめた。

階段を下りる2人分の足音が、静かな空間にタンタタンと響く。

屋敷での一件以来、彼らは恐怖に確実に精神をすり減らしていた。だが今夜、さらに彼らを困惑させる事件が起こる。

それは確かに彼らの求める答えへと近づく一歩なのだが。

疲れきった心と体に追い討ちをかける非日常は、やはり今度も夜に訪れた。

——そしてこの非日常が、彼らの運命を後戻りのできないところへといざなうこととなる。

25話：森の中へ

1階への階段を下りきって数歩、ピタリと萩原の足が止まった。視線は玄関、あとから続いた月島も何事かとそちらを見やる。

玄関の光が届く範囲、外を小柄な人影が走っていた。ポニーテールを揺らして森方向へと向かうそのシルエットに、2人は確かに見覚えがあった。

「トモウトだよね……」

「なにしてんだアイツ？外出禁止のこのクソ寒い中」

不機嫌そうに顔を歪めた萩原が走り出す。

上履きのまま構わず、前だけを見て玄関の外へと走る。

小さな人影を見失わないように暗闇で目を凝らしながら、極寒の夜空の中、全速力で追いかける。

「おいっ」

「……豊？！なんでここに？」

「いやお前がなんでここに居んだよ」

懐中電灯を持った左腕を捕まれ驚き振り返った恵。胸元の右腕が大事そうに、何か白い布に包まれたものを抱えているのが目に入った。

「ちょっと用があつて。すぐ戻るから離してよ」

「用ってこんな所に？ありえないっつの」

押さえられた左手を振りほどこうとするが、萩原は離さない。追い付いた月島はいまいち状況が掴めないようで、2人の手前で立ち止まり躊躇する。

「お願い。ホント大したことじゃないの。ちょっとしたら戻るから放つといて！」

早口でそれだけ言っていると萩原のヒジ辺りを白い布に包まれた物で、カッンと突く。

「ぐっ……ファニーボーン……」

ぶつけると電流が染み渡るような刺激が走るスポット、ファニーボーンを突かれた。痛い、これは痛い。

その攻撃は捕まれた腕を解放するのに充分なものだった。ごめん、と小さく言い残し、森の中へと駆けていく。

「え、ちょ、なんで森?!」

月島が慌てて追いかける。

くそ、と小さく吐き捨てたあと萩原もコンクリートを外れ、森の中へと足を踏み入れる。

「……ついてこないで！」

白い息を後ろへと流しながら、鋭い声で叫ぶように拒絶を表す。だが一分一秒を惜しむように、振り返ることはない。

髪をなびかせ森の奥へと、迷いのない足取りで走る。それを追いかける男2人。

端から見れば鬼ごっこ、いやむしろ女の子が暴漢に襲われて、逃げているようにも見える状態だ。

運動能力の高い恵だがやはりそこは女子。足の速さにそれなりに定評のある男2人には適わない。

何度か腕を捕まれるが、素早く、有無をいわせぬ力で振り払う。湿った雪の上を、苔むした樹の根の上を、鹿のように軽やかに走り続け、数分が経った。

「ちょ、トモウトツ！なにがしたいくらい、教えてよ！じゃなきゃ追いかけるの、やめないっ……て、うわっ！？」

話すことに気をとられたのか、足を滑らせた月島がズシャーッと転倒する。

横っ面を地面に打ち付け、見るも無惨なずぶ濡れ人間となる。

それを一瞥し走り抜けた萩原が前を見ると、恵が徐々に減速するのが見てとれた。

そしてついにはピタリと足を止める。

「はあ……はあ……」

白い息を苦しげに吐き出しながら、左右にキョロキョロと顔を動かす。

焦り、不安、恵には似合わない感情が暗がりの中でも伝わってくる。右か左か、求めているものがどちらか、わからなくなってしまったらしい。

「おい……」

「帰って！……こなくていい！」

裏返った声で排他的なセリフを吐き捨てる。

萩原へと向けられた背中から、精一杯彼を切り離そうとする壁が立ちふさがっているように見えた。

「……どっち？……どうしょ」

混乱は相当なようで、困惑した声が小さくもれていた。

他を排除し、1人で勝手に行動し勝手に悩み、立ち止まって動けなくなってしまうている姿は、ひどく痛々しく見えた。

萩原はチツと舌打ちをすると恵の肩に手を置いた。

にわかに体が揺れ、チラリと恵が振り返る。

「どうしたんだよ。言ってみろよ」

暗がりのなか確かに目が合う。

数拍、沈黙が訪れる。

冷たい森を揺らす風の音が、静かに現状の不気味さを伝えていた。

だがそれも少しの間で、肩に置かれた手から逃れるように、恵が一步前へと踏み出す。

「言えない。ただお願い……豊はここに居て」

恵はそう言つと、決意したように懐中電灯をギュツと握りしめ、左側を選んだ。

ポニーテールをしならせ、10時方向へとターンを切る。

萩原は、彼女の切に願う声色の拒絶を受け、地に繋ぎ止められたよ

うに動けなくなっていた。

だがこの現状、放っておけるわけがない。

危険な森の奥へ、頼りない女1人が行こうとしているのだ。止めないわけにはいかない。

正直どうしてこんな状況になったのか、理解不能なのだが。躊躇いつつも動き出した足が雪の上の小さな足跡に重なる。

「……くそっ」

引き留めることは諦めた萩原、それでも彼に追いかける以外の選択肢はない。

上履きは水浸しの土まみれ。体は冷えきっていて震えがとまらず、鼻が耳が指先が千切れんばかりの痛みを放っている。

男の萩原でも苦行だというのに、さすがに速度は落ちたものの、恵に立ち止まる気配はない。ただ前を向き走り続ける。

再び恵のスピードがぐんと上がり、数十メートルほど進むとようやく走るのをやめた。

何を思ったか懐中電灯を消し、さくさくと雪を踏みしめて歩く。

ゴール地点なのか巨木に手をつき、死界となっている木の後ろ側をそっと覗きこんだ。

「……うそ……ちがっ……」

何かを確認した瞬間、恵はふらついたように一歩後退る。

小さく呟かれた声は落胆、絶望がにじみ出ている。

「……っ！？」

後ろから何事かと覗きこんだ萩原は、そこで見たものに対し絶句する。

「豊、下がって……あれ……葵はっ？」

恵がハツとして振り返る。

萩原は視線を恵の奥から外せぬまま、声を出さず呆然と、ただ首を横に振った。

そんな萩原の姿に、恵は混乱を見てとったようだ。

「あ……大丈夫だよ、豊。だから豊はこの木のそばに居てね」

心配そうな顔で、優しく諭すように恵が囁く。

だが萩原の混乱は治まらないようで、まさに開いた口がふさがらない状態だ。

彼の目に映るものは、それだけの混乱を起こさせるに足るものだった。

彼が見たものは――

しゃがみこんでパキパキと何かを貪る、人の影だった。

26話：湖

萩原と恵が足を止める数分前、左か右かで恵が迷っていた地点。そこに、おぼつかない足取りの月島が現れた。

すっ転んだ時に足を挫いたらしく、早足でしか移動できなくなってしまった哀れな月島。

「……いつっ」

しん、と静まりかえり月明かりもほとんど入らない冬の森。足元さえほとんど見えない。

そのなかでの1人行動は絶望に包まれる。

孤独感と恐怖で押しつぶされそうになる。

地面間近に顔を近付けて時折確認する、2人の行き先を知る足跡が月島には命綱のように感じた。

「……ん？」

しゃがみこんだ視線の先に、今まで真っ直ぐ続いていた恵の足跡は無かった。

少し後退り、続きを求めて辺りを確認する。

「あ、こっちか」

鼻水をすすりながら左10時方向に足跡の続きを見つけ、安堵した声を出したその時、

「っ！？」

ふわりと、冷えきっていた背中が温くなる。
極寒のなか温める術など持たない月島にとって、どう考えてもあり得ない現象だ。

しゃがみ丸めていた背中を勢いよく伸ばし、立ち上がりながら焦り振り返る。

はらりと背中から何かが離れ、雪の上に落ちたのを視界の隅に捕えたが、それよりも月島の目を奪ったものは、

「トモネエ!？」

背後の暗闇の中に見えた、曖昧なシルエット。

さすがに腐るほど顔を合わせているだけのことがあり、月島には光と判断出来たらしい。

「なんで」

こんなところに？

月島の混乱した頭の中がくるくると踊り、意図もせず答えを見つけだそうとする。

——わざわざ極寒の夜にくりだし、鬼気迫る表情をして走る恵。目の前に現れた光。光は先に森に入っていた？

「……トモネエ、1人で森に？」

立ったままその場から微塵も動かない光の方へ向き直り、先ほど落ちた布を拾う。

孤独から解放された嬉しさと、理解不能な現状に複雑な心境だが、月島はとりあえず冷静を装う。

拾い、差し出した布は光が着ていた上着らしかった。

「これトモネエの上着？俺別にいらないつて。そんな薄着を見てるほうが寒いっ……」

話の途中、突如月島が後ろへとよろめき、声がぷつりと途切れる。

「……………」

無言のままの光が、体温を分け与えるように月島に抱きついていていた。

彼女の体は冷えきっていたが、確かな人の体温が、触れたところから月島へと伝わる。

「ちょ……トモネエ？」

上着を持った手を前に出し、時が止まったように固まっていた月島が、さすがに平静さを保てず震えた声を出す。
だが光の返事はない。離れもしない。

「ねえねえ友野さんてば、どうしちゃったの？」

仕切り直して月島が平静を装った声を出すと、肩胛骨あたりに顔を埋めていた光の頭が僅かに動く。

「つてえ！」

鋭く刺すような痛みを首に感じ、月島が視線を右下へと動かすと、光がそつと頭を離れたところであった。

疑問符を頭に浮かべた月島。

光が体を離し解放された右腕で、痛みを感じた首筋を押さえる。

「え？」

しかし押さえた瞬間、急に体に力が入らなくなったようにガクンと膝を折った。

そのまま座りこんだ月島を静かに光は見下ろす。

「は？……立てない」

立ち上がる努力はしているらしいがピクリとも動かない。

しばらく奮闘したあと、目は動かせるようで呆然と光を見上げた。だがその視界すらふさがれる。

ばさりと先ほどの上着を頭から掛けられ、色々な意味で目の前が真っ暗になる。

ふわりと上着からいいにおいがするが、そんなことに気を取られている場合ではない。

残念なことに月島の頭は一瞬気を取られたわけだが。

光は月島の両腕を掴むと、ずるずると引き摺りはじめた。女の細腕で60キロほどのものを、軽々と運んでいく。

首から下の感覚が無く視界もふさがれた月島は、引き摺られていることに気付くまで、だいぶ時間がかかったようだ。

「ちょ……ちょおっ！？……まじかよ」

気付いた時の驚きようと言ったら、まあない。

引き摺られ、着いたのは湖であつた。

木々が捌け月明かりが注ぐ、小さな湖だ。

畔まで引き摺り手を離すと、光は湖を向いてうつ伏せる月島の脇にそっとしゃがみこんだ。

そして被せていた上着を頭から取り去る。

「湖、綺麗でしょ」

「うお」

月島と森で出会ってから初めて口を開いた光。

いきなり耳元でした声に月島は驚く。素でビビる月島に、サプライズ大成功と柄にもなく喜ぶ光。

「マジ？サプライズなのこれ？」

答えず光はくすくすと笑い続ける。

「いや……笑ってないでさ、この動かない状態治してよ。どうなってるのコレ？」

聞く耳持たずにくすくすと笑っていた光だったが、突然ふ、と無表情になる。

月明かりを浴びたその顔は、いつもより青白く冷たい。

体が動かずその顔を見ることは出来なかったが、月島はわかっていった。

様子がおかしすぎる光とこの状況が、ただのサプライズであるわけが無いのだと。

沈黙。

耳に、ちゃぷちゃぷという水の音がやけに大きく届いた。

「トモネエ……？」

「……もう疲れた」

「え？」

「辛くて苦しくて……もう耐えられなくなって……」

気だるげに目を伏せて呟きはじめた光の表情は、陶器のようで温度を感じさせない。

「死んでしまおうと思ったの」

静かに立ち上がり月島を見下ろす光。

「でも……でもね……」

血の気の無い顔は変わらないが、目だけが薄暗がりのなか怪しく光るように、狂気を感じさせた。

「1人で死ぬのは、淋しいの」

地べたにうつ伏せて動けなかった月島の上体が浮き上がる。
再び光が引き摺りはじめたのだ。

「……っ!？」

視界に迫る黒い湖。

顔の真下に水面が迫った時、光の両手が月島から離れた。

「一緒にいこう？」

バシャンと水音を立てて月島の顔が湖へと落ちる。
もちろん彼の体は動かないままだ。

光はそれをわかっていて、本気で殺す気らしい。立ち上がり、傍観の姿勢だ。

がぼがぼと泡を上げて月島が焦るが、抵抗の術はない。空気を早く減らし、死に近づくだけだ。

氷のような水の中へ、意識を残したまま、体を動かせぬようにして突っ込むなど、常人に出来ることではない。

そんな拷問を課す光の表情は冷酷か恍惚かと思いきや、悲しげに歪んでいた。

「ごめんね……ごめんね……」

見ていられないとばかりに水面から顔を背けると、俯いて目を閉じる。

少しして必死でもかく水音が消え、光がうつすらと目を開けた。その時、

「きゃっ?!」

がしり、と足首を掴まれた。おそろおそろ足元を見る光。

「や……なんで……?」

自分の足首を掴む腕と、水浸しの後ろ頭がそこにはあった。

「げほっ……げほ」

水を吐き出し咳き込みながら、地面に這いつくばるのは、確かに月島であった。

「動けるわけない……ひゃっ」

ぐい、と強い力で手首を引かれ、ぺしゃりと地面に座り込む光。
手を引いたまま、むくりと月島が緩慢な動きで体を起こすと、視線
を光に合わせた。

「くっ……！」

再び首元を狙い、顔を近付ける光。
だがそれよりも早く月島が光の肩を強く押し地面へと倒した。

「いつ」

それから両腕を押さえつけ、起き上がれないように足にものしかか
る。
動けず逆の立場となった今、光が諦めたように無表情で月島を見上
げる。
水を滴らせながら見下ろす月島は怯えでは無く、怒りと悲しみが混
ざったような顔をしていた。

「ねえ……なんで……そんなおかしくなっちゃったの？」

「おかしい？」

「どう見ても。そんな風になるまで、何があつたの？」

「……ふふ……ふふふっ」

「トモネエはさ、言わないからわかんないんだよ。勝手にため込ん

で1人でパンクしてさ。バカなんじゃないの？」

髪から滴った水が、渴いた笑い声を上げる光の頬にポタポタと落ちる。

聞こえているのか聞こえていないのか。おかしくなった光は笑い続ける。

相対するように月島の表情は苦渋に満ちたものだった。

「——離れてっ!!」

突如、高く鋭い少女の声が、湖に響き渡る。

タタツと一瞬足音が聞こえた気がして、湖を背に正面を見た月島。向いた瞬間、ゴツと押し寄せる風に目を瞑ると、重い衝撃波を受け後ろへ吹き飛ばされる。

「うぐっ」

「え……!?! 葵っ!?!」

尻餅をついた月島がすぐそばでした声に目を開ける。

月明かりに照らされ目の前に迫っていたのは、驚愕に目を見開いた恵。

「じゃあ……襲われてるのが……!」

恵の背後で、むくりと光が起き上がる。

その気配に急ぎ振り返った恵は、躊躇いもせず手刀を光のこめかみへ向けて放つ。

パシッと光はそれを受け止めると、手放さず噛み付こうと口を寄せる。

だが恵は焦りもしない。

押さえられていない手からカチャと音をさせ、黒い筒状の物を落とす。

そして蒼く煌めく物を居合いのように、光へと向けて打ち出す。

「うぐっ！」

それはザツと光の肩下から肩上进行を斬り上げた。

ジュツと焼けるような音とともに、白く眩しい燐光が血のように飛び散る。

恵の右手が振るったものは、刃が青く鈍く光る短刀だった。

「は……？」

月島の目がぼんやりと短刀に釘付けになる。

視界の奥には肩を押さえ、血のように吹き出す輝きに呆然とする光の姿。

「大丈夫だよ葵。あれは光じゃないから」

「は？」

どこからどう見ても光だ。

そう言おうとして恵の顔を見た月島だったが、喉に出かかった声をごくりと飲み込む。

なんてことない、とでもいうように笑う恵があまりに自然で、場違いなのは自分の発言のような気がした。

からりと笑うその背中へ再び光が飛び掛かる。

ふつと瞬時に笑みを消すと、恵は見返りもせず後ろ手で剣を突き立てた。

引き抜くと、白くまばゆい燐光が辺りを照らしながら吹き出した。

「光のばか……よわむし……！」

笑顔から一転、振り返った恵は怒った様子で光と対峙する。

光に対して一言申さないと気が済まないといった様子だ。

刺された箇所を押さえながら憎々しげな目つきで光がにらみつける。そんな光をビシリと指差すと、恵は大声を張り上げた。

「こんな弱っちいお化けに憑かれるなんてバカ！悔しくないの!？」

なんだか突拍子もないことで怒っているようだ。

「……お化けに憑かれる? どういうこと?」

よくわからない恵の言い分に、光ですら食い付く。

「むうー、光もバカだけど……バカ幽霊! 自覚ないだけでもう死んでるんだよ! 今、人にとり憑いちゃってるんだよ!」

「死んでる? 私が? うそでしょ。生きてるじゃない」

「それが生きてないんだってば……ちゃんと顔は見た? 自分の顔じゃないと思うよ?」

「なら何でこんなに辛いのか? 死んだらそんなの感じないでしょ。自由になるはずでしょ? だから死にたいのに、死んでるって……ふふっ、冗談やめてよ」

「うつ……それはそういうモノだとしか言いようがない。あのね、お姉さんは確かに幽霊で、無意識にとり憑いちゃってて」

「ふふ、おもしろーい」

「しかももう完全に悪霊なんだよつ。だから悪いけどもう、かえつてもらうね！無理矢理にでも！」

短剣を構えなおし悪役のようなセリフを放つ恵。

一瞬のうちに、問答無用で横一閃の一撃を光へと浴びせた。よろける光。躊躇わずさらに短剣を振り上げ、肩口から斜めに体を切り裂いた。

「うつ……」

その一撃で立っていることさえ出来なくなったのか、ふらふらと地に伏せる。

恵は構えの姿勢を解き、足元に落ちていた鞘を拾い上げる。カチリと刀身を仕舞い、倒れた光のそばにしゃがみこむ。

「お姉さん、もう辛くないでしょ？すっきりした気分じゃない？」

散々斬りつけておいて、恵が外道のようなセリフを吐く。あれだけの目にあわされてスッキリした気分になるなど、Mに目覚める他はない。

「……うん。もう辛くない……」

目覚めてしまったのだろうか。

毒気の抜けた穏やかな顔をした光の体は、全体が白く滲むように発光している。

「うん……おやすみ」

スツと手を伸ばし瞼を優しく閉じさせる。

白くぼんやりとして体にまとわりついていた薄明かりが、ふわりと天へ浮き上がる。

蛍のような光の粒を散らしながら、幻想的な光景をつくりだす。ついには夜空に溶け入るように消えてしまうまで、恵は静かに見つめていた。

27話：こんにちは非日常

月島は絶句していた。

尻餅をついた体勢のまま硬直していた。

目の前で起きたことに、頭も体も置いてきばりにされていた。

夜空を見上げていた恵が、ふっと地に視線を落とす。

「よい……っしょ」

小さな唸り声を上げながら恵は、地に伏す光の肩の下へ体を入れると、背負うように立ち上がる。

小さな体にスマートとはいえ光は重いようで、足元はふらふらとしていた。

「あ……代わる？」

その光景に男として放置できないものを感じたのか、月島がやっとのこと言葉を発する。

「わっ！ああんた、葵か！大丈夫？」

「……うん」

「顔が死んでるよ」

「俺運ぶよ」

「え、あ、うん。ありがとう」

恵から光を受け取り、背負う。

思っていたより軽い体は動かず、冷えきっていた。

だが零では無い確かな人の体温と、微かに首をくすぐる吐息が、生きているのだと月島を安心させる。

だが言葉に出来ない感情が月島の体のなかを駆け巡っていた。

混乱、恐怖、そういったものがごちゃ混ぜになり、なぜだか少し涙腺が緩んでいた。

何が何だかわからない。

「豊どこかなー」

「……あ、そういえば」

「危ないから待っててほしいって言うてるのに聞かなくて、邪魔だからついてくるなー！ってすごい勢いで拒否しちゃって」

「その程度でよく言うこと聞いたね」

「うーん……ちょっと言い過ぎちゃった……怒ってないといいな」

どうやらしぶとくついて来る萩原を振り切るために、怒鳴り散らしたことを気にしているらしい。

あくまで何事も無かったように、いつも通りのノリで話す恵。

夜の暗い森の身をきるほどの寒さも、意識の無い光も、異常なことなのに微塵も動じず話す彼女の様子に、月島は平静を取り戻しつつあった。

「ゆたかー帰ろー」

犬でも呼ぶように暗闇に呼び掛ける。

もう一度呼ばうと息を吸い込んだ恵の横顔に、白いライトが当たった。

懐中電灯の光だった。

「……終わったのかよ」

「おまたせしましたー」

「お前さ……」

「説明はあとですから、早く森出よ？みんな脳がコーン状態だからだいぶ元気だけど、この気温の中長いこと薄着で居たら危ないよ。……バカ光が一番危ないわけだけど」

「だね。だいぶ冷えきってる」

「だから帰ろつ、あ、私懐中電灯係！」

萩原に走りよると、ヒョイツと手の中から懐中電灯を奪い取る。

そして軽い足取りで雪道を跳ねるように数歩。

だがピタと立ち止まり、さくさくと萩原の前まで戻ると、ぴよっと勢い良く顔を見上げた。

「さっきは言い過ぎました……ぜんぶ、思ってもないことです」

「は？」

「ここに居るばかり！豊なんか大嫌いだーっ！っていうの、勢いの産物なの。うそです。嫌いじゃないです。本気にしないで」

「別に気にしてすらないんだが」

見上げる恵を見向きもせず、どうでもいいという風に応じる。

恵はそっか、と小さく呟き、もにもよとゴメンねのようなことも呟くと、先陣を切って再び歩きだした。

その後を萩原と月島が続く。

「萩原さん、なに言われたんすか。素直に足止めちゃうほどショックなことだったんすよね？」

「っせえな。別になんもねえよ。勝手に謝ってただよアイツが。……ていうかお前だよ、何があったんだよソレ」

月島の背で意識を失っている光を顎で指す。

「何があったのか正直さっぱり。混乱中。でもトモウトがあんな感じでいつも通りだから、合わせて落ち着いてるだけ」

「俺の方もよくわかんねえこと起きてよ、何がなんだか」

2人が前を見れば、明るい蛍光灯で道を照らす恵の背中。

「あいつ何なんだろ」

「森出たら説明してくれらって」

灯りに導かれて感覚の無い足を進める2人、今は早く森を出ることだけを考えよう、と自分に言い聞かせた。

寮2階、第一会議室。

男女4人が貸し切って座っていた。

言わずもがな、友野姉妹、萩原、月島である。

4人は冷えきった体を風呂で温め、自由に着用可らしい貸し出し浴衣に身を包んでいた。

学生寮だというのに、なぜこんなものがあるのだろうか。実は立派な施設なだけあり、一般開放もしているからだったりする。

「ごめんなさい」

第一声は光の謝罪だった。

意識を失っていた光であったが、森の中で帰路に着く最中に目を覚ました。

起きた瞬間、ごめんなさいと小さく呟き、月島に降ろすように言うのと沈黙したまま歩きだした。

足元がおぼつかず、無理しないで頼れと言われても、首を振り俯いたまま歩き続けた。

今も俯いたまま、謝罪を述べたあと再び口をつぐんでしまった。

「光、自己嫌悪モード」

「……説明、してくれるんだよね？」

「うん。説明しても納得してくれるか微妙なんだけど……」冗談のつもり無いから、怒らないでね」

そう何やら必死の前置きをすると、恵は腹を括ったような顔をして、いきなり質問を投げ掛けた。

「——2人は幽霊って、信じてる？」

とんでもない質問だった。

「「……は？」」

「わ、思った通りの反応。居るって信じてくれないと、話が進まないんですよ」

「そっぴやさつきも言ってたね。取り憑いてるだの取り憑かれてるだの」

「うん。光に幽霊がとり憑いてたの。うう……この発言、電波ちゃんだと引かれても仕方ないだろうな」

「真面目に言ってるんだろ？なら引かねえよ」

「……よかった」

二人は恵の言葉を素直に受け入れようと努力していた。

「実はこの森ね、幽霊がたくさん居て、知られざる心霊スポット！みたいな感じなの」

「富士の樹海みたいなもんか」

「うんうん。えっとそれで……私たちがいわゆる靈感があるタイプでして。森から少し離れてても霊の気配やら声が、テレパシーみたいに伝わっちゃってて。それがすっごい体に悪影響で」

「体に悪影響？頭痛？吐き気？」

「そういうんじゃないで、なんというか、メンタルにくるの。幽霊の声が頭に響いて……」

説明がうまくいかず、眉間にしわを寄せて恵は困った表情を作ると、ここまで無言であった光がわずかに顔をあげる。恵がちら、と顔を窺うと、引き継いで話しはじめた。

「頭に響く霊の声に耳傾けて同調しちゃうと、霊に取り憑かれるの」

「そう。催眠術と同じ手口ってかんじ。光は疲れてメンタル弱ってたから影響受けやすくなってる。典型的な朝方人間で夜めっちゃ弱いし。それで取り憑かれた光は森に行っちゃった。……死んだことに気付かないで、一緒に死んでくれる人を探してる霊だったみたいだね？」

「うんそう。……弱いけど完全に悪霊だった。人間を動けなくさせる力があつた。動けなくさせて水のなかに引き込むの」

「憑かれてた時のことって覚えてる？」

「なんとなく……ちゃんと覚えてないけど」

「そつか。光が森に居たワケはそんな感じ。……2人とも、大丈夫？」

萩原と月島の難しい表情を見て、心配そうな声色で恵が問う。

「ああ。理解できてないわけじゃない……はず。ただ飲みこむのに時間がかかってるだけだ」

次元が違う話すぎて、飲みこめるわけがない。

「そりゃそうだね。信じれなかったら夢ってことにしておいて」

「夢にはできそうにないから、その調子でトモウトが……色々やってたことについてもくわしく」

「おけ」

と言ったものの抵抗があるのか、一度静かに深呼吸する恵。

「私たちが神社の子って知ってるよね？たまに私たち、バイトでお被いとかやってるの」

「お被い……除霊？」

「そうそう。で、さっき私が使ったのはその仕事道具。除霊の力を込めた短剣。人に霊がとり憑いた場合は、斬りつけても霊だけにダメージを与えられる除霊道具。何かあったら困るからいつも携帯してるんだ、一応」

「アレ、豊も見たの？」

「なんか光ってるヤツだろ？ああ。お前がずっとこけてたときにな」

「もう一体お化けが居たんだよ」。光が擦り傷作った木の枝に血がついたらしくて、そればくばく食べてたお化け。豊の前ではその除霊に使ったんだよね。その幽霊、光の気配がまざっちゃってて、本物と迷っちゃったんだ」

そこまで言うと、改めて月島と萩原の顔を交互に見る恵。

「説明こんな感じで大丈夫？もう誤魔化しようがないから、素直に言っただけ。豊も葵も、見えちゃったわけだし」

「見えちゃった？」

「豊が見た女の人、幽霊だったんだよ。葵が見た剣の青い光は霊能力だし。普通じゃ見えないはずのものなのに……2人はそれが見えちゃったんだよ」

「それってつまり……」

「2人には靈感があるってこと」

萩原と月島が呆然とした表情になる。

自分たちに見えざるものが見えてしまっていた。

森の中に1人ぽつんと居た、斬られて消えた女。青く発光する短剣。

「へへ、でも怖がらなくて平気だよ。今までだってお化け見たって気付かなかったでしょ？普通にしていれば問題なしだよ」

「でもお前ら、声が聞こえるとか言ってたけど。俺別に聞こえたとねえし」

「私たちは霊能力マスターだからね。霊媒体質つてのもあるし」

そう言つてにつと明るい笑顔を浮かべる。

「へへっ、説明しろーっていうから包み隠さず喋っちゃったけど、聞くだけ損だったでしょ？やーい、2人ともビビってるー。もうお開きでいい？時間けっこうヤバいし」

全員が時計に目をやると、たしかに就寝時間が近づいていた。

11時に布団に入っていなければ、ここに来てまでも極寒3分間閉め出しの刑だ。

そんなもの彼らは反吐が出るほど味わっているというのに。

帰らなくてはと全員が立ち上がった。

28話：保健室カウンセリング

「月島」

恵、萩原に続き部屋から出ていこうとしていた月島の背に小さな声が届く。

振り返れば、俯いて足元付近に視線を漂わせる光の姿。

「なに？」

「それ」

「ああ、さっきこけてひねった」

光が神妙な顔つきで指差す先には、浴衣の裾からのぞく月島の足首があった。

青く腫れ上がったそれは酷く痛々しい。

「ひねったって……」

「いやだわー、こんな所の怪我に気付くなんて俺の下半身ばかり見てたんでしょ。人生上を向いて歩こうぜ」

「その足で私運んだの？」

月島的话题を脱線させる為の茶化しも虚しく、光の表情はますます痛々しげに歪む。

「……腕かして」

問答無用といった風に月島の腕をつかむと、自分の肩にひっかけた。

「いやいや！支えてもらわなくても1人で歩いてたでしょ？そんな重症じゃないから」

「急がないと時間ない」

「いや充分間に合うよ。これから仮眠室まで5分かかんないし」

「保健室で湿布もらわないと」

「だから別にそんな重症じゃ……」

ドアを開け、支えながら歩きだした光の顔を見た月島が口をつぐむ。横一文字に口をひき結びふるふる震えながら、光は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「あー……うん、よし。俺を保健室に連れてってっ」

甲子園に連れてって、のノリで何も見なかったような笑顔を作って月島が言う。黙ったまま光は小さくうなずいた。

仮眠室と同じ地下一階に、即席保健室はある。

保健の先生と最低限の薬やベッドが揃う小さな個室だ。

何となく気まずい空気のなか、肩を組んだ2人が早足で階段を降りていく。

3分程度で目的地に着いた。

「失礼しまーす」

ノックをして部屋に顔を出すと、先生は外出中のようなだった。
机の上にあるコップ一杯の紅茶にティーバッグが入れっぱなしのため、緊急出張治療中なのかもしれない。

「居ないし。勝手に湿布借りていいよね」

遠慮なしに部屋に入り込んだ月島が、転がっていたトランクを目に留め、蓋に手をかける。

「多分こん中つしょ。借りまーす……うわっ！」

慌ててボタンと蓋を閉める。

「間違えた。先生の私物だった。魅惑の紫フリル。ぐへへ、むしろ湿布にしてやろうか」

そんな月島渾身の女子にとって「マジサイテー」トークにも、光は張り合いの無い態度で、キョロキョロと湿布の行方を探していた。

「落ち込んでも頑固な部分は残るのに、ツツコミ要素は消えるんだ」

面白そうな声色で月島が言う。

机の下にあったもう1つのトランクから、湿布を発見した光の反論はない。

その代わりに顔を上げて月島の後ろ姿を見た光は、ひっと小さく息をのんだ。

「月島、首どうしたの？」

首が赤く腫れているのが見え、光が駆け寄り近くでみたそれは、噛まれた跡だった。

「やだ、なにこれ……歯形？」

「トモネ工覚えてないの？」

「覚えてないのって……それってもしかして」

「あーあー、まあ、気にすんなつ。気にしたら負けだ」

にかつと親指を立てて爽やかな笑顔を浮かべる月島。

そのあつけらかんとした姿に、光は俯き閉口してしまう。

そんな再び暗い表情を浮かべる彼女の様子に、月島は静かにため息を吐いた。

「もしかしてこういう時トモネ工って、話しかけないで放っておいて欲しいタイプ？ 普段なら落ち込んだ時でも、周りに迷惑かかると思っで明るくしてるでしょ？ だから盛りたてようとしてんだけど、放っておいたほうがいい？」

ついにしおらしい光に耐えきれなくなつたのか、月島が直球を放つて尋ねる。

「……気を使わせてごめん。ただ私、みんなに酷い迷惑かけたのに、特に月島には……。それなのに何も言わないから」

「人に迷惑かけたのに、怒ってもらえないのが逆に辛いつてこと？」

「うん」

「まるでMのような発言。残念だけど俺怒ってないし、怒る気ないし。あれだね、自分的に誰かに迷惑かけたーってなるとすごい落ち込むんだね。そういうのすごく気にする性格っぽいもんね」

「……………」

机を挟んで奥側にある椅子、すなわち先生が診察する側にドカリと腰掛けた月島。

座れば？と視線で訴えると、光は患者側の席に静かに腰掛けた。

「トモネエなんでも自己解決型じゃん。他人に迷惑かけたくない症候群みたいな」

「迷惑かけたくないっていうのは確かにあるけど…………たぶん、それだけじゃない」

「へえ？他に理由あんの？」

「え…………いや」

「言ってみ言ってみ」

ちらりと上目遣いに様子を窺うと、背もたれにだらしく寄りかかり、リラックスした月島が目に入る。

机上に視線を戻した光は、ぽつぽつと話しはじめた。

「…………私、基本、何やっても不器用でうまくいかない要領の悪い人間なの。けど、ちゃんとやれないと恥ずかしいじゃない。うまくやらないやいけないじゃない」

「うん」

「恥ずかしい思いしたくないってそればっか考えて。……そのために色んなこと、予習するの。ただの見栄っ張り。失敗して誰かに迷惑かけるのが嫌なのは、そういう気持ちがあるから。自分が駄目人間だってさらして、迷惑をかけるのが辛い」

「うん」

「本当に私ってダサい、ちっちゃいやツ。何も出来ないくせに見栄だけは張る、臆病者なの」

「そうかな？」

「そうだよ。月島はわかんないのかもしれないけど。……だから自分の失態で迷惑かけるのが嫌な理由は、綺麗事だけじゃ無いの」

「ずいぶんネガティブに言うね。見栄っ張りで臆病者で、そこで諦めるやつだって居るのに、トモネエはそこで頑張れる奴なんですよ。なんでも完璧にしてやろうって頑張れる。俺はトモネエのそういう所、好きだけど」

一瞬ピタ、と空気が固まる。

俯いて机上のティーカップを見ていた光が、目を丸くして顔を上げる。

だがさらりと普段言わないような、普通なら言えないようなことを口から放った月島は、飄々とした様子だ。

「とりあえずみんなトモネエのこと責める気は無いと思うよ。モヤ

モヤしてても自分の中で決着つけるしかないね」

「え、うん……」

そう爽やかに笑って言った月島に、トモネエはぱちぱちと瞬きをし
ながら勢いに押されたように肯定する。

「トモネエはもつと人に相談とかしたほうがいいよ。今みたいに溜
めると自己嫌悪に陥るんだから。それで自分を追い込んで悪循環に
なるんでしょ。いやでも、言ってくれてよかった。そうやって話し
てくれると俺も安心するし……」

何やら僅かに表情をかたくすると、月島は話を途切れさせ、黙って
見返して聞いていた光から視線を外す。

「……まあトモネエは、たまに誰かに相談してパーツと気晴らしし
ないと、駄目だよなっていうアレだよ」

意味も無く、うんうんと頷きながらそう言つと、ぱりぱりと頬をか
いて口を閉ざす。

再び沈黙が広がる。しかも次第にそわそわとした空気が広がる。
と、いつもの

「あー……なんか……はあー」

慣れない『自分暴露話』をした光が居たたまれなくなってきた
のだ。

俯けた顔を手のひらで覆い、絶望といったタイトルがつかんばかり
のボーシングだ。

「うわまた自虐スイッチ入ってる」

「……悪かったわね」

自分の性分を暴露してしまった恥ずかしさやら後悔やらと戦う光。
その前で、月島はいきなりパシッと膝を叩くと、ビシリと人差し指を光の方へ向け、アゴを反らせ見下した嘲笑を浮かべる。

「おいダメ女！その手に持つてる湿布を跪いて俺の足に貼れい」

いきなりの変わりように、手のひらを外し顔を上げてキョトンとする光。

「え？」

「トモネエMなんでしょ？こういうプレイで元気出るんじゃないの」

「な……でるか！Mだといつ肯定した！」

湿布を月島に投げつけると、ピシンといい音を立てて顔面にヒットした。

「やだやだ、元気出てるじゃない。体は正直なんだからー」

「なわけあるかつ」

机ごしに身を乗り出して月島のむなぐらをガシリと掴み、激しく揺らす。

「あんたたち、何してるの!？」

ドアを開ける音ともに、保険医の焦る声が響く。
カツアゲ現場のような2人がそちらを見れば、信じられないといった驚愕顔で彼女は立っていた。

「就寝時間、過ぎてるよ！」

「「うええっ!?!」」

光があわてて胸ぐらから手を離すと、机を回り込み月島を引っ張り立たせる。

そして言葉もなく照らし合わせたようにガシッと肩を組む。

光に支えられながら月島は片足で飛び、素晴らしいコンビネーションで移動しドアを開け出ていく。

「怪我して保健室居たら長引いちやっ たって言うときなさいねー」

二人三脚のような後ろ姿で去っていく2人に、ドアから顔を出して保険医が呼びかける。

ドアを閉めながらクスリと彼女は笑う。

「さすが高校生甘酸っぱいわあ」

29話：おとなり双子姉妹

合宿は終わった。

閉会式の後、バスへと生徒たちは押し込まれ、すぐに発車した。

帰りのバスでは特に仕事も無いので、副学級委員の光も早めに乗り込む。

「ひかりー私窓側がいい」

「はいはい」

あくびをしながら恵が後から続き、隣同士になる双子姉妹。席に着きしばらくしてバスが発車する。

二人はとくに話もせず恵は窓の外を見ながら、光は背もたれに寄りかかり、ぼーっとしていた。

「……………」

「……………ねえ恵」

光は前を向いたまま、窓の外を眺める恵へ呼びかける。

「なにぶーたれてんの？」

「……………ぶーたれてないよ」

「……………そうね。でも、なんか言いたいことがあるの我慢してるでしょ」

また沈黙。

窓を見たままの恵は光のほうを見もしない。

「まあ言いたくないならいいけど」

「だって……光だって私に言わなかったじゃん」

「へ？」

「見てらんないくらい落ち込んでたのに、葵とふたりで話してすっかり元気になってるんだもん。私だって心配だったのに。すごい心配してたのに」

「……前言撤回。あんた寝ぼけてるだけでしょ。素直すぎて気持ち悪い。話しかけてごめん。もう寝なさい」

「私はいつだって素直ですー」

「はいはいそうね。でも素ならそんなこと絶対言わないからねあんたは」

「光は私より葵のが大事なんだ。好きなんだ」

「ちょっとそのノリ怖いんだけど」

「葵のことが好きなんだー。大好きなんだー」

「わかった。謝ります。心配かけてごめんなさい。恵に相談しなくてごめんなさい」

「ふん。光が……葵を好きなんでこと、とつくに知ってたけどね」

「ちょッ!？」

窓を向いたままの恵のほうへ身を乗り出して声を荒げる。

そして前の席に聞こえていないか、通路に体を出し覗き込んで確認する。

前の席の2人は防音用に持参を許されたヘッドホンを着けて眠っていた。

「め、めぐみいいッ!」

顔を赤くして窓を見たままの背中に歯を食いしばりながら怨嗟の声を浴びせかける。

だが恵はぴくりともせず小声で言葉を続けた。

「私なんか……やっとああ好きだったのかーってわかったのに……」

「え?」

「もうムリだよ……あんなかわいい子と噂たっちゃってるんじゃないあ……」

「え? あんた、好きな人いるの?」

「……………」

「恵?」

「……………すー……………」

「寝ちゃった。もう。……なんかずるい」

窓側へと乗り出していた体を背もたれへと戻し寄りかかる。
ほてった顔を落ち着かせるように目を閉じ、静かにため息をつく。

「別に月島のことなんて……好きじゃないし」

心を落ち着かせるつもりが典型的な素直じゃない子のセリフを言う
てしまい、余計に居たたまれない気分になる。

（……まさか私たちがこんな気持ちを持つ日が来るなんて。らしく
ない。ああバカみたい）

30話：お屋敷探検！@地下

学校に着くとそのまま流れ解散となった。

駅方面との分かれ道で谷と別れた月島と萩原は、疲れた背中を晒しながらぐだぐだと歩く。

「食べ放で米類とった？」

「あんまとつてねえ」

「米炊かなー。今日お前当番ね。俺おとい食事当番やったから」

「は？バイキングのセットしただけだろ」

ここで月島のメール受信バイブが唸り、会話が途切れる。携帯電話をいじりだした彼が遅れがちになり、そのまま別行動になると思いきや、萩原が歩調を合わせ再び会話がはじまる。

「今日と明日、家の探索しね？」

「……あー、うん。そうだね。あんな話聞いちゃね、居ると思っちゃうからね」

自分たちには靈感がある。

見えざるものが見えていたというのだ。

屋敷で何度かあった凶器持参の女たちとの戦いも、あらぬものだったかもしれないと、彼らは不安を感じていた。

「でも家探ししてなにか解決すると思う？」

「わかんねえ。でもこのままじゃ気持ち悪いだろ」

「つかマジで幽霊だったらどうすんの？除霊って俺たちで出来るの？」

「この前はなんとかあっただろ」

「お前何もしてないけどね」

「……やる気ねえなら俺1人でやる」

「やらないとは言ってないってば。俺も正直このままじゃ安眠できない」

面倒くさい問答を経て結局家捜しの決行が決まったようだ。

お化け屋敷の疑いありの家へと戻った彼ら。

昼ごはんを食べてしばらく休むと、のそりと活動をはじめた。

懐中電灯を手に取り、玄関ホールの階段前へと向かう。

現在時刻は午後3時だ。屋敷の中は廊下こそ窓から光が入るが、玄関ホールなどは太陽が届かず真っ昼間でも暗い。

「地下か2階かどっちにするか……」

「個人的には地下のが嫌だなー」

「地下から行くぞ」

「嫌と言ったのに嫌がらせかい」

「俺は苦手なものは先に食べるタイプだ」

「それは俺もだけど。やっぱお前も地下のが嫌なのね」

懐中電灯で足下を照らしながら、螺旋状の階段を慎重に下りていく。地下ということで、光の入らないジメジメした状況を覚悟していたが、空気は乾燥していた。

おかげで寒さも一塩なのだが。階段を下りきり辺りを照らす。

「円形の廊下だな」

左右、照らした先にはぐるりと細長くカーブを描いた廊下があった。

「ふんふん。で、前方にはドアがありーの」

「ありーのからのー？」

「入りーのー！」

恐れをテンションで誤魔化す2人。

意を決した月島がバンツと観音開きのドアを開ける。

真っ暗闇の中、懐中電灯を持つ腕をいっばいに伸ばし、せわしなく辺りを探る。

「異常なし。ホール内には椅子も机も無い。広いなー」

本当に広い空間らしく、わんわんと月島の声が反響する。

「お……」

萩原が正面方向に光を向けると、舞台があり、壇上には黒い大きな物が乗っていた。

「ピアノじゃん、しかもグランド」

月島はグランドピアノに駆け寄ると、舞台の下からライトで照らしまじまじと見る。

「ピアノが壇上にあるってことは、講堂かパーティーホールって感じが？」

「これ絶対相当お高いピアノだ」

「わかんのかよ」

「いや適當。そういやさー、最近すごい中毒なピアノ曲あるんだよね。タイトルとかわかんないんだけどなんかニユースの主題歌でさ」

「テレビ見てねえから全然わかんね」

「俺も谷ん家行ったときに2回くらいしか聞いてないんだけどさ。聞いたらすぐチャンネル変えちゃったし。すっげいい曲なんだよ！」

「なんでそんなテンション上がってんだよ」

「ピアノってなんかテンション上がんない？」

「いやそれお前だけ。そんなならその曲弾いてみるよ」

「ひゃっほー！」

珍しくイキイキとした様子を見せる月島が、壇上によじ登りグラウンドピアノのカバーをむしり取る。

ホコリが舞うのも気にせず床に放ると、ピアノの蓋に手をかける。手元を明るくするため、バランス良く鍵盤の縁に懐中電灯を設置する。

ポロンポロンと音を鳴らし確かめると、最初の音を探す。

見つけると左手も鍵盤へ乗せ、スムーズに鍵を押し弾きはじめた。スピード感のある長調をフォルテで力強く奏でる。

彼の性格に似合わず素晴らしい実力だということは、誰の耳にも明らかだった。

信じられないことに弾いている姿は、いい所のお坊ちゃんに見える。

「冗談で言っただのにあっさり弾けんのかよ。あー……聞いたことあるかもな」

実は月島、1年生のころ音楽選択だったりする。

意外にも芸術は全体的に好きらしい。

一通り弾きたい曲を弾き終わり満足したのか、鍵盤から手を離すと席を立つ。

その背を光に照らされハッと振り返ると、いつの間にか壇上に上がっていた萩原が歩いてくるところであった。

懐中電灯を持っていない方の手に何か箱を抱えている。

箱をガタンと舞台に置き、ライトで照らしながら楽器ケースらしい

その蓋を開ける。

「向こう散策してたら楽器倉庫みたいのあって、いいもん見つけた」

「お、ヴァイオリン。……はっ！デジャブ……金曜ロードショー……セイジくんだ！」

「ああ、谷ん家で見たやつか。月島あー、コンクリートロードはやめた方がいいと思うぜ」

「やなやつ！やなやつ！やなやつ！耳すまいいよね耳すま。カントリーロード弾きなよ」

「そんなら海に見える街のが弾きたい」

「魔女宅？いいね。でもやつぱあれ弾いてよパツヘルベルのカノン」

「ヴァイオリンといったらコレって感じの曲だな」

上機嫌らしくオーダー通りに弾く気になったらしい。

調律は月島のピアノ演奏海中に済ましていたらしく、優雅に奏ではじめた。

様になっているが、普段の性格を考えると彼もまた全くもって似合わない姿だ。

しかしピアノはまだしも、ヴァイオリンの確かな腕があるなど、もしかしたら彼はリアルお坊ちゃまだったのかもしれない。

「さらりと弾けちゃうんかい。完全にエリートキャラの絵だよこれ」

懐中電灯係と化した月島がしみじみと言う。

彼らは本来の目的をそっちのけで、意外な特技の披露を楽しんでいるようだ。

うまい、という一言のみの、拍手も起きない演奏会が終わる。

しかもチップの代わりに手渡されたのは懐中電灯だ。

「クリスマス会出て演奏したら？」

「ピアノとヴァイオリンでか。軽音楽部の奴らのなかで俺らだけ貴族ミュージックだな」

「友野姉妹にボーカルやつてもらおう」

「ねーよ」

もちろん本気でクリスマス会に出る気など毛頭なくただの冗談だ。

萩原はヴァイオリンの箱を閉じると、舞台の縁へ移動し足を垂らして座った。

「友野姉妹と言えば……最近俺ら周辺で噂立ってんの知ってるか」

「この家のことじゃなくて？」

「女関連」

「え、マジ？」

「双子と藤井と関わること多いだろ。ちょうどよく男3女3だから、くつついてると思われるんだってよ。他のクラスの奴に」

「へー、余計にモテないわけだ」

「お前は昨日のでA組にすら疑われたんじゃないか？」

昨日ので、とは月島と光が肩組んで就寝時間に遅れたことである。

「あー、やっぱりそう？」

暗闇のなか椅子に座り、蓋を閉じたグランドピアノに肘をつく月島の態度は飄々としたものだ。

萩原は振り返り、記者会見のカメラの変わりとはばかりに月島の方へとライトを向ける。

「お前、トモネエのことどう思ってたの？」

「うおつまぶしっ」

眩しさに顔を歪めると背けてライトから逃れる。

それでも追いかけてライト攻撃を続けるので、手のひらで顔を覆う。

「なんでトモネエ？昨日のでお前も勘違いしたとか？」

暗闇でのライト攻撃が予想以上のダメージだったのか、もはやライトに背を向け顔を覆っている月島。

質問には答えず萩原は楽しげに背中光線を当てるばかりだ。

数秒間を置いて観念したようにため息を吐くと、月島はポツリと呟いた。

「ああ、気づいてんのね。……ええまあ好きですよ」

萩原の頭の上に感嘆符がピコンと飛び出す。

「えっ！」

「何その素の驚きかた！気付いてて聞いたんじゃないの！？」

「いや全然」

「はああっ！？てかお前はあれっしょ！」

仕返しとばかりにピアノの蓋に乗っていた懷中電灯を萩原へと向け、引きつった笑顔の月島が裏返った声で言う。

「トモウト！」

「は」

「好きっしょ？おとといの勉強会の夜も氣遣って退場してやったんだぞ！へっへ、言わないでいてやっただけで気付いてたんだぞー」

「いつから」

「文化祭前とかそのへんだっけな」

「マジかよ」

「はっは！まあ言うに言えないよねあの2人。そういうのからつきだし」

「まあな。……でもお前試しに言ってみたら？勢いとかで。勢いで

行動すんの得意だろ」

「は？冗談じゃない。後々キツすぎるっしょ。特進はクラス変わんないんだから」

「フラれんの前提かよ。へたれ野郎だな」

「おっまえにだけは言われたくないわー、マジないわー。むしろお前が行けよ、成功するって俺が保証してあげるから」

「何より役に立たない保証だな。つかお前はいつから好きだったんだよ」

「いつだろうね」

珍しく恋愛話になったかと思えば、なぜか暴露大会と化したお屋敷調査タイム。

地下での会話は日が落ちる直前まで続いた。

31話：お屋敷探検、最終回！@2階

探索最後の日。

この日、彼らは洋館の真実を知る。

幽霊は居る、霊能力は存在する。

そんな非日常を知り、認めてしまった彼らにはもう、全てが見えてしまう。

洋館が必死に隠してきた真実だというのに。

日常に埋もれさせていればよかったのに。

合宿のおかげで完全代休となった翌日土曜日、屋敷の朝は遅い。

夜は不安からなかなか寝付けないわりに、寝てしまえばそれっきりで、目覚ましもかけずに住人は眠り続けていた。

「……はっ！」

突然バサッと上半身を起き上がらせると、目を見開いて固まる萩原キヨロキヨロと辺りを見渡し携帯電話を見つけると、側面のボタンを押して時計を起こす。

11:38

「はー……メシ」

コタツ布団から抜け出しキッチンへ向かう。
流し台から茶碗を取り山盛りに飯を盛る。

冷蔵庫のタッパーから唐揚げを取り出すと、ご飯のなかに埋め込んだ。
だ。

ご飯の匂いに釣られて起きたらしい月島が、続いてキッチンに入る。
彼はたんまりのご飯に春巻を差しこんでいた。

目をしばつかせながらコタツに入り込み、昼飯を食べる。

「食べおわつたらよ」

「あー？」

「2階探索すんぞ」

「あー」

それだけ言うと、髪は寝癖まみれで目の据わった荒んだ彼らは、わびしい食事を続ける。

もちろんその時間はすぐ終わり、米一粒残さずきれいに平らげた。
茶碗に水を張るついでに顔に水を引っかけ、目覚めを促した。

「目がシャキ！」

「おら懐中電灯」

「今日で終わらせるんでしょ？探検すんのはいいんだけどさー」

「何も見つからなくて何もわからなくても、何かわかってても、それでどうすんだってか？」

「うんそんで、この家に留まるか留まらないか」

「先にそっちの結論言つなら、俺は高校卒業までこの家を出ていくつもりはない」

「おお、出てくつもり全くないんだ」

「もし今回探索して何もわからなかったら、次に変な奴が来たときにお前らなんなんだって聞き出す」

「正気？あいつら生け捕りにして聞き出すの？2人がかりで来られたらどうしょもなくない？」

「あいつらをどうにかしないと、ここには住めない。頭使って対策考える」

「ずいぶん前向きなことだ」

「で、もしこの探索で何かわかった場合は、そこから対策を臨機応変に練る」

「へー、とにかくここに居座るために頑張るって感じじゃん」

「もうそうするしかない。この家離れてどうするかっていうのが考えらんねえから。お前はどうすんだ？出ていくつもりはあんのか？」

「どうだろ。まあゆっくり考えるわ、流れで」

「出たよ適当発言」

「そうですね。とりあえずじゃあ探索しますか」

前日に続き懐中電灯片手に部屋を出る。

玄関ホールの階段を慎重に光で照らしながら上りきる。

「この階は廊下両サイド部屋なんだ。1階は片側窓だけど」

「1階は窓側が中庭だからな」

「中庭感の全くない景観だけどね。ただの荒地でしかない」

とりあえず手近な所からと、階段に近い左側のドアを開ける。

そこは整頓された寝室だった。

ベッドとデスクの間にある窓の、厚いカーテン越しにうつすらと陽光が滲んで入っている。

萩原は懐中電灯を消すと、部屋へズカズカと入り、閉められたカーテンを無造作に開ける。

さんさんと太陽が降り注ぎ、部屋のなかを明るくする。

埃こそ被っているが、カーテンやベッドは上質なものが使われていて、高級感あふれる内装だった。

「うわ広っ、ベッドでか！」

「いいトコのお貴族様の部屋ってかんじだな」

「お貴族様読書家だね。この本の量すごい？」

壁の左側に沿ってずらりと本棚が並んでいた。

「……うわ、机の上は荒れてんな」

窓側に向かって置かれたデスクの上には、紙と本の山がこんもりと出来ていた。

埃を払い、何か書かれた紙を一枚手に取ってみる。

「……お、なんか見覚えのある落書きが書いてあんな」

「どれどれ？あ、ホントだ。1階の光線グッズの箱に描いてあった模様じゃん。あれ、ここに住んでた人が作ったんだ」

「つかむしろ、この部屋の人を作ったんじゃないの？机の荒れ方がなんとも研究者っぽいしな」

「ホント掃除嫌いだねこの人。俺かっていう。あーあー、なんかリツチなもんが埋まっちゃって」

紙の山の下敷きになってしまっている、金属製の小物をわさっと取り出す。

上面部は花模様でカメオのような艶やかな素材で出来ており、凝った浮き彫りがふんだんに施された手のひらサイズの箱だ。パカッと無造作に開く。なかには何も入っていなかった。

「……！」

代わりに中からは、美しいオルゴールの音色があふれ出た。明るく綺麗な曲調だがとくに有名な曲というわけでは無さそうだ。

「……この曲」

だが月島と萩原は、流れる音色に背からぞわつとしたものを感じ、

身震いする。

狐につままれたような表情で固まり、長調から短調へと切り替わったオルゴールに聴き入る。

「なんだったつけ」

「……どつかで聞いたことあるけど思い出せねえ現象、だな」

「まあいいや、気に入った。持ってかえろっ」

月島はササッとポケットにオルゴールを突っ込むと、机の上をがさがさと漁る作業に戻る。

「おい、さり気なくコソドロのような動きをしてんじゃねえぞ。物に目眩んでも、持ち出さないっていう決まり忘れたのかよ」

「売って一儲けする気はないってば。あくまでこの子は個人的趣味のBGM要員にするつもりだって。ていうかそれより、この部屋の人、相当電波さんだったみたいだよ」

「電波さん？」

パラパラと机上の書きなぐった紙を流し見た月島が、萩原に読むよう促す。

「ひたすら魔法について書いてある」

「は？……あー、うわ」

3枚ほど並べて、メモを流し見た萩原も納得の表情になる。

理系の研究者と思われるいた部屋の持ち主は、なんと魔法を信じているメルヘンな人だったようだ。

「確かにやべえな。魔法でタイムトラベルする気だぞこの人」

「うつへ、やれるもんならやってみたいわー」

「でも……あながち馬鹿には出来ないんじゃないか？」

「え、なにどうしたの？魔法信じちゃったの？お前も電波化したの？気を確かに」

「うるせえよ。いやだって、あの赤い光線食器作ったの、この部屋の人ってのはほぼ確定だろ？……その作った人が魔法について研究してるんだから、ただ頭のおかしい奴って決め付けんの早計じゃねえか？」

「つまりあの食器たちが、マジで魔法で出来たものだって言いたいのか？最先端技術で出来たものじゃなく」

「……否定は出来ないだろ」

「……まあ、ホラーも肯定された今、確かに否定は出来ないかもね」

月島は難しい表情を作ったあと、思案顔で本と紙の山を崩していく。

「この部屋おもしろいね。よく調べた方が良さそう。ホラーの次は魔法ってか」

萩原も黙って肯定を示すと、ぐるりと辺りを見渡し、部屋右端の棚

に目をとめた。

そこには台も無いのに宙に浮く謎のオブジェなど、おかしいものがたくさん無造作に置かれていた。

「おい葵……なんかへんなもんが」

呼び掛けながら振り返った先には、本棚の前でしゃがみこむ月島が居た。

「何してんだ？」

「机の上の本、どっから出したんだろうと思って本棚見てたら、なんか彫ってあんのに気付いて」

そう言い指差す本棚の縁には確かに、この屋敷でそろそろお馴染みのオシャレな魔方陣が彫られていた。

「ここだけにポツンと一個。怪しすぎる」

「箱みたいにさわってみたら何か起こんじゃないの」

「いやそれが全然全く」

魔方陣をスイッチのように指先で連打するが、うんともすんともいわず、何も起きない。

お手上げとばかりに立ち上がり、デスクチェアに寄りかかる。

「ふうん？」

代打に萩原が本棚へと近づきしゃがみこむ。

そしてまじまじ魔方陣と見つめ合ってから、そつと指先で触れた。

「うおっ！」

触れた瞬間、魔方陣が一瞬白い閃光を放ち、驚いた萩原が立ち上がって後ずさる。

月島も目を点にして魔方陣を眺めているなか、本棚全体がカタカタと震え出した。

そして2人の目の前で、本棚はパシンと発光すると、表面全体にぼうつと魔方陣が浮かび上がる。

みるみるうちに本棚は魔方陣に吸い込まれ、丸ごと消え去ってしまった。

だがすぐに魔方陣のなかから空間をふさぐ物が現れた。

それは豪華な内装に相応しくない、焦茶色をした温かみを感じさせる木目調のドアだった。

ドアが壁をふさぐと、ふつと魔方陣は消えた。

「……………」

まさに絶句。

目の前の事象が終わっても、月島と萩原は息を呑んだまま固まっていた。

言い逃れの出来ないモノを見てしまった。

たった数秒のことであったが、ハリウッド映画級の美麗CGでしか見たことないようなそれは、現実からあまりにもかけ離れたものだった。

31話・お屋敷探検、最終回！@2階（後書き）

この続き、しばらく悩めます（´・`）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2300w/>

幽霊洋館ホームレス

2011年11月15日07時05分発行